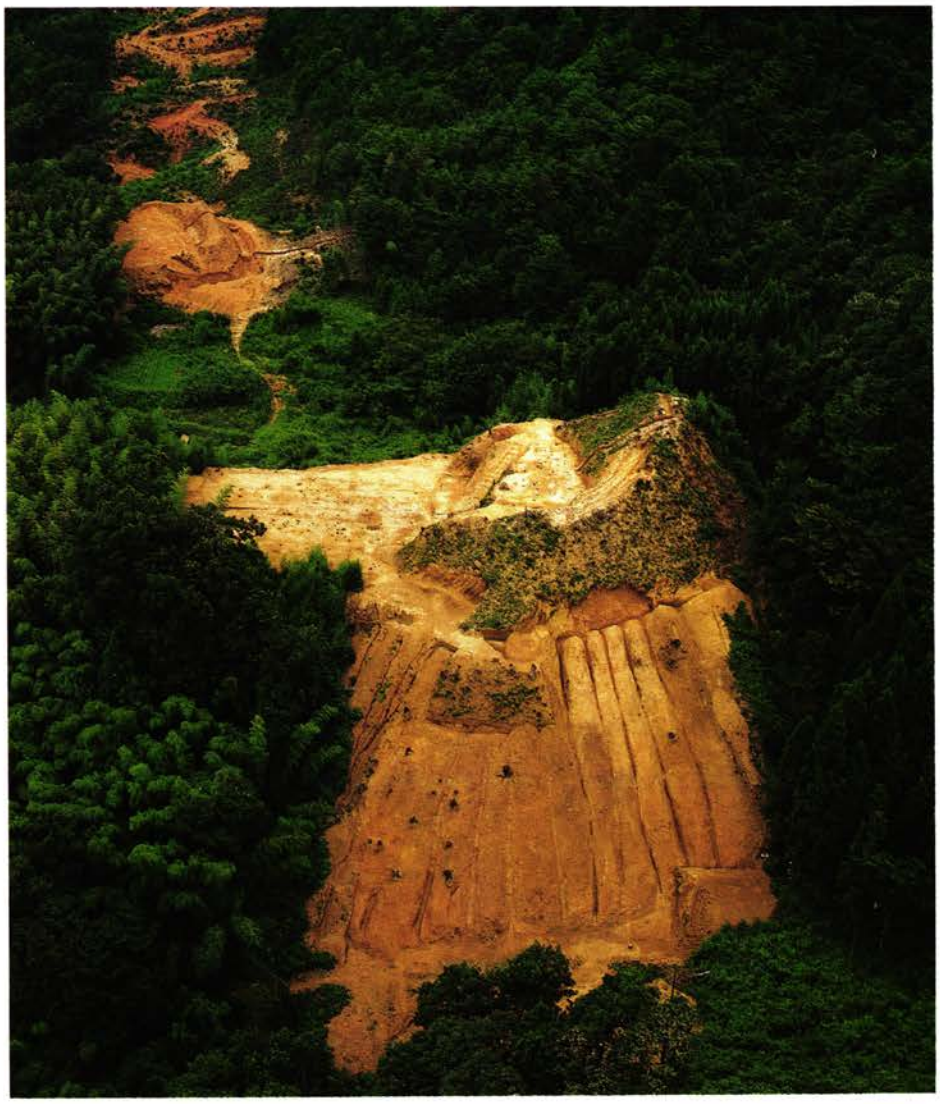
京都府遺跡調査報告書

第 14 冊

平山城跡・平山東城跡

1990

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター



平山城跡全景（西から）

序

中世から近世の城郭の一つとして，歴史上にはほとんど知られていない綾部市七百石町の平山城・平山東城は，わずかに江戸時代に編纂された『丹波志』にその存在の痕跡が見られる程度でありました。

近年，この地に近畿自動車道舞鶴線が計画されたため，事業に先立つ遺跡分布調査によって城跡の存在が知られるようになり，これこそが『丹波志』にいう城跡であるとの予想のもとに，財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが発掘調査を実施することになりました。本書は，この平山城跡・平山東城跡の調査報告書であります。本文中に詳しく記載されていますが，平山城跡では畝状竪堀群と呼ばれる巨大な防御施設があり，こういった遺構の調査は，全国的にみても珍しいものであります。この時代の丹波地域を考える上で，重要な資料になると存じます。

本調査に当たっては，発掘調査を依頼された日本道路公団大阪建設局をはじめ，京都府教育委員会，綾部市教育委員会といった関係諸機関の御協力，御助言を受けただけでなく，酷暑・厳寒の中で多くの方々が熱心に各作業に従事していただきました。ここに記して，感謝いたしたいと存じます。

平成２年12月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長　福　山　敏　男

凡　例

1．本書は，京都府綾部市に所在する平山城跡・平山東城跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は，日本道路公団大阪建設局の依頼を受けて，財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが実施した。調査にかかる経費は，日本道路公団が負担した。

3．現地の発掘調査は，昭和61・62年度の２か年行い，整理・報告書の作成は平成元・２年度の２年間行った。

4．発掘調査は，調査第２課辻本和美・小山雅人・水谷寿克・藤原敏晃(現弥栄町立弥栄中学校教諭)・鍋田　勇(現大阪府埋蔵文化財協会)が担当して行った。

5．本書の執筆は，水谷寿克・藤原敏晃・鍋田　勇・森島康雄・土橋　誠が行った。

6．図面のトレースは，丹新千晶・伊勢田恵美子が行った。

7．図中の方位は、すべて真北を示す。

8．本書の編集・校正は，後藤尚規の協力を得て，水谷寿克・鍋田　勇・森島康雄・土橋誠が担当した。

本　文　目　次

はじめに …… 1
第１章　位置と環境 …… 5
　第１節　地理的環境 …… 5
　第２節　歴史的環境 …… 7
第２章　平山城跡 …… 10
　第１節　城の構造 …… 10
　第２節　調査の経過 …… 11
　第３節　検出遺構 …… 14
　第４節　出土遺物 …… 29
第３章　平山東城跡 …… 37
　第１節　城の構造 …… 37
　第２節　調査の経過 …… 38
　第３節　検出遺構 …… 38
　第４節　出土遺物 …… 42
第４章　総括 …… 45
　第１節　検出遺構 …… 45
　第２節　出土遺物 …… 47

挿　図　目　次

第１図　近畿自動車道舞鶴線関係遺跡位置図 …… 4
第２図　調査地位置図及び周辺遺跡分布図 …… 6
第３図　平山城跡・平山東城跡地形図……11
第４図　平山城跡　地形測量及び調査範囲図……12
第５図　平山城跡　第一郭・第二郭検出遺構図……15
第６図　平山城跡　第一郭南北（Ｉライン）・東西（17ライン）土層断面図……18
第７図　平山城跡　第二郭検出遺構図……19
第８図　平山城跡　建物跡ＳＢ05実測図……22
第９図　平山城跡　第二郭南北（Ｉライン）土層断面図……23
第10図　平山城跡　畝状竪堀群平面図……25
第11図　平山城跡　畝状竪堀群断面図……27
第12図　平山城跡　土塁断面図（Ｉライン）……28
第13図　平山東城跡　地形測量及び調査範囲図……37
第14図　平山東城跡　主郭検出遺構図……39
第15図　平山東城跡　土坑ＳＫ02実測図……40
第16図　平山東城跡　土塁・空堀断面図……41
第17図　一乗谷朝倉館跡検出遺構図（ＳＢ03・ＳＢ41）……46
第18図　平山城跡　検出遺構位置図……51
第19図　平山城跡　遺物出土状況図(1) …… 52
第20図　平山城跡　遺物出土状況図(2) …… 53

付　表　目　次

第１表　近畿自動車道舞鶴線（８次区間）関係遺跡一覧 …… 3
第２表　平山城跡出土銅銭一覧表……36
第３表　平山東城跡出土銭貨一覧表……44
第４表　平山城跡出土土器類組成表……50

図 版 目 次

図版第１　平山城跡　出土遺物実測図(1)
図版第２　平山城跡　出土遺物実測図(2)
図版第３　平山城跡　出土遺物実測図(3)
図版第４　平山城跡　出土遺物実測図(4)
図版第５　平山城跡　出土遺物実測図(5)
図版第６　平山城跡　出土遺物実測図(6)
図版第７　平山城跡　出土遺物実測図(7)
図版第８　平山東城跡　出土遺物実測図(1)
図版第９　平山東城跡　出土遺物実測図(2)
図版第10　平山東城跡　出土遺物実測図(3)
図版第11　平山東城跡　出土遺物実測図(4)
図版第12　平山城跡(下)・平山東城跡(上)全景(調査後)
図版第13　平山城跡全景(調査後)
図版第14　(1)平山城跡全景(西から)　(2)平山城跡全景(南から)
図版第15　(1)平山城跡　第一郭及び第二郭遺構検出状況(南から)
(2)平山城跡　第一郭遺構検出状況(南から)
図版第16　(1)平山城跡　土坑ＳＫ01 検出状況(南から)
(2)平山城跡　土坑ＳＫ03 検出状況(北東から)
図版第17　平山城跡　第二郭全景
図版第18　(1)平山城跡　第二郭遺構検出状況(西から)
(2)平山城跡　建物跡ＳＢ05検出状況(南から)
図版第19　(1)平山城跡　建物跡ＳＢ04(右)・ＳＢ05(左,石敷除去後)
(2)平山城跡　遺構検出状況(東から)
図版第20　(1)平山城跡　ＳＸ02 検出状況(南から)
(2)平山城跡　ＳＸ01 検出状況(南から)
図版第21　(1)平山城跡　第二郭土層堆積状況(東から)
(2)平山城跡　土塁構築状況(北西から)
図版第22　(1)平山城跡　畝状竪堀群(調査前,西から)
(2)平山城跡　畝状竪堀群(調査後,西から)

図版第23　(1)平山城跡　畝状竪堀群上部・横堀検出状況(北西から)
(2)平山城跡　畝状竪堀群上部・横堀検出状況(南から)
図版第24　(1)平山城跡　畝状竪堀群流入土堆積状況(北西から)
(2)平山城跡　竪堀12流入土堆積状況(西から)
図版第25　平山東城跡全景
図版第26　(1)平山東城跡全景(南から)　(2)平山東城跡全景(東から)
図版第27　(1)平山東城跡　遺構検出状況(南西から)
(2)平山東城跡　建物跡ＳＢ01・ＳＢ02 検出状況(南から)
図版第28　(1)平山東城跡　土坑ＳＫ01 検出状況(西から)
(2)平山東城跡　土坑ＳＫ01 完掘状況(西から)
図版第29　(1)平山東城跡　土坑ＳＫ02 検出状況(南から)
(2)平山東城跡　ＳＸ01 検出状況(南西から)
図版第30　(1)平山東城跡　土塁(北から)　(2)平山東城跡　土塁(西から)
図版第31　(1)平山東城跡　土塁断ち割り(北西から)
(2)平山東城跡　土塁構築状況(北西から)
図版第32　(1)平山東城跡　空堀流入土堆積状況(Ｋライン,西から)
(2)平山東城跡　空堀流入土堆積状況(Ｇライン,西から)
図版第33　(1)平山城跡　建物跡ＳＢ01に伴う焼土出土遺物(土師器皿)
(2)平山城跡　建物跡ＳＢ01に伴う焼土出土遺物(土師器皿)
図版第34　(1)平山城跡　建物跡ＳＢ01に伴う焼土出土遺物(白磁・青白磁)
(2)平山城跡　建物跡ＳＢ01に伴う焼土出土遺物(白磁・青白磁)
図版第35　(1)平山城跡　建物跡ＳＢ01に伴う焼土出土遺物(染付,青磁,瀬戸・美濃)
(2)平山城跡　建物跡ＳＢ01に伴う焼土出土遺物(染付,青磁,瀬戸・美濃)
図版第36　(1)平山城跡　建物跡ＳＢ01に伴う焼土出土遺物(丹波焼・越前焼・瓦質土器)
(2)平山城跡　建物跡ＳＢ01に伴う焼土出土遺物(丹波焼・越前焼・瓦質土器)
図版第37　(1)平山城跡　土坑ＳＫ01出土遺物,他　(2)土坑ＳＫ01出土遺物,他
図版第38　(1)平山城跡　建物跡ＳＢ04・05に伴う焼土出土遺物(白磁・青磁・青白磁・染付)
(2)平山城跡　建物跡ＳＢ04・05に伴う焼土出土遺物(白磁・青磁・青白磁・染付)
図版第39　(1)平山城跡　建物跡ＳＢ04・05に伴う焼土出土遺物(瀬戸・美濃焼,土師器皿)
(2)平山城跡　建物跡ＳＢ04・05に伴う焼土出土遺物(瀬戸・美濃焼,土師器皿)
図版第40　(1)平山城跡　建物跡ＳＢ04・05に伴う焼土出土遺物(丹波焼・瓦質土器)
(2)平山城跡　建物跡ＳＢ04・05に伴う焼土出土遺物(丹波焼・瓦質土器)

図版第41　平山城跡　土坑ＳＫ04出土遺物
図版第42　(1)平山城跡　遺構に伴わない遺物(土師器皿)
(2)平山城跡　遺構に伴わない遺物(白磁・青磁)
図版第43　(1)平山城跡　遺構に伴わない遺物(染付)
(2)平山城跡　遺構に伴わない遺物(瀬戸・美濃,肥前磁器)
図版第44　(1)平山城跡　遺構に伴わない遺物(備前焼・丹波焼・越前焼・瓦質土器・焼け壁)
(2)平山城跡　建物跡ＳＢ01に伴う焼土出土遺物(青白磁)　(3)平山城跡　銅銭
図版第45　(1)平山城跡　金属製品　(2)平山城跡　石製品
図版第46　(1)平山東城跡　遺構に伴う遺物　(2)平山東城跡　遺構に伴わない遺物
図版第47　(1)平山東城跡　遺構に伴わない遺物
(2)平山東城跡　遺構に伴わない遺物
図版第48　平山東城跡　金属製品,石製品,銭貨

平山城跡・平山東城跡発掘調査報告書

はじめに

平山城跡・平山東城跡は，近畿自動車道舞鶴線建設に伴う事前の埋蔵文化財調査の一貫として，昭和61・62年度の２か年を要して発掘調査を実施した。

近畿自動車道舞鶴線(以下『近舞線』と呼ぶ)は，兵庫県美嚢郡吉川町から京都府舞鶴市に至る高速自動車道である。この自動車道は，京都府北部の丹波・丹後の開発や経済の活性化，そして京阪神地域への交流などを目的として計画され，昭和63年３月に中国自動車道吉川ＪＣから福知山ＩＣまでの区間(近舞線７次区間)が開通した。また福知山から西舞鶴間（近舞線８次区間)は平成４年度開通を目指し，さらに昭和63年２月近舞線は福井県敦賀市まで区間延長されることが決定し，近畿自動車道敦賀線と名称変更された。

近舞線の建設に伴う埋蔵文化財調査(総称して『近舞線関係遺跡』と呼ぶ)は，昭和54年度から京都府教育委員会が実施し，昭和56年度から当調査研究センターが引き継いで実施している。近舞線７次区間の調査は，昭和60年度にすべての現地調査を終了し，すでに報告書(『京都府遺跡調査報告書』第10冊　1988)を刊行している。

近舞線８次区間の調査は，福知山市から西舞鶴までの延長約22.7km区間を対象として昭和61年度から実施した。この区間には，昭和58年度に実施した遺跡分布調査で17遺跡を確認し，その後の調査で新たに６遺跡が路線内に含まれることが判明している。

現地調査は，昭和61年11月から実施し平成２年３月にすべての調査を終了した。各年度に調査した遺跡については，遺跡調査一覧にその概要を報告しているが，綾部市・福知山市を帯状に横断したこの調査は，弥生時代から近世に至るまで各時期の貴重な資料をえて，この地域の歴史を知るうえで多大な成果を得ている。主な遺跡では，全長81mの大円墳で中丹地域で最大規模を誇る私市円山古墳，500基を数える土坑(墓)を検出した三宅遺跡，畝状竪堀群を面的に調査し中世城跡の防御施設が明らかにされた平山城跡等がある。しかし，現地調査を優先して実施したため，各年度に刊行する遺跡調査概要は，十分な整理作業も行えず刊行したものもあることから，平山城跡・平山東城跡・野崎古墳群・小西町田遺跡・三宅遺跡・福垣北古墳群・興遺跡・観音寺遺跡の８遺跡については，平成２年度以降整理作業を進め随時報告書を刊行する予定である。

近舞線(８次区間)関係遺跡の調査体制は，以下のとおりである。

調　査　組　織

調査主体者　　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　理事長　福山敏男

調査責任者　　荒木昭太郎　(事務局長　昭和61～平成元年度)

調査担当責任者　堤圭三郎　(調査課長　昭和61年４月～６月)

中谷雅治　(調査課長・次長　昭和61年６月～平成元年度)

杉原和雄　(調査課長　昭和62～平成元年度)

事務局責任者　　白塚　弘　(総務課長　昭和61年４月～６月)

中西和之　(総務課長　昭和61年度)

田中秀明　(総務課長　昭和62・63年度)

山本　勇　(次長　平成元年度)

調査担当者　　長谷川達(主任調査員　昭和61年４月～６月)，小山雅人(主任調査員　昭和61年６月～昭和62年３月)，水谷寿克(調査第２係長　昭和62～平成元年度)，引原茂治(主任調査員　昭和63・平成元年度)，藤原敏晃(調査員　昭和61年度)，細川康晴(調査員　昭和61年度)，鍋田　勇(調査員　昭和61～平成元年度)，竹原一彦(調査員　昭和62～平成元年度)，三好博喜(調査員　昭和62年度)，石井清司(調査員　昭和62年度)，黒坪一樹(調査員　昭和62～平成元年度)，岡崎研一(調査員　昭和63年度)，田代弘(調査員　昭和63・平成元年度)，小池　寛(調査員　平成元年度)

平山城跡・平山東城跡は，分布調査の成果により平山谷城館跡・中城館跡と呼称して調査を実施したが，概報作成時に平山城館跡・平山東城館跡と改名した。しかし，その後整理・研究作業を進めた結果，城郭としての構造がより一層明らかになったので，本報告にあたり，名称を平山城跡・平山東城跡と改めた。(注1)

現地調査は，昭和61年11月17日から昭和62年３月20日まで，昭和62年４月20日から昭和62年８月21日までの約８か月を要し，調査面積約3,800㎡の調査を実施した。

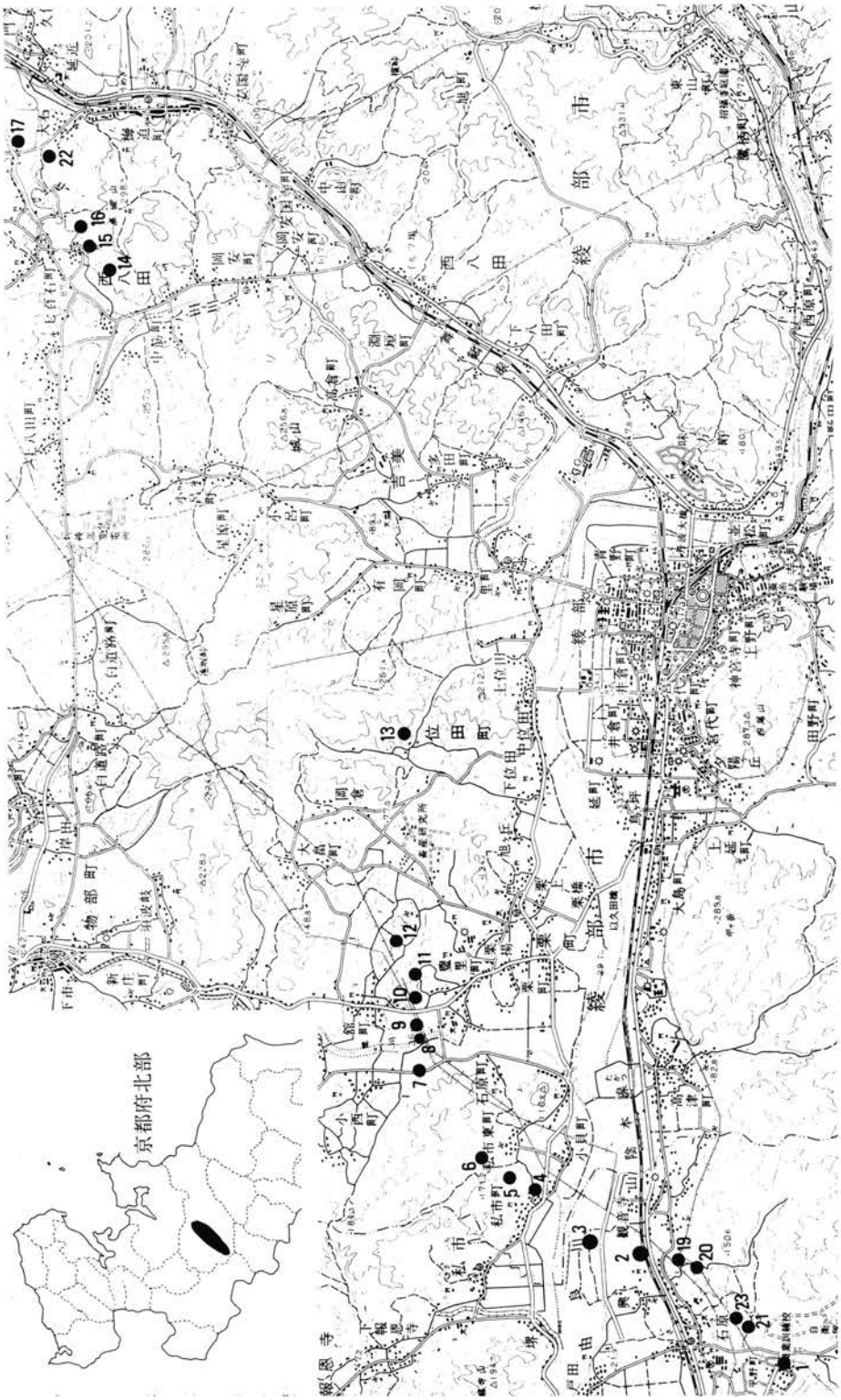
調査は，上記調査員藤原敏晃・鍋田　勇が担当して実施し，現地作業では地元七百石町の有志の方々や学生諸氏の協力を得た。(注2)

また調査に際しては，日本道路公団大阪建設局福知山工事事務所・綾部市教育委員会・綾部史談会・地元各自治会・京都府教育委員会・京都府中丹教育局・京都府立丹後郷土資料館等関係諸機関諸氏より多大な協力を得た。さらに，大橋康二・亀井明徳・川上　貢・北垣総一郎・北野隆亮・久保智康・田中照久・中井　均・中村孝行・福山敏男・藤澤良祐・藤田邦雄・村田修三・山上雅弘・吉岡康暢(50音順)の各氏には，専門的な立場より御助言を頂いた。記して謝意を表したい。

(水谷)

第１表　近畿自動車道舞鶴線（８次区間）関係遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	調査年度	調査面積㎡	概要
15	平山城跡	綾部市七百石町	61	1,500	高城の支城。連郭式山城。礎石建物跡・柵跡・土坑・石組状遺構・畝状竪堀群。15～16世紀。
			62	2,300	
16	平山東城跡	綾部市七百石町	61	1,000	東西30m・南北40mの単郭式山城。空堀・土塁・掘立柱建物跡。
17	野崎古墳群	綾部市高槻町	61	6基	前方後円墳(全長28m)1基・円墳5基。削平された古墳群。5世紀末～6世紀。
14	鍛冶屋谷古墓	綾部市七百石町	61	40	積み石遺構
7	小西町田遺跡	綾部市小西町	62	5,000	弥生末～古墳時代初頭の溝・土坑。奈良末～平安時代の掘立柱建物跡。緑釉陶器他。
4	小貝遺跡	綾部市小貝町	62	1,400	弥生時代後期の方形周溝墓1基。奈良時代の掘立柱建物跡・柵列。
10	福垣城館跡	綾部市豊里町	62	500	堀切り・横堀・曲輪・礎石建物跡。
11	福垣北古墳群	綾部市豊里町	62	4基	以久田野古墳群(総数120基以上)に北接する11基からなる古墳群。方墳2基・円墳5基を調査・5世紀前半～6世紀初頭。
			63	3基	
9	三宅遺跡	綾部市豊里町	62	5,500	弥生時代中期の方形周溝墓。古墳時代初頭の土坑群。中世の掘立柱建物跡。土坑群は総数500基の大規模な墓壙群か。
			63	3,000	
8	三宅4号墳	綾部市豊里町	62	1基	墳丘の一部残存。墳丘盛土観察。
5	私市円山経塚	綾部市私市町	62	1基	銅製経筒・鉄鏃・土師器皿・瓦器椀が出土。
5	私市円山古墳	綾部市私市町	63	1基	全長81m造り出し付円墳。三段築成，葺石，埴輪。甲冑・胡籙・鏡・鉄刀等。
6	馬場池東方遺跡	綾部市私市町	63	1,200	弥生時代前期の土器などが出土。
12	舘２号墳	綾部市舘町	63	1基	削平された古墳。
13	赤田遺跡	綾部市位田町	63	1,500	古墳時代後期の竪穴式住居跡２基。
2	興遺跡	福知山市興	63	2,000	弥生時代中期の溝・土坑・分銅形土製品。中世の掘立柱建物跡。
			元	1,200	
3	観音寺遺跡	福知山市観音寺	63	1,400	弥生時代中期の溝。中世の掘立柱建物跡。
			元	4,000	
21	火柴原古墳	福知山市石原	63	1基	遺構・遺物なし。池改修時の盛土。
19	西山館跡	福知山市観音寺	元	100	顕著な遺構・遺物なし。
20	小谷古墳	福知山市観音寺	元	1基	
22	奥大石古墳群	福知山市観音寺	元	3基	方墳3基(一辺約11m)。蛇行剣・針・刀子等。５世紀初頭。
23	ヌクモ古墳群	福知山市石原	元	２基	方墳２基。銅鏡(龍虎鏡)・鉄剣・鉄鉾等。５世紀前半。



第１図　近畿自動車道舞鶴線関係遺跡位置図

第１章　位置と環境

第１節　地理的環境

平山城跡・平山東城跡の所在する京都府綾部市七百石町は，綾部市市街地の北方約6.5kmに位置する。

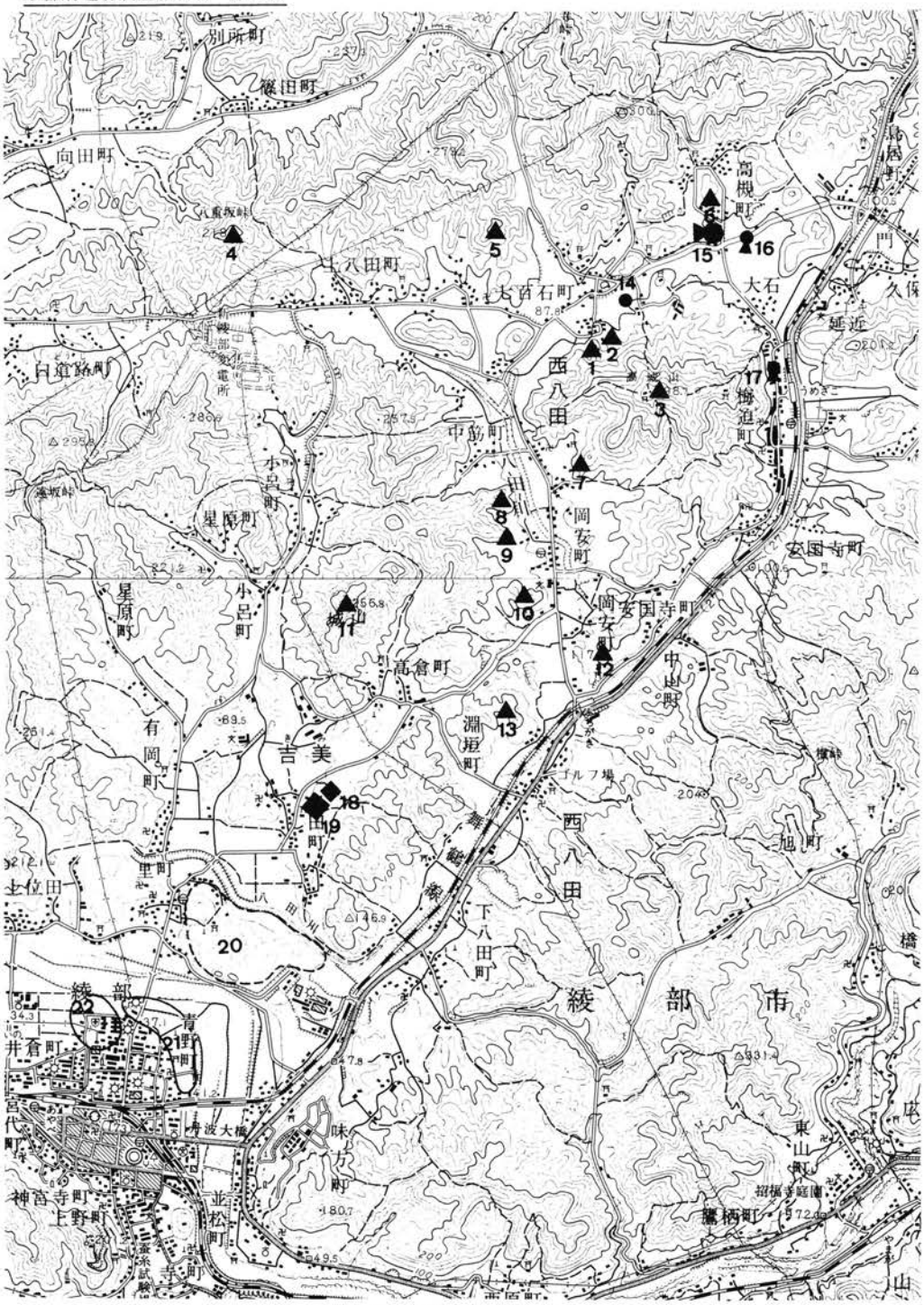
綾部市は，京都府北部の丹波山地，行政区画ではいわゆる中丹地区と呼ばれる地域にあたり，その市街地は，福知山盆地の東半分を占め，その中央部を由良川が貫流している。丹波山地は，標高600～800mの定高性の山頂が連なる隆起準平原で，大きくみると東高西低の傾動地塊となっている。この山地のなかには由良川やその支流による狭谷が発達している。地質は，山地部では中・古生層，平野部では沖積層・段丘層・変成岩が占める。

三国岳に源を発する京都府北部最大河川の由良川は，大小100あまりの支流と併合し日本海若狭湾へ注いでいる。流路の長さは146km，流域の面積1,880㎡に及ぶ。由良川は，綾部市域では八田川・安場川・犀川・荒倉川の南北方向に流れる各支流と合流し蛇行して西流する。その中流域では東西に長い沖積平野が綾部市から福知山市にかけて広がる綾部・福知山盆地を形成し，盆地の下流では流れを北東に転じ河守盆地を形成して若狭湾河口部まで続いている。

綾部・福知山盆地は，古来から由良川の本流やその支流の形成した谷間の道を利用した陸路・水運によって周辺地域と結ばれ，山陰地域や日本海地域との交通路の要衝の地として重要な位置を占めている。

平山城跡・平山東城跡は，由良川の支流八田川の上流域に位置する。この地域には，市内最大規模と言われる高槻茶臼山古墳や上杉１号墳・野崎５号墳の３基の前方後円墳が所在し，円墳では径約40mの規模を持つ政次古墳群をはじめ，塚廻り古墳群・八幡宮古墳群など数基からなる古墳群が点在する。八田川下流域に位置する吉美盆地には，一辺約53mの大型方墳の聖塚や菖蒲塚が所在し，その周辺には，栗ケ丘古墳群・田坂野古墳群・久田山古墳群などの群集墳が点在する。このように，古墳時代中・後期では，在地系の大型古墳が築かれ，当地が古墳時代においても重要な地域であったことがうかがえる。また，由良川と合流する地域においては，弥生時代から中世に至る複合集落遺跡である青野遺跡・青野西遺跡が由良川南岸の河岸段丘上に広がっている。

（水谷）



第２図　調査地位置図及び周辺遺跡分布図(1/50,000)

１．平山城跡、２．平山東城跡、３．高城城跡、４．八重坂城跡、５．水坂城跡、６．高槻城跡、７．嶋間城跡、８．姫城跡、９．岡安城跡、10．西八田城跡、11．高倉城跡、12．中山城跡、13．北谷城跡、14．政次古墳、15．茶臼山古墳、16．野崎古墳、17．上杉古墳群、18．菖蒲塚古墳、19．聖塚古墳、20．久田山古墳群

第２節　歴史的環境

平山城・平山東城は，綾部市七百石町に所在し，古代の丹波国何鹿郡八田郷にあたる。古代の郷は，霊亀元(715)年式によって成立したもので，天平13(741)年以後に国郡郷の体制になったといわれている。(注3) 古代の郷制は，50戸の戸数で１郷としているため，戸の逃亡や戸の編附などにより，時期によって郷の境界線が小幅ながら移動する性格を持っていた。そのため，郷を完全な境界線で分割することはできず，おおよその地域を比定できる程度である。しかし，戸の状況が把握できなくなる10世紀以降には，このような状況も次第になくなり，ほぼ郷の境界線も固まり，中世的な郷や庄が成立していったようである。

何鹿郡八田郷の地は，10世紀にはある寺院の荘園として史上に姿を現わす。金比羅宮文書の中の天元３(980)年の「某寺資材帳」によれば，(注4) 丹波国の荘園として「矢田庄二町餘」が見え，「故住持御忌日料」と注書きされている。郡名が書かれていないため，必ずしも何鹿郡と断定することはできないが，「ヤタ」と読めることから，この矢田庄が八田郷であることはほとんど確実と思われる。ただ，ここで八田郷がはじめて「矢田庄」として，荘園名で出てはくるが，この寺院領はわずか「二町餘」であるため，残りの地域がどのような状況であったかは知ることができない。

なお，この寺院については，この資材帳に，「元是東大寺僧朝南大法師建立也」と見えているように，東大寺との関連が深い寺院であったことが推測される。しかし，それ以外の寺名，場所などについては文書に欠損部があって，不明となっている。

このように，何鹿郡八田郷の地は，10世紀以降，八田荘(矢田庄)として史上に見え，しかも一円所領ではなく，いくつかの本所領家に支配される地域であったことが推定されている。『荘園志料』には，「和簡禮経五」という史料をあげ，ここに，「丹波国八田荘」が見えることを指摘している。(注5) これは，応永６(1399)年の史料であるが，この史料を見る限りでは，どこかの一円所領のようにも見えるが，その後の史料にもあるように，上杉氏や安国寺の荘園として出てくることから，一つの荘園として立荘されたことはなく，総称として「八田荘」の名称が存在したのかもしれない。

室町時代の古文書によれば，八田荘の地はさまざまな名称で呼ばれていることがわかる。『安国寺文書』文保元(1317)年８月20日付けの「比丘尼心会譲状」によれば，「譲渡丹波国高槻保内守清名田畠事」と見え，高槻保が存在したことがわかる。高槻保は，現在の高槻町にあたり，七百石町の東に位置し同じ八田郷内に属する。この文書には，高槻保守清名を源資平に譲る旨が記されており，高槻保が荘園と同じく名田単位で分割された負名体制をとっていたことがわかる。(注6) また，この守清名は，建武５(1338)年４月４日付けの「暹快

奉書」に「丹波国高槻保内守清名主職事，任下司資平之譲，領掌不可有相違」と見え，高槻保守清名は，資平から安国寺(光福寺ともいう)へ寄進されていることがわかる。室町時代のはじめには，高槻保守清名についてのみではあるが，比丘尼心会一源資平一安国寺へとその所有が変化したことがわかる。安国寺が高槻保守清名を所有することを幕府が認めた形跡がある。貞治２(1363)年９月26日付けの「左衛門尉某安堵状」には「丹波国高槻保守清名事，任相伝之旨，知行不可有相違之状，如件」とあり，「光福寺塔頭侍者」あてに「左衛門尉」から出されている。これによる限り，室町幕府は安国寺による高槻保守清名の領有を認めたことになる。このように，高槻保内の守清名についてのみ，そのようすがわかるが，高槻保内のその他の状況については全く知ることができない。

次に八田郷内上村の地であるが，この地域は現在の七百石町・上八田町にあたる。この地は，支配が入り組んでおり，室町時代の地域的所有形態の一つのあり方を示している。永和３(1377)年２月28日付け「室町時代奉行人連署奉書」によれば，「丹波国八田郷上村内光福寺々領号酒殿分，貞行名以下寺領等事，任代々寄進之旨，可被停止給主之綺之由候也，依仰執達如件」とあり，上村の内の貞行名以下が安国寺領として本領安堵されている。また，上杉家文書の中に，応永33(1426)年７月14日付けの「将軍家足利義持下文」があり，そこには，「丹波国漢部郷并八田郷上村事，止料所之儀，所返付上杉安房守憲実也，如元可全領知状如件」と見え，八田郷上村のどこかが室町幕府の料所となっており，それが上杉憲実に返付されている。すなわち，元来，上杉氏の領有であったものが室町幕府の料所となり，応永33年の段階で元の上杉氏の領有に戻ったのである。この上杉氏は，山内上杉氏で，元来勧修寺流藤原氏の流れであり，丹波国上杉荘に住したことから上杉氏を名乗った。室町幕府の成立後，関東へ下り足利基氏の執事となり，後に関東管領となる。上杉荘は，現在の上杉町になり，やはり八田郷の地に含まれるため，上村の地にもその支配が及んだことは充分考えられる。

その他，岩王寺文書の中に，建武元(1334)年２月９日付けの「足利高氏寄進状」に「奉寄丹波国八田郷岩王寺，同郷内田地弐町事，右奉寄如件」とあり，足利高(尊)氏から岩王寺へ寄進されている。これだけでは八田郷内のどこの地が寄進されたかわからないが，同年４月13日付けの「源資憲・藤原利貞連署寄進田数目録」に，「御寄進　岩王寺八田郷上村内田地弐町事」と見えることから，八田郷上村にあったことになる。そうすると，先の応永33年に上杉氏の領有に帰した以外に，足利氏から岩王寺へ寄進されたところがあったことになる。あるいは，元上杉氏領有地で足利氏が持っていたところの一部を尊氏が岩王寺へ寄進し，残りを幕府料所として応永33年まで幕府が領有したのかもしれない。

以上のように，八田郷上村では，安国寺・上杉領・岩王寺領と分割されており，先の高

槻保と同じく，どこかの荘園として一円領有されていたのではないことが確認できる。

次は，八田郷本郷である。この地は，上杉家文書の応永5(1398)年11月24日付けの「将軍家足利義満下文」に，「丹波国八田郷内本郷事，所宛行上楹安房守憲定法師法名長見也者，守先例可沙汰之状如件」とあり，上杉氏の領有するところである。この下文の文章は，応永7(1399)年5月3日付けの「将軍家足利義満安堵下文」にも引用されている。そこには「丹波国八田郷事，雖宛行仁木兵部少輔義員，於彼郷内本郷者，任去応永五年十一月廿四日下文并当知行，上楹安房入道長基可全領知之状如件」とあり，八田郷は仁木氏の領有であったことが述べられている。仁木氏は足利氏の一門で，南北朝時代から勢力を持った一族である。この仁木氏が八田郷を領有していた時期のあることは注目すべき事実である。この仁木氏が領有したのが八田郷の全域でないことは，先の高槻保・上村が同時期に室町幕府や安国寺・岩王寺に支配されていた事実から窺うことができる。したがって，上杉氏が領有することになった事実からみて，現在の上杉町を中心とする地域，すなわち，八田郷本郷の地と推定してまちがいなかろう。この上杉憲実が八田郷本郷を領有するようになってからは，代々山内上杉氏が領有していったようである。

以上のように，何鹿郡八田郷の地は，八田荘とも呼ばれたりしたが，大きく高槻保・本郷・上村に分かれ(あと下村などがある)，荘園としての領有も，上杉氏・安国寺・岩王寺などに分割されて，一つにまとまることはなかった。

戦国時代になると，この地は大槻氏の支配下に入るようである。大槻氏は何鹿郡の国人で，高槻城主・大石城主・八田城主・栗村一尾城主・大畠城主・高津城主として大槻氏の名まえが『丹波志』・『大槻旧記』などに散見する。それぞれの城主の系譜関係については全くわからない。それは，大槻氏が守護代の内藤氏の配下にあり，明智光秀の丹波平定などで討伐された側にあるため，詳しい史料が残らなかったことに起因する。たとえば，安国寺文書の中に，天文17(1547)年10月13日付けの「内藤国貞折紙」があり，その宛所が「大槻長門守」となっている。その文末には，「可被処罪科猶於国不可存等閑之儀者也，仍状如件」とあって，上意下達の方式となっている。この文書では，安国寺へ臨時課役を勧進するように述べているが，大槻氏は内藤氏の配下として安国寺と関係していたことが理解される。天正7(1579)年の明智光秀による丹波平定により，多くの国人・土豪は滅亡するか，帰順するに至り，大槻氏についてもほとんどわからなくなってしまった。

現在，八田郷の地に高城山があり，そこに高城という中世山城が存在した。ここは，『丹波志』に見える「八田城」の可能性があり(注7)，大槻氏の居城と思われる。今回，報告の平山城・平山東城はこの丘陵の裾部にあり，この城と一体となる位置にある。この城も大槻氏と何らかの関係があるかもしれないが，史料がないため詳しくは全くわからない。(土橋)

第２章　平山城跡

第１節　城の構造

平山城跡は，綾部市七百石町に所在し，ＪＲ西日本舞鶴線梅迫駅の西北西約1.2kmに位置する。平山城跡及び平山東城跡は，標高298mの高城山と呼称される独立丘陵の北西側裾部に築かれている。高城山は，その名が示すとおり山頂に複数の郭等で構成される山城が存在している[注8]。この場所は，考古学的な調査はされていないため，詳細は不明であるが，丘陵の裾に位置する城と密接な関係にあることは十分予想される。平山城跡は，平地の集落との標高差約30mを測り，いわゆる平山城の範疇で捉えられるが，城の機能を把握する場合，隣接する平山東城や山頂の高城との関係を十分考慮に入れる必要があろう。

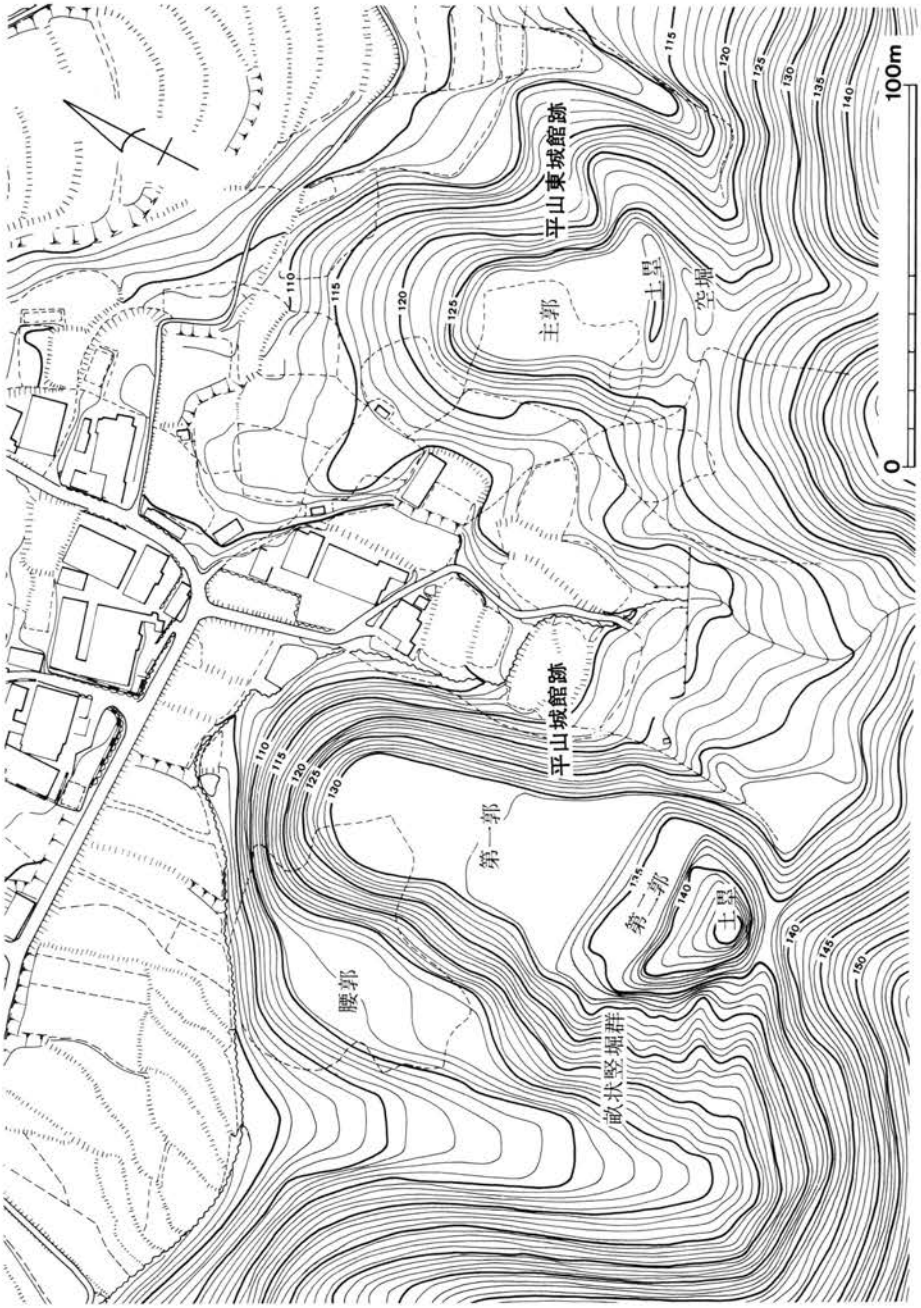
さて，城郭の研究では縄張りの解明が重要なひとつの視点とされる。他の城郭との比較検討や城郭内での機能分化を探るうえで城郭の基本的要素といえる。

平山城は，高城山から北へのびる尾根上に，二段の郭[注9]（下段＝第一郭，上段＝第二郭）と，第一郭西側に腰郭が存在する。防御施設としては，第二郭の背後に土塁・堀切，第二郭の西側斜面に14本の畝状竪堀群が造られている（第３図参照）。比較的幅の広い尾根を利用して構築されたシンプルな構成であるといえる。

地形測量図によると，第一郭の南北は約70m，東西は北側で約20m，南側で約35mを測る。この郭と下の水田面との標高差は約30mである。第二郭は，東西約40m・南北約10mで，第一郭と第二郭との標高差は約７mである。第二郭の背後に位置する土塁と第二郭との標高差は約８mあり，この土塁の南側，尾根を切断して造られた堀切の深さは約12mを測る。なお，第一郭から第二郭へかけての斜面，及び第二郭と土塁との境の斜面には，調査前に人為的な道が造られていたため，これ以前の状況は不明な点が多く，特に第一郭から第二郭にかけての通路は確認できていない。腰郭は，第一郭の西側の一段下がったところに位置し，第一郭との標高差は約18mを測る。この腰郭の南側，第二郭の西側斜面には畝状に竪堀がめぐる。特に，堀切に続くところは遺存状況がよく，調査前で約１m以上の深さがあった。さらに竪堀は，地形の観察から西側の斜面の大部分にめぐっていたものと推定される。

今回の調査範囲は，第一郭の南側半分，第二郭及び畝状竪堀群であり，第一郭の北側及び腰郭は含まれていない（第４図参照）。

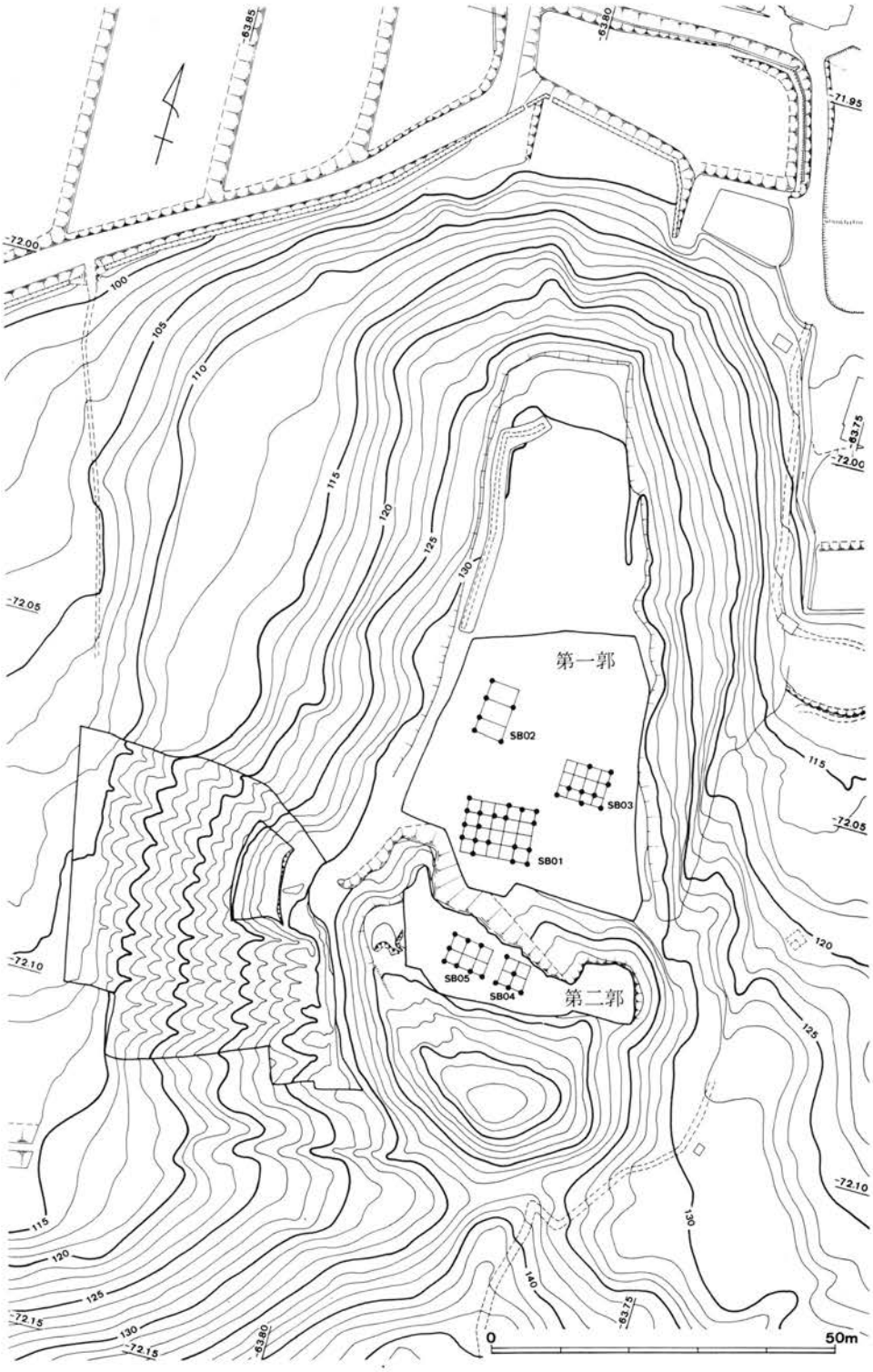
（藤原・鍋田）



第３図　平山城跡・平山東城跡地形図

第２節　調査の経過

〔昭和61年度〕　昭和61年11月17日から昭和62年３月20日まで約４か月の現地調査を実施した。調査は，まず調査範囲内を国土座標を基準にして４ｍ方眼の地区割りを行った。



第４図　平山城跡　地形測量及び調査範囲図

各地区の名称は，南北に南から北へ数字を，東西に，東から西へアルファベットを付し，その組み合わせで呼称している。遺物の取り上げは，この地区によっている。座標値は，10ラインがX＝-72,086.00，AラインがY＝-63,752.00である。

続いて，17ラインとHラインに沿ってトレンチを設定して土層の観察，遺構・遺物の有無の確認を行った。土層の断面を観察したことによって，表土下の暗茶灰褐色土層１層が包含層であり，この層の下にある暗黄褐色土(地山)に遺構が切り込んでいることを確認した。そこで，この暗茶灰褐色土を重機によって除去し，全面的な精査に移った。その結果，第一郭において，建物跡３棟・土坑状遺構・溝・多数の柱穴等の遺構を検出するに至った。

第二郭については，期間的な制約もあり，人力による表土の除去のみ行い，礎石の一部と面的に広がる焼土層を確認するにとどまった。

なお，３月11日には，航空写真撮影を平山東城跡とともに行った。

（藤原）

〔昭和62年度〕　昭和62年４月20日から同年８月21日まで約４か月の現地調査を実施した。調査は，第一郭の主要部分に加え，新たに，第二郭・竪堀・土塁を調査対象とした。

まず前年度に表土除去の終了していた第二郭の調査から着手した。この段階では，礎石が一列に並ぶことが判明していたが，他に顕著な遺構は検出されなかった。そのため，第一郭同様に遺物の包含層である暗茶灰褐色土及び焼土層を除去し，地山面において遺構の検出を行った。その結果，先に記した礎石が２棟の建物となることが明らかになったほか，柵列・柱穴・土坑・集石遺構等多数の遺構が検出された。

第二郭の南側に位置する土塁については，構築の過程を調査するため第二郭の調査終了後に一部を断ち割り，土層の観察を行った。

畝状竪堀群は，調査着手前の地形観察によって，当初の予想を上回る大規模なものであることが判明し，最終的に調査範囲内のほぼ全面にわたって調査を行った。竪堀は，表土除去後に肩の部分で地山がすぐに露出し，また，堀の部分は，後の土砂の流入でかなり埋没して浅くなっていることが明らかとなった。そのため，堀の部分でも流入土を除去し，地山面まで掘り下げを行った。竪堀の調査では，人力によって掘り出した流入土を谷まで順次落としていく作業に手間取る結果となった。畝状竪堀群は，調査終了後，航空測量によって遺構図の作成を行った。

なお，現地説明会は，昭和62年７月25日に実施し，約150名の参加者があった。

（鍋田）

第３節　検出遺構

(1)第一郭

第一郭で検出した主な遺構は，建物跡(ＳＢ01・ＳＢ02・ＳＢ03)，柵列跡(ＳＡ01・ＳＡ02)，土坑(ＳＫ01・ＳＫ02・ＳＫ03)，溝(ＳＤ01・ＳＤ02)であり，その他多数のピットがある。建物跡に復原できないピットの性格，遺物の出土していないピットの時期等は不明であるが，出土した遺物によれば第一郭の使用された時期は，16世紀が中心で，その他各時期のものが含まれている可能性もある。

建物跡ＳＢ01　第一郭の南側の中央やや西寄りに位置する礎石建物跡である。これは，柱が立っていたと推定されるすべての場所で礎石を検出したのではなく，掘立柱建物跡のように柱穴を検出した個所もある。建物規模は，東西５間×南北４間で，柱間は約２ｍを測る。礎石は，たいてい平坦な面を持つ自然石を用いる。建物跡の南北軸は，座標北より西へ約５度ふれる。建物跡の北辺中央部には焼土，炭，灰を埋土とする土坑(ＳＫ01)がある。また，この建物跡の範囲内にはたいへん堅い部分があり，特に北西部は粘土が叩き締められたと考えられるところがあり，土間であったかもしれない。この建物跡から東側にかけては，炭を含む焼土が建物幅くらいに広がっており，この建物が焼失した可能性の高いことが推測される。この焼土の広がりから多数の遺物が出土しており，建物が焼失したとするならば，これらの遺物が実際にこの建物で使用されたものとも考えられる。出土した遺物では，後述するように，壺・甕・擂鉢・土師皿・白磁が特にこの建物内に集中する傾向が窺え，規模の大きさと合わせ，平山城内での中心的建物であると考えられる。また，遺物の出土量の多さは，この建物がきわめて一時的な使用ではなく，ある程度恒常的な使用によるものと考えることができる。

また，焼土内からは，スサを含む壁土が小破片となって出土しており，建物は塗壁をもつ構造であったことが理解できる。

建物跡ＳＢ02　調査地の中央西寄りにあり，ＳＢ01の北側に位置する。長方形を呈し，柱間も他と比べて不規則であるが，礎石を含む建物遺構と推定した。東西約4.0m・南北約8.6mの規模である。柱間数は，東西１間×南北３間と考えられる。この建物跡でも粘土を叩き締めたところがあり，ＳＢ01と同じく土間と考えられる。建物跡の南北軸は，座標北より東へ４度ふれる。

建物跡ＳＢ03　ＳＢ02と反対の調査地中央東側に位置する。東西４間×南北３間の掘立柱建物跡である。すべての柱穴を検出したわけではなく，ＳＢ01・ＳＢ02と同じく，礎石が用いられていた可能性もある。この柱穴の一部には，埋土に炭を含む焼土を持つものが

第５図　平山城跡　第一郭・第二郭検出遺構図

あり，ＳＢ01と同様，焼土も広がっていて焼失した可能性がある。柱間は，約1.7mを測る。建物跡の南北軸は，座標北より東へ１度ふれる。

これらの３棟の建物跡の先後関係については，柱穴から出土した遺物による限り，明瞭な差は認めらない。また，遺構は切り合いを持たないため，この点からの判断はできない。建物の方向を基準にするならば，ＳＢ02とＳＢ03に対し，ＳＢ01のふれがやや大きい。この差を時期差として捉えうるとすれば，少なくともＳＢ02とＳＢ03については同時に存在した可能性が考えられる。ただし，ＳＢ01ＳＢ03は同時に焼失したと考えられるため，焼失時には３棟とも存在したようである。

柵列跡ＳＡ01　ＳＢ03の東側で確認した。柱穴の間隔はやや不規則であるが，ＳＢ03とほぼ平行する位置関係になることから，ＳＢ03に伴う柵列と判断した。ＳＢ03の東壁に隣接しており，さらに南側に向かってのびている。

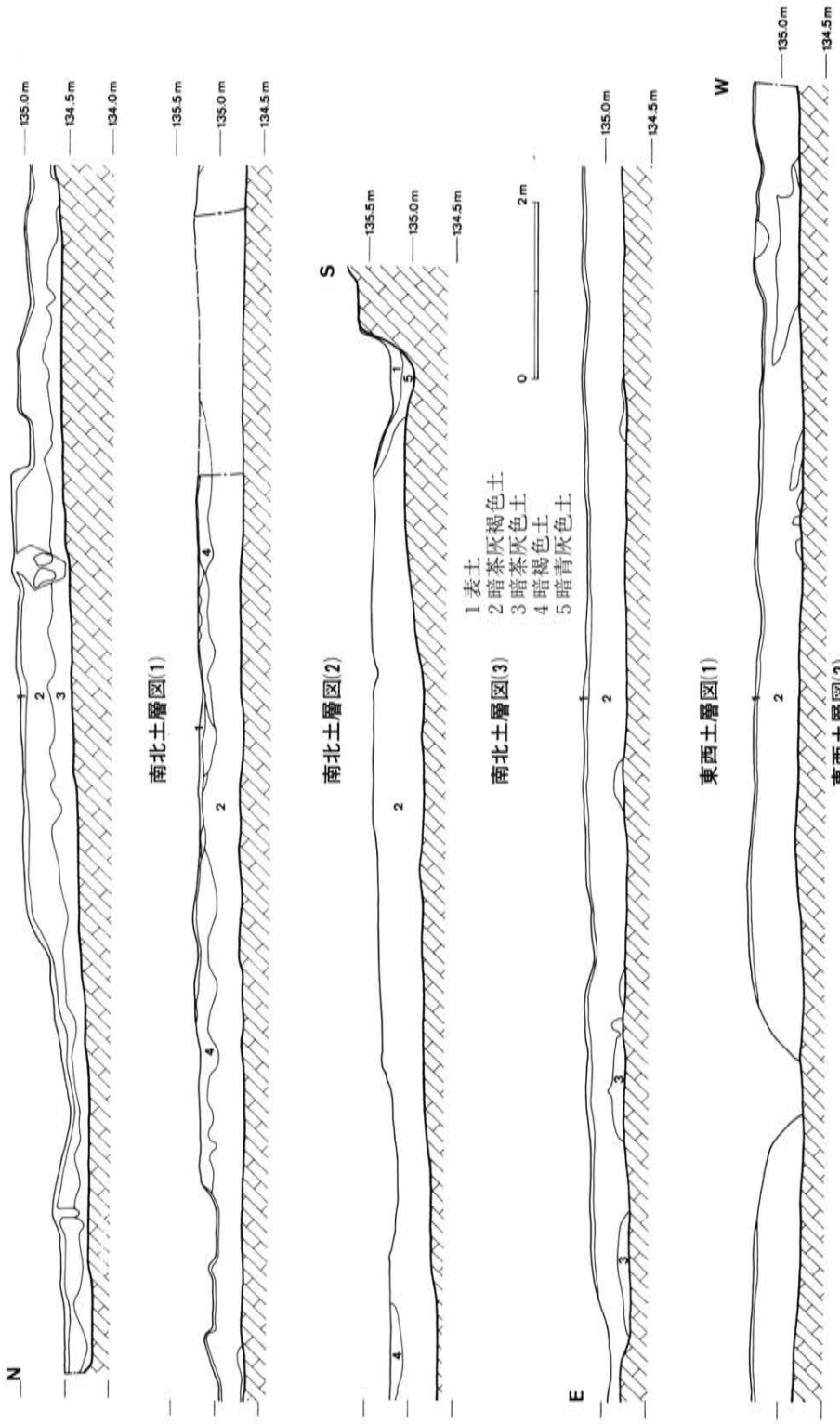
柵列跡ＳＡ02　ＳＢ02の西側で確認した。ＳＢ02に伴うものではなく，郭の周縁部に築かれた柵列と考えられる。ただし，調査地の北側ではその延長部分を確認することができなかった。

溝ＳＤ01・溝ＳＤ02　ともに第一郭の最南部で検出した。ＳＤ01は，ａ：第一郭と斜面との傾斜変換点に沿う部分，ｂ：ＳＢ01の南壁に沿う部分，ｃ：ａとｂを接続する部分，ｄ：東側で「Ｌ」字状に掘削された部分に区分される。幅20～70cm・平均約50cm・深さ約10～20cmを測る。

ＳＤ02は，ａ：第一郭と斜面との傾斜変換点に沿う部分，ｂ：「イ」状を呈する部分に区分される。ＳＤ01よりもやや浅い溝である。

ＳＤ01・ＳＤ02ともａの部分は，斜面から流れ落ちる雨水を止めるため，ＳＤ01のｂとｃの部分は，ＳＢ01の排水溝としての機能を想定し得る。また，ＳＤ01とＳＤ02の斜面に沿う部分は中央に空白があることや，ＳＤ01とＳＤ02が取り囲むように形成する空間が，その東側で出入口状の通路とも考えられる状況を呈していることなどから，板壁等の構築物に伴う溝との想定も可能である。この場合，第一郭から第二郭への進入に際して，第一郭の南東隅のみを出入口とし，溝の空白部分から斜面へと取り付いていたと考えられる。ただし，ＳＤ01・ＳＤ02とも溝内及びその周辺において，杭列等の痕跡は確認できていないため，板壁を想定するにあたっては，その構造に問題を残す。

土坑ＳＫ01　ＳＢ01内に位置する土坑である。約180cm×約180cmの隅丸方形を呈する。深さは約14cmを測る。土坑内では，焼土・炭・灰とともに多数の土器類が出土した。建物に関わるものであるとすれば貯蔵穴を想定することも可能であるが，完形品の土器はなく，焼土・炭等の混在した土坑内の状況からはむしろ焼失した建物跡のものを片付け，廃棄し



第6図　平山城跡　第一郭南北(Ⅰライン)・東西(17ライン)土層断面図

第７図　平山城跡　第二郭検出遺構図

た土坑と考えるべきかもしれない。

土坑ＳＫ02　ＳＢ01の北側，ＳＫ01の北東に位置する土坑である。約150cm×約130cmの隅丸方形を呈する。深さは約５cmを測る。

土坑ＳＫ03　ＳＢ01の南西側で斜面との間に位置する土坑である。最大径で約3.6mを測るがやや不定形である。

(2) 第二郭

第二郭は，南北約10m・東西約35mの東西に細長く広がる郭であり，平山城のなかでは最高所に位置する郭である。第一郭との標高差は約７mを測り，背後には土塁・堀切を備えているなど，城内にあって，特別な位置を占めている場所といえる。

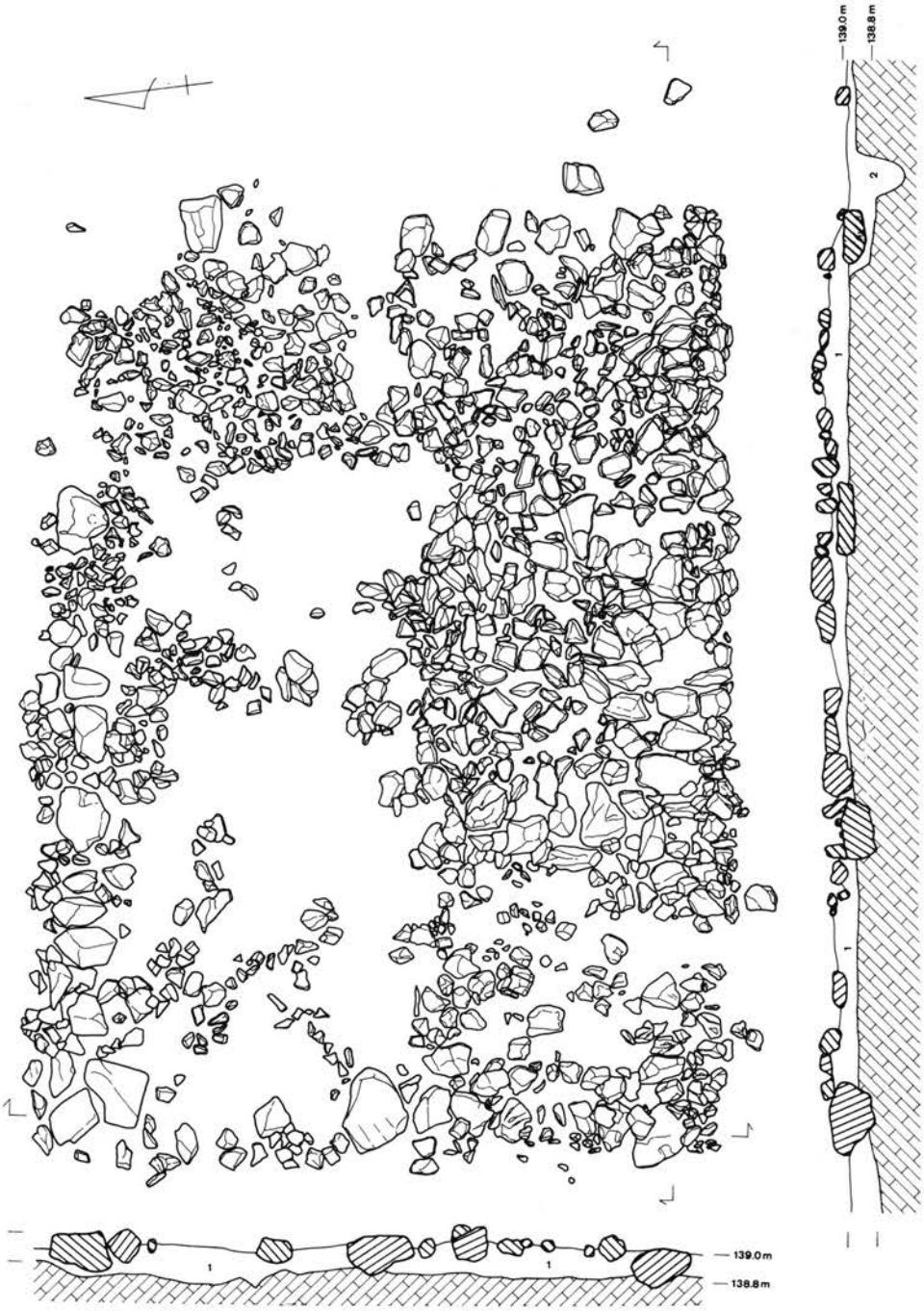
この第二郭で検出した遺構には，礎石建物跡(ＳＢ04・ＳＢ05)，柵列(ＳＡ05・ＳＡ06)，土坑(ＳＫ04・ＳＫ05・ＳＫ06)，集石遺構(ＳＸ01・ＳＸ02)，のほか，溝状の遺構及び多数の柱穴がある。以下，各遺構について記す。

建物跡ＳＢ04　ＳＢ04は，第二郭のほぼ中央部にて検出した礎石建物跡である。東西２間×南北２間の規模をもつ正方形の建物跡で，柱間は約２mを測る。建物跡の南北の軸は，真北に対して約６度東へ傾いている。礎石は，中心に位置する礎石を含め，合計５石を確認したが，本来は９石による総柱の建物であったものと推定される。なお，北壁及び南壁の礎石間ほぼ中央部は，やや小振りの石が配置されており，９本の柱をさらに補助する柱が構築されていた可能性が強い。礎石は，いずれも自然石を用いており，加工した痕跡は認められない。礎石の設置にあたっては，平らな面を上面に利用し，安定の悪いものについては，地山をわずかに掘り込んで安定させている。

ＳＢ04の礎石上層には，厚い焼土層が堆積していたため，建物本体は，焼失したものと考えられる。

建物跡ＳＢ05　ＳＢ05は，ＳＢ04の西側に並んで配置している礎石建物跡である。東西３間×南北２間の規模をもつ長方形の建物跡で，柱間は約２mを測る。ＳＢ05の最大の特徴は，礎石を含み，それよりもひとまわり広い，東西6.6m×南北4.9mの範囲内に，拳大から人頭大までの石が乱雑に敷かれた状態で広がっていたことである。石の敷かれ方は，一様ではなく，南側半分は，特に石の密集度が高く，やや大きめのものが使用されているのに対し，北側半分では，石の空白となる場所が存在し，石も小振りのものが多い。こうした石の粗密が何に起因するのかは不明であり，また，石敷そのものの性格についても，建物自体の性格と合わせ，不明な点が多い。

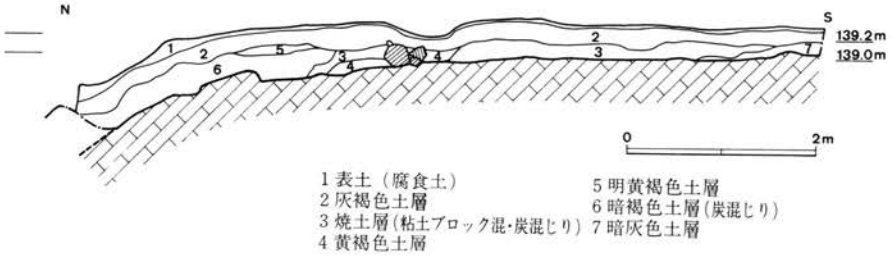
建物跡本体については，この石敷がＳＢ04同様，厚い焼土層に覆われていたことから，



1 暗褐色土層(上部に焼土混じる)
2 暗灰褐色土

0　2m

第８図　平山城跡　建物跡ＳＢ05実測図



第９図　平山城跡　第二郭南北（Ｉライン）土層断面図

ＳＢ04と同時に焼失したものと判断される。

建物跡を含む焼土内からは，土師皿・丹波焼（壺・甕）・擂鉢・灰釉・天目・白磁・染付磁器等多種にわたる土器・陶磁器が出土している。

なお，ＳＢ05の南北軸の方向はＳＢ04と同じであり，また北壁・南壁ともＳＢ04とほぼ直線的につながるため，一連の建物と考えられるが，石敷の有無により区分して取り扱う。

柵列跡ＳＡ03　ＳＢ04の南側（Ｆ10～Ｈ10地区）に位置する柵列である。ＳＢ04の南壁と平行し，さらに東側にのびている。ＳＢ04に平行することからこの建物に伴う柵と考えられる。ＳＢ04の南壁と柵との間は約1.2mを測る。

柵列跡ＳＡ04　ＳＢ05の南側（Ｉ９～Ｊ９地区）で，背後の土塁との傾斜変換点に沿う柵列である。ゆるやかな曲線を描くように配置されている。この柵は，建物に伴うものではなく，土塁からの土砂の流入を防ぐための目的を有するものであると考えられる。

土坑ＳＫ04　第二郭の西側（Ｋ10地区）で検出した土坑である。平面形は，一辺約1.4～1.8mの長方形状を呈する。深さは，約0.2mを測る。土坑内からは，天目茶椀・染付磁器・丹波焼・土師器等が出土しており，これらの破損土器等を廃棄した土坑と考えられる。

土坑ＳＫ05　ＳＫ04の西側（Ｋ10～Ｌ10地区）で検出した土坑である。約半分を検出したのみであるが，ＳＫ04より小規模で，最大幅で約0.8mを測る。深さは約0.15mを測る。

土坑ＳＫ06　Ｆ10地区で検出した不定形な土坑である。東西最大幅約1.6m，南北最大幅約0.95m，深さ約0.2mを測る。出土遺物はなく，性格は不明である。

(3) 畝状竪堀群

前述のように，調査着手前に，西側の斜面には多数の竪堀の存在することが確認され，斜面に連続して築造された，いわゆる畝状竪堀群であることが判明した。位置的には，第二郭の西側にあたり，また，他の場所には，全く竪堀が確認されないことから，特に第二郭への進入を防ぐために築造されたものと判断される。

掘削前においては，竪堀は，比較的不明瞭なものを含め，14本が確認された。(注10) この時点

での地形観察では，各竪堀とも緩やかな「U」字状の溝を呈しており，浅いものでは，深さ約20cmしかない竪堀も存在した。しかし，結果的には，掘削前に確認した14本の堀は，いずれも地山を深く掘り込んだ明瞭な竪堀であり，城の廃絶後，土砂の流入により，かなり浅くなっていることが判明した。ここでは，説明の便宜上，これらの竪堀を北側から，竪堀1～14とし(第10図)，以下の記述を行う。なお，竪堀14は，調査対象地外に位置するため，現状の地形観察しか行えていない。

竪堀1～14は，位置・堀の形状・規模等により，次の４グループに分けられる。

A．竪堀1　斜面の裾から第二郭までつながるものである。溝は，ゆるやかな「U」字状を呈する。

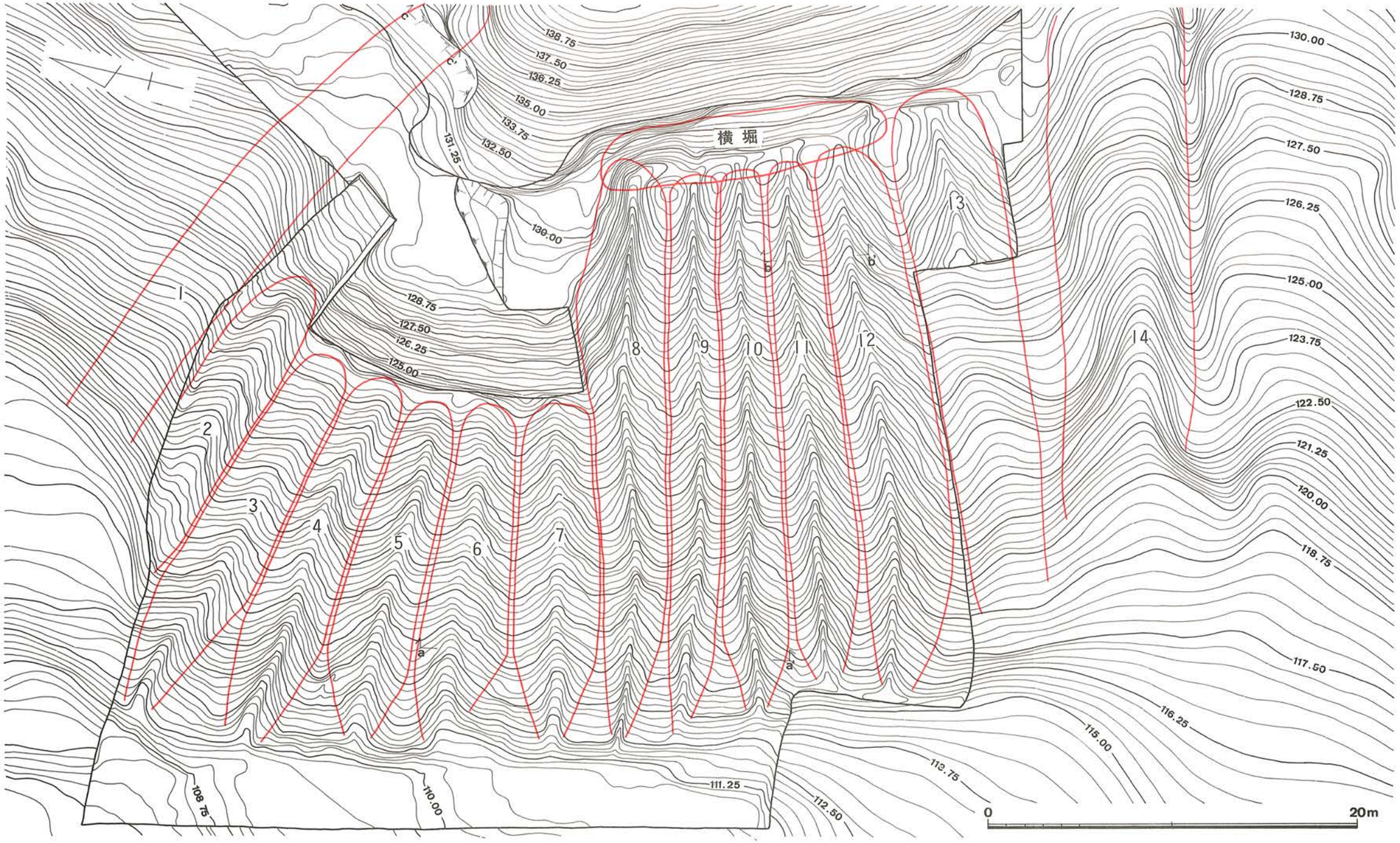
B．竪堀2～7　斜面の途中(第一郭のレベルよりも低い位置)から掘り込まれている。長さ20m前後の規模をもつ。溝は，ゆるやかな「U」字状を呈する。傾斜角は，約31度(竪堀5)を測り，急傾斜である。これらの上部には，曲輪状に張り出した部分が認められる。2～7は，この下からやや放射状に広がって配置される。

C．竪堀8～13　第一郭のレベルとほぼ同じ高さから掘り込まれている。長さ35m前後の規模をもつ。溝は，深い「V」字状を呈する。傾斜角は，約25度(竪堀10)を測る。これらの上部には横方向の堀が造られ，これと連結して，8～12の竪堀が整然と直線的に造られている。

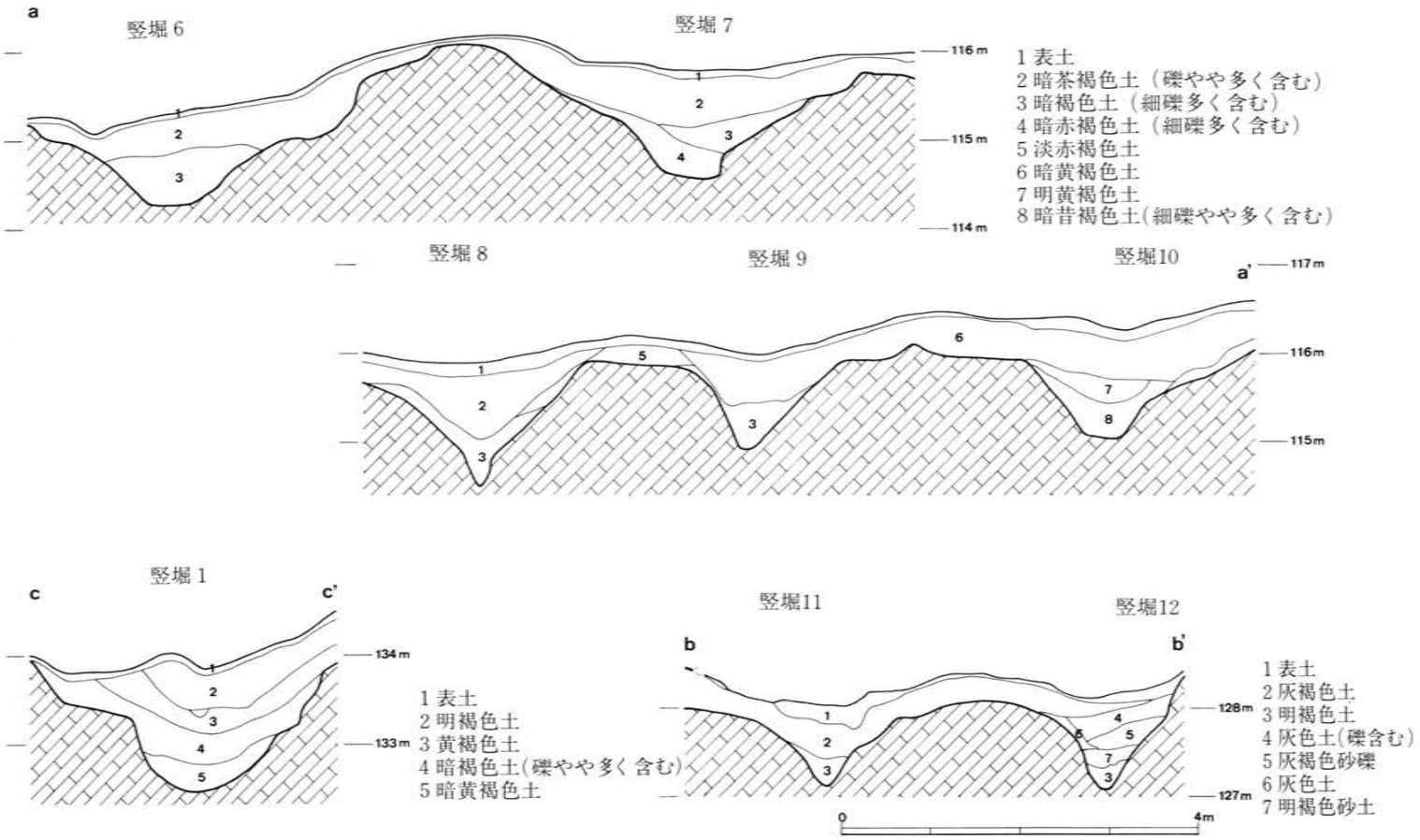
D．竪堀14　第一郭のレベルよりもやや高い位置から掘り込まれている。溝は，やや底の広い「U」字状を呈する。竪堀群中最も規模が大きい。

以上の4グループは，築造の順位により，形成されたと考えられる。すなわち，B・Cグループは，それぞれほぼ同規模の竪堀群によって構成されるが，これは，A・Dの竪堀によって北側と南側の両端が規制され，その間を埋めるように等間隔に割り付けられて掘削されたと考えられること，つまりA・Dの竪堀掘削→B・Cの竪堀群割付・掘削という順位が想定されよう。しかし，当初より全面的に計画された後，掘削されたのか，A・Dの竪堀掘削後かなりの時間を経て，B・Cの竪堀群を付け足すように掘削したかについては判断できない。また，竪堀の性格上，遺物によって築造年代を確定することはできない。

さて，これらのA～Dグループは，有機的に結合し，全体として第二郭への進入を防ぐという役割を担っている。ひとつひとつの竪堀の構造は，基本的には，斜面に沿って溝を掘るという単純なものであるが，畝状に連続して構築することにより，防御機能は，格段に向上している。具体的には，斜面上での横方向への移動が非常に困難になることがあげられる。それにより，斜面への取り付きから，郭まで直線的にしか登ることができない。多人数による攻撃の場合，身動きがとりにくい等，攻め手にすれば大きな障壁になるとい



第10図　平山城跡　畝状竪堀群平面図（調査後）



第11図　平山城跡　畝状竪堀群断面図（a－a′，b－b′，c－c′の位置は第10図参照）

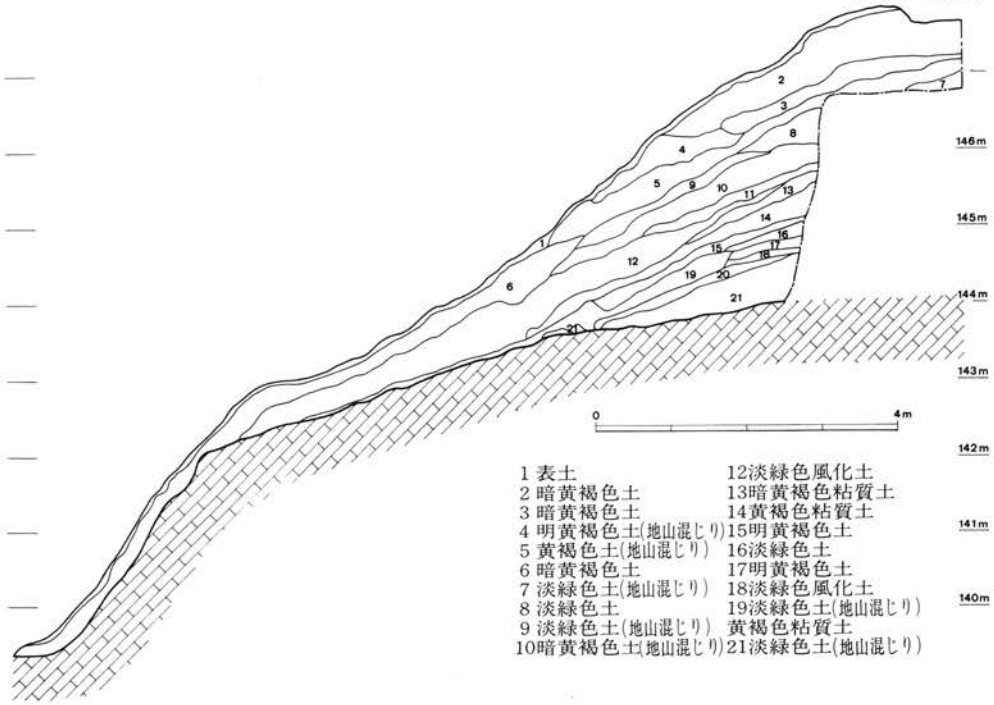
えよう。蛇足ながら，調査後の実感として，整然と並ぶ竪堀群は，視覚的にも敵を威圧する迫力をもつこと，地山まで掘り込んだ竪堀は，非常にすべりやすく，動きにくいこと，を記しておきたい。また，調査終了後，約半年を経過して，竪堀への土砂の流入状況を観察したところ，部分的には，約10cmの堆積が認められたものの，全体的には，それほどの流入はなかったことを付記しておく。

(4)土塁

第二郭の南側背後に位置する。第二郭と土塁頂部の比高は，約８ｍを測る。土塁のさらに南側は深い堀切によって尾根から切断されている。調査は，土塁の構築状況を確認するため，Ｉラインに沿って，第二郭から頂部までの間で断ち割りを行った。

第12図に示すように，地山は142mから144mにかけてゆるやかな傾斜を示し，その上部に盛土を行っている。頂部では，約４ｍの盛土が確認できる。盛土を行う過程では，特に平坦面を形成するような状況はみられず，斜面に順次土を積み重ねたようすがうかがえる。ただし，土塁の規模が大きいため，頂部では，数人が余裕をもって立つだけのスペースを有している。ここからの眺望は，城内でもっとも良好であり，したがって見張り台としての役割も果たしたものと考えられる。なお，盛土内から遺物は出土していない。

（藤原・鍋田）



第12図　平山城跡　土塁断面図(Ｉライン)

第４節　出土遺物

Ａ．土器類

(1)遺構に伴う遺物

１．第一郭建物跡ＳＢ01に伴う焼土出土遺物(図版第１・33～36)

第一郭の南部には15Ｈ・16Ｈ区を中心に，厚さ数cmの焼土層が存在し，この土層は建物跡ＳＢ01焼亡に伴う焼土層であると思われる。この焼土層からは，土師器，白磁，染付，丹波焼，越前焼，瀬戸・美濃焼などが出土している。

土師器

土師器の大半は皿である。1・2は，口縁端部をヨコナデによって外反させるもので，16世紀後葉にみられるものである。1は中皿，2は小皿であろう。3～6は，口縁部にヨコナデを施し，端部が断面三角形を呈するものである。器壁が４～６㎜と厚く，底部の残存するものは口縁の立ち上がり部分に，強いヨコナデによる凹線が明瞭にみられる。16世紀末～17世紀初頭にみられるものである。このほか，用途不明の容器(23)が出土している。23は手づくねで，口縁部のみをヨコナデ調整し，内外面にユビオサエの痕跡を明瞭に残すものである。胎土は粒の細かい粘土をベースに，少量の砂礫を混ぜた土である。内面全体と口縁部外面の一部が灰黒色を呈し，他は乳黄色を呈する。

白磁

7～12は，端反りの白磁皿である。高台の残っているものは，畳付のみが露胎で砂が付着する。12は，内面に型押しによる花文がみられる。9・10・12は器壁が薄く，約２㎜を測る。8は胎土が黄色味を帯び，内外面に貫入がみられる。12は純白色の胎土で，他は，淡灰白色のベースに微細な黒色粒をわずかに含む胎土である。釉のなかに灰黒色の斑点状の発色をするものが目立ち，9・11・15は特に著しい。9は二次的に火を受けている。13～15は白磁皿の底部である。13は底部外面全体の釉を掻きとって，露胎としている。14・15は口縁部に向かってラッパ状に開く器形で，畳付のみが露胎である。いずれも，15世紀第４四半期から16世紀第３四半期頃にかけてみられるものである。このほか14世紀後半頃の椀(239)，15世紀代の小杯(240)が出土している。

青磁

16は皿である。二次的に強い火を受けており器面の損傷が著しい。底部外面を輪状に釉を掻きとって露胎としている。このほか，椀(241・242)，盤(243)等の破片が出土している。241は細線による蓮弁文をもつ椀である。

青白磁

17は水滴である。上下二分割の型作りで，体部最大径付近に接合痕がみられる。二次的に強い火を受けている。14世紀後半のものであろう。244は，木瓜形の皿である。

染付

椀(18)は外面には口縁部と腰部の圏線に挟まれて牡丹唐草文が描かれている。内面は口縁部に圏線が描かれるのみで体部は無文である。19・20は皿である。19は外面に唐草文，見込みに草花文が描かれている。20は外面に唐草文，見込みに十字花文が描かれている。

丹波焼

壺・甕・すり鉢が出土している。25は壺である。灰色の砂っぽい胎土で，石英の微細粒が目立つ。21はすり鉢である。口縁端部がやや内湾する。粘土紐巻き上げ成形で，外面は，粗い縦方向のハケ目により調整したのち，回転ヨコナデによって仕上げている。すり目はヘラ描きにより一条一条施される。淡灰色の砂っぽい胎土で，焼成はやや甘い。26は甕である。外反する口縁部の外面にヘラによる深い沈線が，内面には凹線が巡らされる。直径１～２㎜程度以下の石英粒を比較的多く含み砂っぽい胎土で，焼成は堅緻である。

越前焼

甕・すり鉢が出土している。22はすり鉢で，直線的にのびる口縁の内側に端面をもち，その下方には凹線が巡る。すり目は11条を単位とする櫛によって施される。27は甕である。口縁部外面には退化した凹線が２条巡る。灰色の砂っぽい胎土である。口縁端面には自然釉が付着している。内面全体が暗赤褐色を呈し，外面は灰色を呈するが，外面は二次的に火を受けており，本来は内面と同じ色調であったものと思われる。なお，内面の暗赤褐色は鬼板を塗ったものではない。(注11)

瀬戸・美濃焼

天目茶椀(24・245)，灰釉丸皿(246)などが出土している。24は直線的な体部と小さく外反する口縁部をもつもので，露胎部にはサビ釉が施される。大窯Ⅱ期のものと思われる。

２．第一郭土坑ＳＫ01出土遺物(図版第２・37)

建物跡ＳＢ01北辺の中央部に位置する土坑ＳＫ01からは，土師器，白磁，青磁，染付，瀬戸・美濃焼，越前焼が出土している。

土師器

皿がある。28・247は16世紀後半のものである。この他土師質焼成のすり鉢(248)がある。

白磁

口縁部がラッパ状に開く皿(29～32)と，端反りの皿(33)がある。いずれも，畳付のみが露胎である。

青磁

香炉(34)がある。器胎の外面に２条の浅い沈線が刻まれている。

染付

椀(35)のみが出土している。外面には密な渦巻き状の唐草文が描かれている。内面は口縁部に圏線を描き，体部は無文である。

瀬戸・美濃焼

天目茶椀(36)がある。大窯Ⅱ期のものである。

越前焼

37はすり鉢である。小破片のため，すり目の櫛の単位は不明である。16世紀後半のものであろう。

３．第一郭のその他の遺構出土遺物(図版第２・37)

第一郭のその他の遺構から出土した遺物のうち，実測可能なもののみを掲げた。38・39は土師器皿である。16世紀末～17世紀初頭のものである。38はピット21，39は溝ＳＤ01から出土している。40～42は白磁皿である。いずれも端反り形のものである。40はピット５，41は土坑ＳＫ02，42はピット213(建物跡ＳＢ01の柱穴)から出土している。ピット213からは，このほかに青白磁木瓜形皿，染付椀等の細片が出土している。

４．第二郭礎石建物跡ＳＢ04・ＳＢ05に伴う焼土出土遺物(図版第２・38～40)

第二郭中央部の礎石建物跡ＳＢ04・ＳＢ05周辺には厚い焼土層が堆積しており，この焼土層は，ＳＢ04・ＳＢ05焼失に伴う焼土層と思われる。この焼土層からは，土師器皿，白磁，青磁，染付，丹波焼，瀬戸・美濃焼，瓦質土器などが出土している。

土師器

土師器は皿のみが出土しているが，小破片ばかりで量も多くない。249～253は16世紀後半～17世紀初頭に属するものである。

白磁

端反りの皿(43・44)と口縁部がラッパ状に開く皿(45・254・255)がある。43は胎土がやや黄色味がかっている。45は，内外面に細かな灰色の斑点が多くみられ，特に内面は器面全体が灰色に見えるほどである。外面に火を受けている。

青白磁

図化できないが，木瓜形の皿の破片が出土している(256)。高台は貼り付けで，断面台形を呈する。畳付を面取りするように釉を剝ぎとっている。

青磁

香炉が出土している。46・47・257は接合しないが，同一個体とみられる。釉調は，オリー

ブがかった緑色を呈している。平高台で，高台底は露胎である。口縁部が弱く火を受けている。

染付

椀と皿がある。48は口縁部に向かって開く器形の椀である。外面には簡略化した唐草文が描かれている。全体に黄色味がかった発色である。口縁部の直立する椀(258)も出土している。49・50は皿である。49は見込みに玉取獅子を描いている。50は見込みに文字が書かれ，高台内にも字款が書かれている。内外面ともに被熱している。

瀬戸・美濃焼

灰釉丸椀(51)，丸皿(52)，端反り皿(53)と天目茶椀(54・260・261)がある。51は細線による剣先状の蓮弁文をもち，53は見込みに印花文を施す。54は直線的な体部で，短く外折する口縁部をもつ。体部下半にはサビ釉が施されている。これらは大窯Ⅰ期～Ⅲ期に属するものである。

丹波焼

壺とすり鉢が出土している。55は壺の口縁部，56は壺の底部である。灰色のやや粘り気のある胎土や細かな斑点状に付着した自然釉の特徴から，同一個体ではないかと思われる。57・60はすり鉢である。57のすり目は細くて鋭いが，60は幅が広く浅い。60には線刻記号がみられる。

瓦質土器

鉢と火舎がある。58は直線的に開く器形の鉢である。内面はほとんど余すところなく明瞭なヘラミガキが施され，非常に平滑に仕上げる。外面は粘土紐の継目や指押えの跡を明瞭に残しているが，ほぼ全面に弱いヘラミガキが施されている。胎土は精良で，焼成も良好であるが，ほとんど土師質の焼成で，内外面の一部に炭素が吸着しているのみである。59は，火舎である。外面は非常に密なヘラミガキにより平滑に仕上げられている。内面は指押えの跡がわずかな凹凸として残っており，口縁端面からやや下まではヨコ方向のヘラケズリ，以下はヘラミガキを施している。胎土は58と同様に精良で，焼成も似通っている。58・59が黄色～黄橙色を呈する部分が多いのは，二次的に火を受けた結果であろうか。

5．第二郭土坑ＳＫ04出土遺物(図版第３・41)

第二郭の西端に位置する土坑ＳＫ04からは土師器，染付，瀬戸・美濃焼，丹波焼，越前焼，瓦質土器などが出土している。

土師器

皿が出土している。61は器面の摩滅が著しいが，底部と口縁部の境に浅い凹線をもつ皿で，16世紀末～17世紀初頭のものである。

染付

椀(62)が出土している。器高に対して口径が大きく，口縁部に向かって広く開いた器形をもち，見込みは凹んでいる。外面は，腰部と口縁部の圏線に挟まれた体部にくずれた唐草文を描いている。内面は，口縁部と腰部に圏線を，見込みには渦巻き状の菊花文を描いている。畳付のみが露胎である。

瀬戸・美濃焼

天目茶椀(63)がある。外面下半にはサビ釉が施されている。大窯Ⅱ期に属するものであろうと思われる。

丹波焼

すり鉢と甕が出土している。すり鉢(64)は，内面にヘラ描きによるすり目を刻んでいるが，まず，内底面の中心から12分画の方向にすり目をいれ，そのすり目を目安として，他のすり目を刻んでいることがわかる。甕(67)は，短く外折する口縁部の内面に１条の沈線を施している。外面は横ナデにより平滑に仕上げられており，細かい斑点状の自然釉が薄く付着している。内面も横ナデによって比較的ていねいに仕上げられている。68は壺の底部である。

越前焼

すり鉢と壺が出土した。すり鉢(65)は11条を単位とする櫛描きによるすり目が刻まれている。内面の下半は使用によりすり目が摩滅している。16世紀後半のものと考えられる。

瓦質土器

66はすり鉢で，体部内面には８条を単位とするすり目が放射状に10方向に施された後，斜め方向にも施されている。すり目は見込みにも平行に２単位施されている。二次的に火を受けたためか，表面の剝離が著しく，焼成も土師質となっている。

(2)遺構に伴わない遺物(図版第４～６・41～44)

土師器

土師器はほとんどが皿である。土師器皿には14世紀に属するもの(69～72)，15～16世紀代に属するもの(73～80)，16世紀後半から17世紀初頭に属するもの(81～92)，17世紀後半～18世紀代に属するもの(93～100)があるが，量的には16世紀後半から17世紀初頭に属するものが最も多い。

白磁

椀と皿があるが，ほとんどが皿である。椀(101)は14世紀代に属するもので，高台やや上位以下は露胎である。皿には端反りのもの(102～116)と，高台から口縁部まで，ラッパ状

に開くもの(117・118)があり，前者が多い。ともに，畳付のみ露胎である。端反りのものは，口径で分類すると，9cm・13cm・16cm・18cm前後の４種がある。

青磁

香炉(119)，皿(120)，盤(121・122)がある。皿は，口縁部に抉りをいれ，稜花とするもので，二次的に強い火をうけている。盤は離れた地点から出土しているが，同一個体の可能性が高いと思われる。高台内は，輪状に釉を掻きとっている。

染付

椀と皿がある。123・124はぶ厚くて低い高台をもつ椀で，内外面に圏線を描いている。123は畳付のみが露胎であるが，124は畳付から高台内を露胎とする。125・126は細い高台をもつ椀である。畳付のみ露胎である。126の見込みには菊唐草文が描かれ，高台内には字款が書かれている。127～129は椀の口縁部である。127・128は体部から口縁部にかけて大きく開くもので，見込みがくぼむ器形になり，129は見込みが内側に盛り上がる器形になると思われる。127の外面には芭蕉葉文と波涛文が，129の外面には渦巻き状の唐草文が描かれている。127・129は内外面に火を受けている。130は見込み部分が少し盛り上がった器形の椀である。見込みには人物が描かれ，高台内には「福」の字が書かれている。131・132は，碁笥底の皿である外面に芭蕉葉文，見込みに花文が描かれている。131は，底部の接地面が露胎で，底裏部分には施釉しているが，132は底部全体が露胎である。131は火を受けている。133は低い高台をもつ。器壁が厚く，底径がもう少し大きくなるかもしれない。釉薬が他よりやや厚く，釉のなかに細かな気泡がたくさんみられる。134～137は皿の底部である。畳付のみを露胎としている。134の見込みには花文が，137の外面には唐草文が描かれている。134の高台内は回転ヘラケズリの痕跡が認められる。135・136は端反りの皿である。外面には簡略な唐草文が描かれている。文様が酷似し，何客かのセットで用いられたと思われるが，同一個体の可能性もある。

瀬戸・美濃焼

灰釉の端反り皿・丸椀と天目茶椀がある。端反り皿のうち，138は見込みにカタバミの印花を施す。丸椀(263)は，外面に細線による剣先状の蓮弁を施すものである。天目茶椀は直線的な体部をもつものが多い。瀬戸・美濃焼は，大窯Ⅰ期からⅢ期までのもので，Ⅰ期，Ⅱ期が多く，Ⅲ期に該当すると考えられるものは天目茶椀２個体(146・147)のみである。このほか，古瀬戸瓶子の胴部片(264)が出土している。

中世陶器

丹波焼，越前焼，備前焼がある。丹波焼には，壺・甕類(159～166・168・179)，鉢類(171～176)がある。179は口縁端部を上方につまみ上げた小壺である。欠損していて図示できない

が，片口が付く。片口の下方の体部には線刻がみられる。鉢類のうち，171以外はすり鉢である。すり鉢には，ヘラ描きによるすり目が刻まれている。167は，越前焼の甕と思われる。備前焼には大甕(169)，すり鉢(170)がある。

瓦器・瓦質土器

瓦器(158)は，丹波地方にみられる瓦器椀である。内面には密な，外面には粗いヘラミガキを施している。瓦質土器にはすり鉢(177・178)，香炉(180)，火舎(181)がある。177は口縁部が「く」の字に外反する器形で，内面には8条を単位とする櫛描きによるすり目が刻まれている。外面は非常に粗いハケメをタテ方向に施しているが，器面は指押えによる凹凸が著しい。炭素の吸着が不十分で，土師質に近い焼成である。178は内面に9条を単位とする櫛描きによるすり目が刻まれている。外面は摩滅が著しいが，指押えによる凹凸を残し，特に調整を施していないようである。177と同様，土師質に近い焼成である。180は外面に印花文を施す。181は，体部外面にヨコ方向のヘラミガキを施し，器面を平滑に仕上げている。

近世陶磁器

肥前磁器(150～154)，色絵(155)，肥前陶器(156)，京焼(157)などがある。17世紀後半のものから19世紀以降に位置付けられるものまである。

B．金属製品(図版第7・45)

金属製品には鉄釘，楔，武具・武器類，鉄砲玉，煙管などがある。鉄釘(182～196)は，断面四角形の鍛造のもので，全形のわかるものでみると，長さがおよそ10.4cm，8.7cm，5.4cm，4.3cmの4種類があることがわかる。(注12) 楔(197～199)は鉄製の鍛造のもので，幅約2cm・長さは約8cmである。頭をたたいて折り曲げたものと真っすぐなものがある。200は完形の小札である。小孔が2列×7個穿たれている。201～203は武具類等の部品であると思われるが，詳細は不明である。201は銅製品と思われる。204・205は小柄と思われる。204は木質が遺存しており，小刀とするべきかもしれない。205は鉄地金銅張りと思われる。206は鉄製小刀である。遺存状態がよく，しっかりしている。207は鉄鏃で，208は鉛製の鉄砲玉である。209は用途不明の銅製品である。210・211は煙管の雁首である。210には細線による斜格子文が刻まれており，管内にはラウが遺存している。211は火皿が欠損している。首部の屈曲が全くみられないことから，江戸時代でも中期以降のものである。これらのうち，193・200・206は第一郭建物跡SB01に伴う焼土から，191・202・204は第二郭建物跡SB04・05に伴う焼土から出土している。

第２表　平山城跡出土銅銭一覧表

番号	銭名	時代	初鋳	出土地点	番号	銭名	時代	初鋳	出土地点
212	開元通宝	唐	621	第一郭	226	紹聖元宝	北宋	1094	第二郭
215	天聖元宝	北宋	1023	第一郭	225	政和通宝	北宋	1111	第二郭焼土
216	嘉祐通宝	北宋	1056	第二郭焼土	227	政和通宝	北宋	1111	第一郭
217	治平元宝	北宋	1064	第二郭	228	政和通宝	北宋	1111	第一郭
218	熙寧元宝	北宋	1068	竪堀	229	寛永通宝	江戸	--	竪堀
219	熙寧元宝	北宋	1068	第二郭焼土	230	寛永通宝	江戸	--	竪堀
220	元豊通宝	北宋	1078	竪堀	231	寛永通宝	江戸	--	表採
221	元豊通宝	北宋	1078	第二郭焼土	232	寛永通宝	江戸	--	表採
222	元豊通宝	北宋	1078	第二郭焼土					

C．**銅銭**（図版第７・44）

銅銭が21枚出土している。銭名の判明するものは17枚で，渡来銭が13枚，寛永通宝が４枚である。渡来銭は，唐の開元通宝１枚を除けばすべて北宋銭で，その内訳は，天聖元宝１枚，嘉祐通宝１枚，治平元宝１枚，熙寧元宝２枚，元豊通宝３枚，紹聖元宝１枚，政和通宝３枚である。212～214と222～225は銭穴をそろえてひっついている。寛永通宝は，すべて寛文８（1668）年以降の新寛永銭であると思われる。

D．**石製品**（図版第７・45）

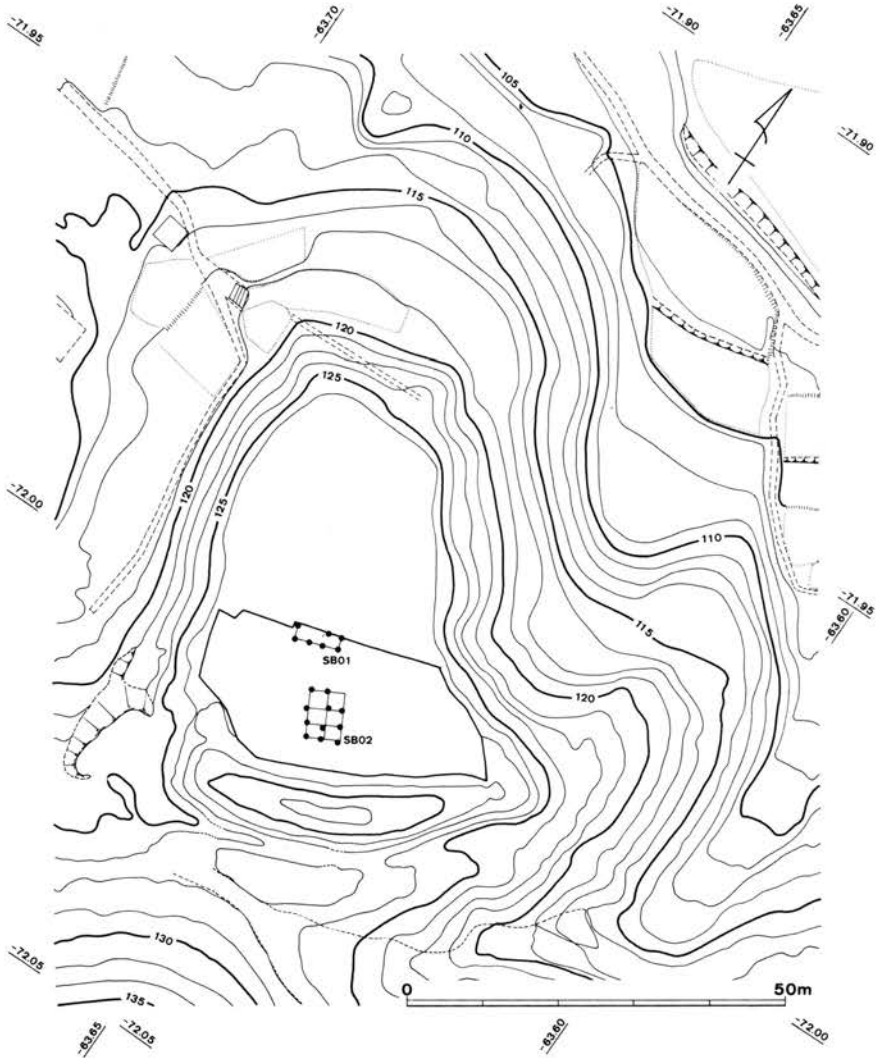
硯，砥石，茶臼が出土している。233・234は長方形の硯で，石材は粘板岩である。233は灰黒色，234は淡灰色を呈する。235は粘板岩製の砥石で，上面と長側面，短側面を砥石面としている。手持ちの仕上砥である。236は砂岩製の砥石で，上面と長側面を砥石面としている。粗砥である。237・238は茶臼である。237が上臼，238が下臼である。下臼には雑なすり目が刻まれている。残存しているすり目から考えて，７分画もしくは８分画であると考えられる。これらのうち237は第一郭建物跡ＳＢ01に伴う焼土から，236は第二郭建物跡ＳＢ04・05に伴う焼土から，238は第二郭土坑ＳＫ04から出土している。

（森島）

第３章　平山東城跡

第１節　城の構造

平山城の東に位置する尾根上に築造されている。尾根の先端付近にひとつの広い郭(便宜上，主郭と呼称する)を有し，防御施設として，主郭の背後に土塁，さらに空堀を備えている。平山城と比較すると，規模や防御施設において簡素と言わざるを得ないが，平野部へ張り出した尾根上に郭を成形し，その背後に土塁を構築していることなど，細部でや



第13図　平山東城跡　地形測量及び調査範囲図

や異なるとはいえ，構造面では共通の内容を有している。

平山東城は，平山城との位置関係から，城としての主要な機能をもつ平山城に伴う支城としての位置づけが可能である。

主郭は，南北約45m，東西は谷側で約21m，山側で約30mを測り，台形状を呈する。なお，今回の調査では城の南側部分が対象であり，主郭の北側約６割は未調査である。

（鍋田）

第２節　調査の経過

調査は，まず地形測量から行うために，調査地の４m方眼の地区割りから始めた。当地は，自動車道建設に伴う事前の調査地であったので，工事に先立って日本道路公団によって打たれた測量杭を利用して，国土座標に沿った形の地区割りを行った。０ラインがX＝-72,032.00，AラインがY＝-63,614.00であり，それぞれ南と東へ数字とアルファベットを順次付した。４m方眼の地区の名称は，その方眼の南東ラインの交点の記号名で称することとした。

それから，この地区割りによる測量杭を基準にして調査地の地形測量を行った後に，９ラインとKラインに沿って土層，遺構，遺物観察のためのトレンチを設定した。このトレンチの観察によって，暗茶灰褐色土を除去した後は地山となっており，この地山面に遺構が切り込んでいることが判明した。そこで，この暗茶灰褐色土をできるだけ除去し，調査範囲全面にわたって遺構の検出につとめた。その結果，多数のピットや土坑を検出した。また，土塁や土塁の外側にめぐっていた空堀などの遺構もあわせて掘削した。

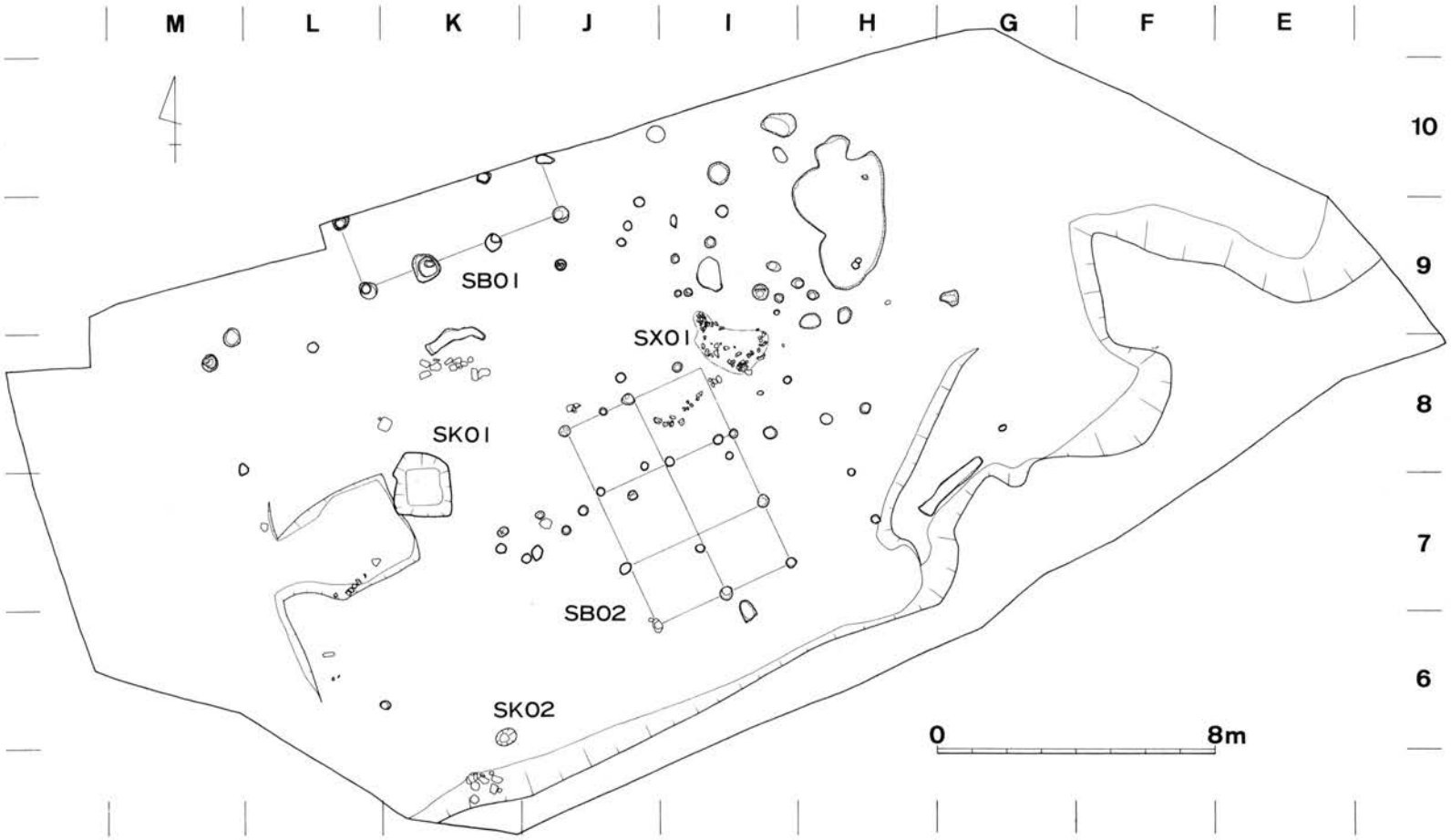
（藤原）

第３節　検出遺構

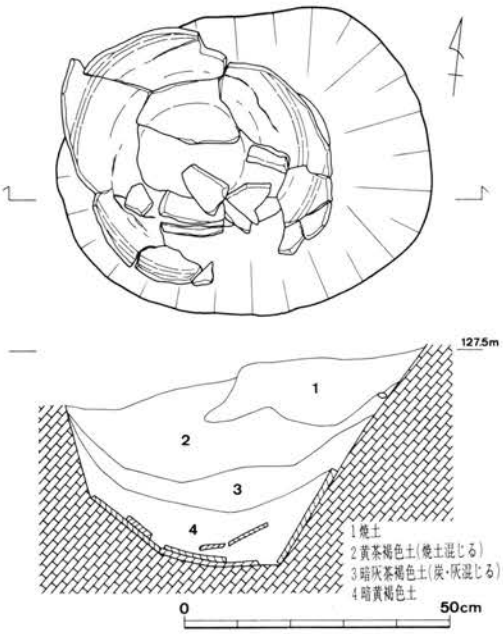
(1)主郭

主郭で検出した主な遺構には，掘立柱建物跡２棟・土坑・多数のピット等がある。この調査地では，多数の柱穴状のピットを検出したが，建物跡などの遺構としてまとまったものは少ない。

建物跡ＳＢ01　ＳＢ01は，主郭部の中央に位置する。東西に３間で，柱間は約２mの規模を持つ総柱の建物跡と推定される。南北は，これより北に１間分は確認したが，その先は調査範囲外のため不明である。南北の柱穴を結んだラインは，座標北より約22度西へふれている。柱穴は二段に掘り込まれており，外側の直径が50～60cm・深さは0.6～1mを測り，他の柱穴状ピットと比べて一回り大きい。西側の柱穴からは，土師器の細片が出土した。



第14図　平山東城跡　主郭検出遺構図



第15図　平山東城跡　土坑ＳＫ02実測図

これは，土師器の皿と推定される。

建物跡ＳＢ02　主郭部の南側中央部に位置し，東西２間×南北３間の規模の総柱建物跡と推定される。柱間は，東西南北とも２ｍ前後である。南北の柱穴を結ぶラインは，座標北より約25度西にふれる。柱穴の直径は，30～40cm・深さは20～30cmを測る。

土坑ＳＫ01　調査地の中央やや西よりで検出した土坑状遺構である。長径1.8ｍ・短径1.5ｍを測る。断面形は長方形である。土坑内部には多量の石が入っていた。この石は，人頭大の石を下にして，上層ほど小さくなり，拳大の大きさになる。埋土は，２層あり，石の大きさが変化するのに伴うように土色が変化する。この土坑状遺構からは，備前焼の大甕の口縁部・体部や美濃焼と思われる天目茶椀，肥前磁器の破片が出土している。

土坑ＳＫ02(注13)　主郭部の南西隅で検出したもので，長径70cm・短径55cm・深さ40cm程の楕円形土坑である。越前焼の大甕の胴部以下の下半部がこの土坑内に据えられていた。この大甕の内部は土のみが堆積していた。この土坑内では，大甕に堆積していた暗黄褐色土が最下層にあり，その上に炭・灰・焼土を含む暗灰茶褐色土，焼土塊が混じる黄茶褐色土が堆積していた。この大甕は胴部以下のみである。

ＳＸ01　建物跡ＳＢ02の北東隅外側付近で検出した集石遺構である。３～30cmを測る大小の石が，1.5～２ｍの範囲内に集まっているが，性格は不明である。集石内から土師器皿と白磁皿が出土している。

(2) 土塁

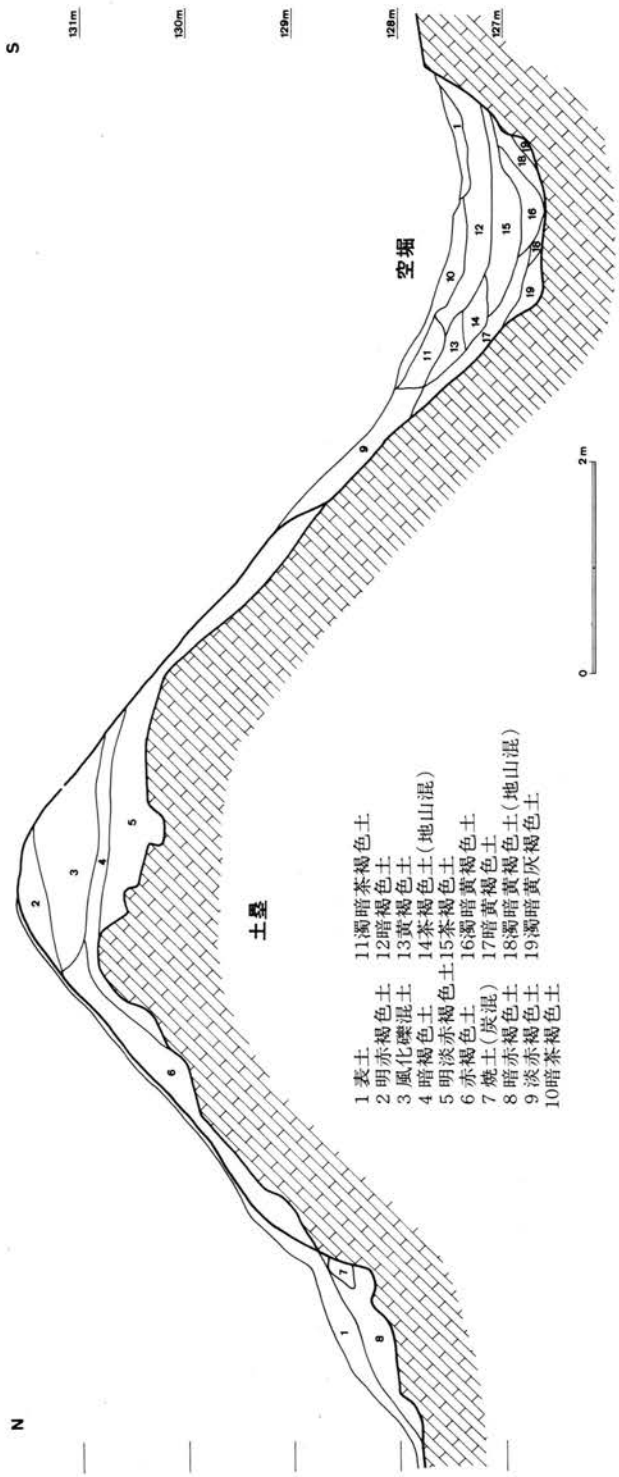
土塁は，主郭部南方の山側に築かれている。平面形は，東西に広がる土塁の左右が屈曲して若干北側にのび，「コ」の字形を呈する。土塁の上部幅は約２ｍ・下部幅約９ｍを測る。主郭部から土塁の上部までの高さは約４ｍである。北にのびる土塁の長さは，西の長いもので約６ｍであり，これは東西に土塁を築いたものではなく，背後の山側だけを意識したものといえる。なお，主郭側の土塁裾は，一旦段をなし主郭部に続くが，この段部の平坦地は，後世，主郭部の南東隅にあった稲荷社への参道として土塁を削平したものと思われ，

西側の屈曲した土塁の中央部が破られているのも，これに伴って破壊されたと推定される。したがって，土塁の下部は現状よりは広かったものと思われ，下部の幅も段の下までとした。

土塁の調査は，ほぼ中央部に断ち割りを入れ，構築方法の確認を行った。その結果，土塁の北側は主郭，南側は空堀の掘削によってそれぞれ削られ，地山を削り残して，土塁の形を整え，さらに，その上部に掘り出した土を盛土したことが判明した。また，土塁の北側では，郭との傾斜変換点付近において，帯状に広がる小石の集石が検出されたが，この集石の性格は不明である。

(3) 空堀

空堀は，土塁の外側に，土塁と同じく「コ」の字形に掘削されていたと推定されるが，東側は削平されており不明である。空堀の上部幅は約５ｍあり，底部幅は約2.5mである。肩部から底部までの深さは約1.5mであり，土塁の上部から底部までの高さは約５ｍを測



第16図　平山東城跡　土塁・空堀断面図

る。この空堀の特徴として，空堀の掘削が主郭部の中心ラインから左右に何段かの段をもって行われていることである。これは，工法的な問題なのか，戦略的なものかは不明であるが，ここでは戦略的なものが特に想定できないので，工法的な問題の結果と捉えておきたい。空堀の断面形は，「U」字形を呈する。

（藤原・鍋田）

第４節　出土遺物

A．土器類

(1)遺構に伴う遺物（図版第８・46）

１．土坑ＳＫ01出土遺物

土師器，瀬戸・美濃焼，備前焼，肥前磁器が出土している。1・2は土師器小皿である。16世紀代のものであろうか。3は瀬戸・美濃系の天目茶椀である。露胎部にはサビ釉が施されている。6は備前焼大甕である。口縁部が大きく外反し口縁部外面には２条の凹線がみられる。口縁部が割れたものを漆で補修している。肥前磁器は，椀(4)と皿(5)がある。どちらも18世紀代に属するものである。

２．土坑ＳＫ02出土遺物

11は土坑に据えられていた越前焼大甕の底部である。

３．ＳＸ01出土遺物

土師器皿と白磁皿が出土している。土師器小皿(7～9)は16世紀中葉のものと思われる。8の底部には焼成後の穿孔がみられる。白磁皿(10)は，端反り形で，口縁端部に釉切れがみられる。

(2)遺構に伴わない遺物（図版第８～10・46・47）

土師器，白磁，青磁，染付，瀬戸・美濃焼，肥前磁器，瓦質土器などがある。

土師器

皿，壺，蓋がある。皿はほとんどが小皿で，大皿は少ない。12～16は16世紀に属するものである。壺(69・70)は，やや扁平な体部に短く直立する口縁部をもつ。胎土には細かな石英粒を多量に含む。70は乳黄色系の色調であるが，69は焼成が甘いためか，器胎の大部分が漆黒色で，器壁も灰黒色の部分が多い。68は灰白色の色調であるが，胎土が69・70と類似し，口径も一致するので，これらと組み合う蓋であると思われる。

白磁

47は白磁杯の底部である。畳付を露胎とし，見込みも高台径と同じ直径で釉を輪状に掻

きとっている。

青磁

48は瓶の口縁部である。これと同一個体と思われる頸部が出土しており，その破片には耳の付いていた痕跡がある。49・50は椀である。49は，外面に蓮弁が退化したものと思われるタテ方向の線刻がみられる。破片が小さくてはっきりしないが，この線刻は5条単位の櫛によるもののように思われる。50は，黄色味を帯びた胎土をもち，見込みには不明瞭な印花文が認められる。

染付

椀と皿がある。51・53は碁笥底となる皿である。51は外面に波涛文が略化されたと思われる列点文と芭蕉葉文が描かれている。53は底部の接地面を露胎とし，底裏部分を施釉している。外面には草花文(？)が，見込みには文字が描かれている。54は皿の底部である。見込み部の釉が乳白色で，呉須の発色も悪い。52は椀の底部である。淡黄茶色の胎土に淡乳黄色の化粧土をかけ，細かな貫入の入った白濁釉をかけている。化粧土は一部が高台内までかかっているが，釉は一部が畳付までかかっているほかは高台無釉となっている。見込みには文様が描かれているが，呉須の発色が悪く不明瞭である。陶胎染付と言うべきかもしれない。

瀬戸・美濃焼

55は灰釉丸椀である。釉調はやや黄色味がかっている。56は灰釉丸皿，57は天目茶椀である。58は鉄釉の皿の底部と思われる。鉄釉が畳付をこえて高台内まで施され，高台内には輪トチンの跡が残る。59は灰釉茶入である。

京焼

60は椀である。黄色味がかった胎土に乳白色系の釉がかけられている。

肥前磁器

61～66は染付椀である。概ね17世紀後半以降のもので，64は19世紀に入るものであろうか。67は染付皿である。19世紀のものと思われ，肥前産であるとは断定できない。

瓦質土器

71～75はすり鉢である。72が土師質焼成となっているほかは，内外面に炭素を吸着し，灰黒色系の色調を呈する。体部外面は73にハケメがみられるが，いずれもユビ調整の凹凸を残している。71・75の外底面は砂底で，内底面にはすり目が刻まれている。75は内面上位に星形が刻まれている。

丹波焼

76は壺の口縁部である。外面には黄緑色の自然釉がかかる。77は甕の口縁部であり，内

面から口縁部外面にかけて淡緑色に灰釉がかけられ，外面の頸部から体部にかけては光沢のないサビ釉がかけられている。79・80はすり鉢である。内面には櫛描きによるすり目が施される。このほかサビ釉を塗った壺・甕類の口縁部が出土している。

越前焼

78は大甕の口縁部である。越前焼と考えられる個体はこの他に土坑ＳＫ02の埋甕しかなく，胎土・焼成も類似しているので同一個体の可能性がある。81～84はすり鉢である。櫛描きによるすり目は81が８条単位，82が10条単位，83が８条単位，84が９条単位である。

Ｂ．金属製品（図版第11・48）

37は鉄製の楔である。36～41は煙管である。雁首の形態からみて，江戸時代中期以降のものである。このほか用途不明の板状鉄製品が出土している。

Ｃ．銭貨（図版第11・48）

銭名の判読できるものは合計43枚出土しており，その内訳は，開元通宝２枚，紹聖元宝１枚，寛永通宝39枚と，明治時代の二銭銅貨１枚である。寛永通宝は四文銭が２枚で，他は一文銭である。一文銭には裏に「文」，「小」等の文字のあるものが８枚ある。寛永通宝に鉄銭が３枚含まれている他はすべて銅銭である。このほか，銭名の判読できない銅銭が２枚，鉄銭が４枚ある。

第３表　平山東城跡出土銭貨一覧表

番号	銭名	時代	初鋳	備考	番号	銭名	時代	初鋳	備考
92	開元通宝	唐	621		101	寛永通宝	江戸	--	裏「文」
93	開元通宝	唐	621		102	寛永通宝	江戸	--	裏「文」
94	紹聖元宝	北宋	1094		103	寛永通宝	江戸	--	裏文字有
95	寛永通宝	江戸	--	四文銭	104	寛永通宝	江戸	--	裏文字有
96	寛永通宝	江戸	--	四文銭	105～130	寛永通宝	江戸	--	
97	寛永通宝	江戸	--	裏「元」	131	寛永通宝	江戸	--	鉄銭
98	寛永通宝	江戸	--	裏「小」	132	寛永通宝	江戸	--	鉄銭
99	寛永通宝	江戸	--	裏「元」	133	寛永通宝	江戸	--	鉄銭
100	寛永通宝	江戸	--	裏「元」	134	二銭銅貨	明治	--	明治10年

Ｄ．石器（図版第11・48）

叩き石と石鏃がある。叩き石は砂岩製で，両短側面を叩き石として使用し，上面と下面は凹み石としても使用している。石鏃はチャート製で全周を両面から剝離して刃を作り出している。

（森島）

第4章　総　　括

第1節　検出遺構

平山城・平山東城の調査では，戦国期の城を考察する上で，多大な成果をあげることができた。以下，平山城を中心にまとめを行う。

平山城では，２段の郭のそれぞれから建物跡を検出した。城の主要部分は，面積の広い第一郭が占めているが，高所に位置する第二郭は，狭いながらも城の中枢を担った場所としての位置づけが可能である。これは，検出した建物の構造や，畝状堅堀群の存在によって裏づけされる。

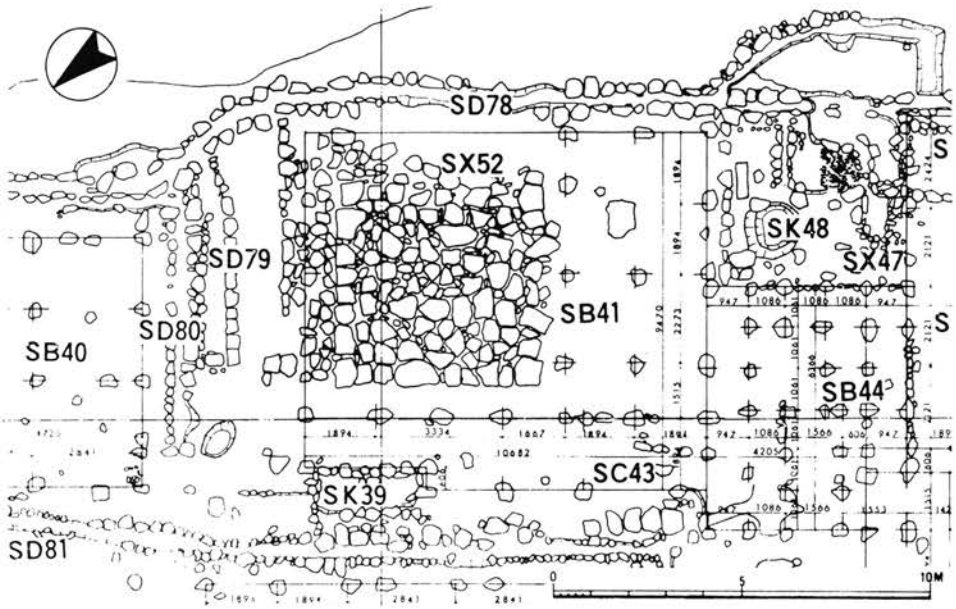
第二郭で検出したＳＢ04及びＳＢ05は，すでに記したようにＳＢ05が石敷を有する特異な建物であることから，ＳＢ04とは性格を異にするものの，一連の建物であると考えられる。ただし，ＳＢ05の具体的な性格については，現状では確定しがたい。建物の内部に石敷をもつ例としては，一乗谷朝倉館跡(注14)においてＳＢ03内のＳＸ42及びＳＢ41内のＳＸ52が認められるが（第17図参照），石敷の方法等に違いがあり，また性格も不明とされている。石敷については，今後，類例の増加をまって検討を加えたい。

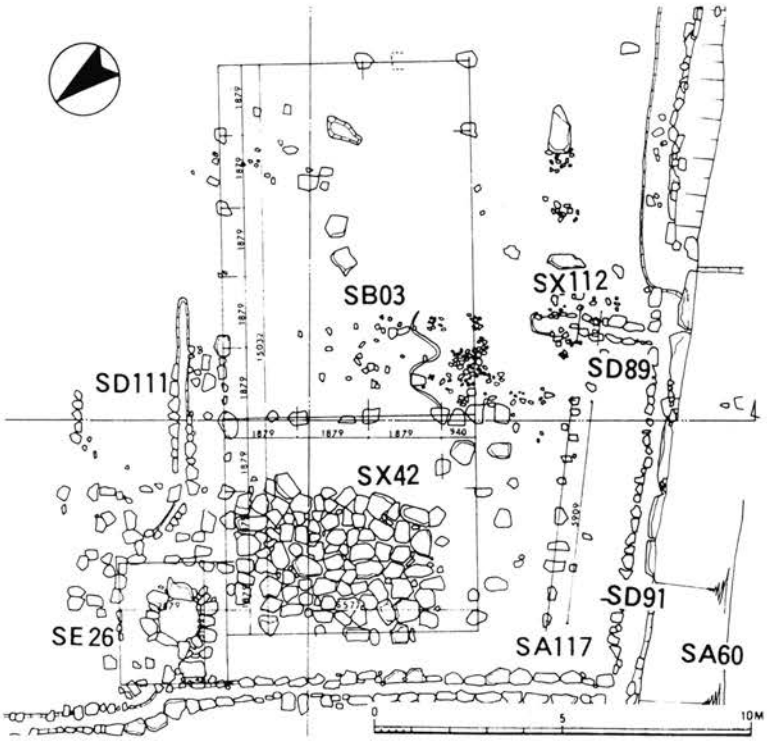
ＳＢ05の構造を考えると，ＳＢ04よりもやや大きく，安定した礎石が用いられていることから，平家ではなく，高層の建物である可能性がある。この点からすると，天守に相当する建物として捉えることができるかもしれない。

また，平山城の西側で検出した畝状堅堀群は，その位置関係から第二郭への進入を防ぐために築造されたものと考える。畝状堅堀群の効果は，先に記したが，多大な労働力を費やしても，第二郭を防御する必要があったといえよう。

このように，平山城では，尾根上に連郭の形態を取り，第二郭を独立させることで，城の機能を分化させていると考えられる。その際，より高所に位置し，より安全な第二郭に建てられたＳＢ05及びＳＢ04が城の中核をなす施設であったと思われる。

平山城のこの形態は，城郭の発展段階の中では，どのように位置づけられるであろうか。中世城館から城郭への発展段階を提示した中井均氏の分類に従えば(注15)，平山城は，Ⅲ－ｂタイプー明確な大溝（あるいは土塁)によって囲まれる，複郭・連郭のもので，館から城へ移行する段階のもの，丘陵先端上に立地するものーの延長上で理解することができ，より城としての設備が整った段階とみることができよう。平山城と平山東城が構造面で共通した要素を持つことはすでに記したが，単郭というより簡素な形態を持つ平山東城を，平山





第17図　一乗谷朝倉館跡検出遺構図（ＳＢ03・ＳＢ41）

（『朝倉氏遺跡発掘調査報告』Ⅰ福井県教育委員会　1979より転載）

城の支城と考える方が妥当であろう。両者とも戦国期に城としての最盛期を迎えるが，背後の丘陵頂部に位置する高城を含めて，一体化したものとして捉えておきたい。

さて，平山城は第一郭・第二郭の建物ともすべて焼失して城としての機能を最終的に停止する。検出した状況から，一時に焼失したことは明らかであり，戦乱の結果とみることができよう。焼土内から出土した遺物の下限は，1600年を前後する時期が与えられており，城の廃絶をこの時点に求めることができる。しかしながら，次節で明らかにされるとおり，焼亡時にはすでに平山城の住居機能は低下していると考えられる。平山東城は，16世紀後葉から17世紀初頭の遺物が認められないことから，平山城の住居機能の低下とともに城としての機能を失ったものと考えられる。

その後の平山城は，第一郭で17世紀の遺物がわずかながらみられ，18世紀では肥前磁器を中心に遺物が散見されることから，何らかの形で再利用されたことがうかがわれる。

以上，検出遺構からみた平山城・平山東城の調査成果を概略述べたが，今後の課題とするべき点を多く残した。特に，大規模な畝状竪堀群の調査成果は，近年の関心の高まり[注16]とともに，調査例の増加が予想されるが，現状では調査例が少なく[注17]，今後比較・検討が必要となるだろう。

（鍋田）

第２節　出土遺物

１．平山城跡の焼土層の年代について

平山城跡では第一郭・第二郭の両方で焼土層が検出されたが，これらの焼土層の形成された時期について考えてみたい。

まず，第一郭の建物跡ＳＢ01に伴う焼土層から出土している遺物のうち，量が多い土師器皿について考える。土師器皿のうち，最も時期の下がると考えられる75・95・100・101は底部と口縁端部の境に強い横ナデによる凹線が明瞭に認められ，口縁端部の断面形が三角形を呈するもので，平安京左京内膳町と比較すれば[注18]，16世紀末に比定されているＳＫ13や，「慶長九年」(1604年)銘の付札が出土したＳＫ42出土の土師器皿に類似する。内膳町のＳＫ13とＳＫ42の土師器皿は口縁端部の器壁の厚さが違うものの，器形の特徴は同様であり，平安京から離れた平山城跡の土師器皿がＳＫ13とＳＫ42のどちらにより類似するかを議論することにはあまり意味がないと思われる。したがって，これらの土師器皿の年代を16世紀末～17世紀初頭と理解しておく。次に，越前焼中甕（199）が参考になる。これは一乗谷Ⅲ期[注19]の遺物群よりは明らかに後出するもので，16世紀第４四半期以降のものである。また，この破片には鬼板が塗られていない。越前焼で鬼板が塗られるようになる時期は，平等岳

の谷窯跡群の調査の成果などにより，17世紀の第１四半期でもかなり早い時期という考え方が示されている。(注20) したがって，この越前焼中甕の年代も16世紀末～17世紀初頭と理解してよいものと思われる。焼土層中には，これらの他に明らかに17世紀以降に下がると考えられる遺物はなく，越前焼の中甕が２次的に火を受けていることから，この焼土層の形成されたのは16世紀末～17世紀初頭，すなわち1600年前後と考えることができよう。第二郭建物跡ＳＢ04・05に伴う焼土や，焼土が多量に入っていた第二郭土坑ＳＫ04出土の土師器皿も同様の時期であり，平山城は第一郭・第二郭とも同時に焼亡したものと考えられる。

２．遺物のセット関係についての問題点

平山城の焼亡を1600年前後と考えて他の遺物をみた場合，平山城跡から出土した遺物は大きくふたつのグループに分けることができる。第１は平山城の焼亡以前の遺物群であり，第２は平山城焼亡後の遺物群である。第２の遺物群には17世紀前半に比定されるものが認められず，第１の遺物群と隔たりがあるので，両者の峻別は比較的容易である。また，第１の遺物群については，平山城跡では平山城以前の遺構は検出されておらず，時期的に大きく遡る遺物も丹波型の瓦器椀が１点あるのみ(163)であることから，そのほとんどが平山城において使用されたものとみてよいであろう。

ここでは第１の遺物群のうち，土器類について他の消費地遺跡と比較検討し，そのセット関係にみられる特徴を明らかにしたい。

最も出土量の多い土師器皿は，14～15世紀代のものもあるが，16世紀後半以降のものが中心となる。永禄11(1568) 年の信長入京時が上限とされている内膳町ＳＤ170(注21)に類似するものと，前述の16世紀末～17世紀初頭に比定されるものが同程度ある。

次に，貿易陶磁をみてみよう。白磁は，15世紀第４四半期から16世紀第３四半期前後の端反り皿と，高台から口縁部に向かってラッパ状に開く皿が中心で，前者のほうが多い。このほか14・15世紀代の椀，小杯がある。16世紀中葉から後葉の白磁の菊皿は認められない。青磁は少ないが，15世紀後葉から16世紀中葉の細線による蓮弁文椀と無文の椀のほか，14・15世紀代の香炉，盤，稜花皿がごく少数あり，16世紀中葉から後葉の菊皿はない。染付では，15世紀後葉から16世紀前半の「蓮子椀」の系統に属する椀と，端反り形で唐草文をもつ皿，「碁笥底」で口縁部が内湾する皿が中心である。16世紀中葉から後葉の「饅頭心」の系統に属する椀は一定量あるが，「饅頭心」系統の椀とセットになるといわれる口縁部に四方襷文をもつ端反り形の皿はない。貿易陶磁のあり方は天正元 (1573) 年に滅亡した一乗谷(注22)や小谷城(注23)に類似しているが，青磁・白磁の菊皿，口縁部に四方襷文をもつ端反り形の皿を欠く点で，やや古い時期に中心をおくセットであると考えられる。

瀬戸・美濃焼はどうであろうか。天目茶椀は型式認定が難しいが，大窯Ⅰ期～Ⅱ期に比定されるものが最も多く，わずかに2個体，大窯Ⅲ期かと思われるものがある(169・7)。灰釉丸椀は細線によるヘラ描き蓮弁をもつもので大窯Ⅰ期に比定できる。灰釉皿は端反り皿と丸皿であるが，前者がほとんどである。菊皿や折縁の菊皿はみられない。灰釉皿も天目茶椀と同様に大窯Ⅰ期～Ⅱ期を主体とし，Ⅲ期のものは1個体認められる(139)のみである。これを一乗谷や小谷城と比較すると，平山城では灰釉皿のうち端反り皿がほとんどを占める点と菊皿が認められない点が異なり，天目茶椀は大差ないようである。端反り皿の盛行する時期が丸皿の盛行する時期より古いことや，菊皿が一乗谷でも多量に出土するものでないことを考えると，平山城の瀬戸・美濃焼は，貿易陶磁同様，一乗谷や小谷城のセットに近似するものの，やや古い時期を中心とするあり方を示すといえるだろう。

越前焼についても1個体だけある前述の中甕を除けば，同様のことが言える。すり鉢は断面三角形を呈する口縁部のすぐ下に段，もしくは沈線の巡るⅣ群[注24]とされるものばかりで，一乗谷に少量みられるⅤ群（口縁部の段や，沈線がない)は認められない。少量出土している備前焼のすり鉢も，天正8(1580)年の廃城の直後に一挙に埋められたと考えられている第2次若江城[注25]の小堀や，同じく天正8(1580)年に焼亡した石山本願寺[注26]から出土する備前焼すり鉢の最も新しいものよりは型式的に遡り，16世紀中葉のものと考えられる。丹波焼すり鉢も豊臣氏大坂城期[注27] (1580～1615年)出土のもののうち最も遡るものよりも，さらに型式的に先行し，やはり，16世紀中葉に属すると考えられる。

以上より，平山城の第1の遺物群は，1600年前後に焼亡したと考えられるにもかかわらず，16世紀中葉の土器類を主体とし，これに16世紀後葉から17世紀初頭の土師器皿等を少量加えた土器群であるといえる。

3．平山城の土器類の組成

ここでは，平山城の土器類の組み合わせとその特徴について考えてみたい。

供膳具の椀皿類は，貿易陶磁，瀬戸・美濃焼と土師器皿が占めている。貿易陶磁では，白磁皿が多く，土師器皿に比肩するほどである。染付，瀬戸・美濃焼の灰釉も椀より皿が多く，土師器皿には燈明皿として使用されたものがあることや，天目茶椀が日用の椀として使われたことを考慮しても土器類の供膳具に占める椀の割合は極めて低い。このことは，漆器椀，木地椀の使用を思わせるものである。土師器皿は，すべて手づくねで，回転台使用のものはない。器形の特徴も京都出土のものと酷似するものが多く，中には京都からの搬入品かと思われるものがある。土師器皿の様相は畿内的というよりも，京都的であるといえる。

貯蔵具の壺甕類は丹波焼と越前焼が占めており，備前焼が１個体みられる。丹波焼が大半であり，丹波国に位置し，越前にも近い平山城の立地を反映しているものと考えられ，これらは，京都を介さずに隔地間流通によってもたらされたものであろう。

すり鉢は，丹波焼と越前焼に在地産の土師質または瓦質焼成のすり鉢と備前焼が加わる。丹波焼が多いが，その占有率は壺甕類よりは低いようである。16世紀の京都で出土するすり鉢はほとんどが信楽焼なので，これらも京都を介さずに入手したものと思われる。したがって，隔地間流通によりもたらされた丹波焼，越前焼，備前焼に在地産のすり鉢が加わった競合状況とみられるが，３種のすり鉢は，その機能を左右するすり目の付け方，焼成にそれぞれ特色があり，用途による使い分けが行われていた可能性も考えられよう。

土器類の煮炊具はなく，鉄鍋が使用されていたものと考えられる。土器類の煮炊具をもたないのは東北から山陰中部にかけての日本海側の特徴であり，この点では平山城は日本海地域的であるといえる。

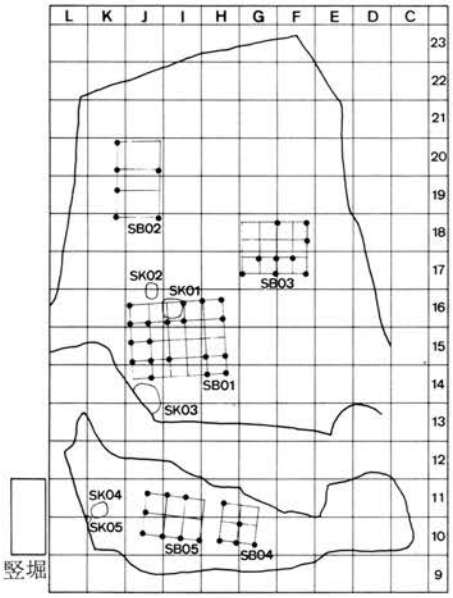
４．土器類の出土分布からみた建物の機能

平山城跡で検出された建物は掘立柱建物跡と礎石建物跡であり，それぞれの建物に確実に伴うと判断できる遺物は第一郭建物跡ＳＢ01に伴う焼土と第二郭建物跡ＳＢ04・05に伴う焼土の出土遺物のみであり，その器種別の破片数は第４表のとおりである。しかしなが

第４表　平山城跡出土土器類組成表

		第一郭 ＳＢ01に伴う焼土	第二郭 ＳＢ04・05に伴う焼土			第一郭 ＳＢ01に伴う焼土	第二郭 ＳＢ04・05に伴う焼土
白磁	椀	1	0	青白磁	小皿	2	1
	皿	44	5		水滴	1	0
	小杯	1	0		計	3 (1.60%)	1 (1.32%)
	不明	5	0	土師器	皿	43 (22.99%)	7 (9.21%)
	計	51 (27.27%)	5 (6.58%)	瀬戸・美濃焼	灰釉皿	1	5
青磁	椀	2	0		天目椀	2	4
	皿	2	0		計	3 (1.60%)	9 (11.84%)
	盤	2	0	丹波焼	壺甕類	51	32
	香炉	0	3		すり鉢	6	3
	計	6 (3.21%)	3 (3.95%)		計	57 (30.48%)	35 (46.05%)
染付	椀	3	2	越前焼	壺甕類	10	4
	皿	4	2		すり鉢	2	0
	不明	1	0		計	12 (6.42%)	4 (5.26%)
	計	8 (4.28%)	4 (5.26%)	瓦質土器		4 (2.14%)	8 (10.53%)
				合計		187	76

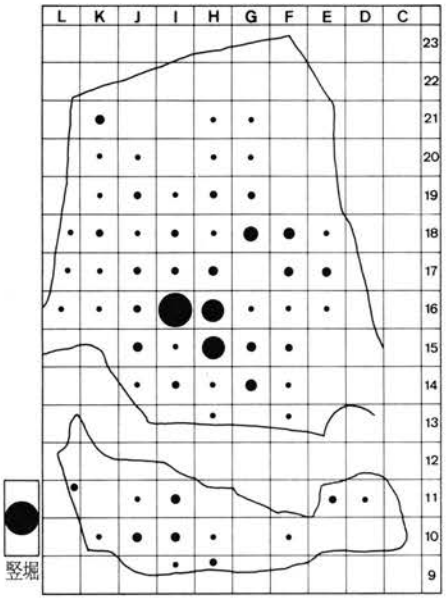
ら，前述のように平山城は第１の遺物群と第２の遺物群の峻別が比較的容易であり，第１の遺物群を平山城に伴う遺物であると判断して大過ない。そこで，上層から出土した遺物も含めた遺物の出土分布の状況から，その場所にあった建物の機能について考えることができないものかと考えた。後世になんらかの事情で上層に上がってしまった遺物の分布も，ある程度は本来の分布を反映していると考えられるからである。



第18図　平山城跡　検出遺構位置図
（出土遺物分布状況図と対応）

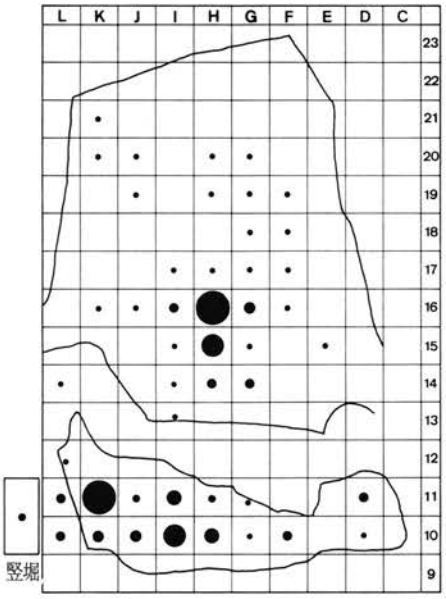
第18図～第20図は平山城跡出土土器類の地区別出土分布状況を示したものである。まず，供膳具の土師器皿，白磁(ほとんどが皿である)，調理具のすり鉢，貯蔵具の丹波焼，越前焼，備前焼の壺甕類の分布がそろって，16Ｉ，16H，15H区に集中する傾向が顕著に認められる。この場所は建物跡ＳＢ01の北東隅にあたる場所であり，この一角が厨房の機能をはたしていたと考えることができるのではないだろうか。とすれば，建物跡ＳＢ01が平山城における主たる生活の場とみることができるが，これは，建物の規模からも想定できることである。建物跡ＳＢ03付近には建物跡ＳＢ01ほどではないが，土師器皿，白磁の集中傾向が認められるので，やはり日常的に使用される建物であったのだろう。一方，建物跡ＳＢ02付近には青磁が多く分布し，天目茶椀にも同じ傾向がうかがえるが，土師器皿，白磁は集中しない。青磁は14・15世紀代からの伝世品と考えられるものが多いことから，建物跡ＳＢ02は日常の生活の場とは異なる機能をはたす建物であったことが考えられよう。第二郭は土師器皿，白磁，染付が少ない。第二郭の建物跡は，その構造や立地からみても特別の建物であることが想定されており，遺物からみても日常の生活の場ではないと考えられる。また，第二郭には貯蔵具が多く分布しているが，丹波焼甕の同一個体の破片が多く，個体数としては決して多くない。しかし，この場所に貯蔵具が備えられていることには注意しておく必要があるだろう。

以上より，平山城で住居機能をはたしていたのは第一郭であり，第二郭は主として防御機能をはたしていたものと考えられる。このことは，平山城の西側斜面で検出された畝状竪堀群が第二郭への侵入を防ぐことを目的としていることからも明らかである。



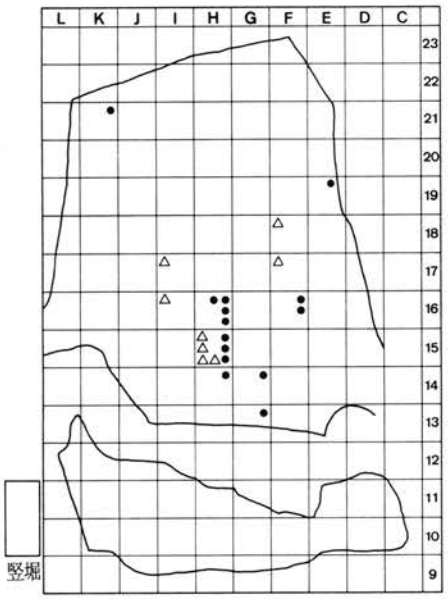
土師皿

• 1～3
• 4～6
• 7～9
• 10～15
● 16～20
● 21～30
● 31以上



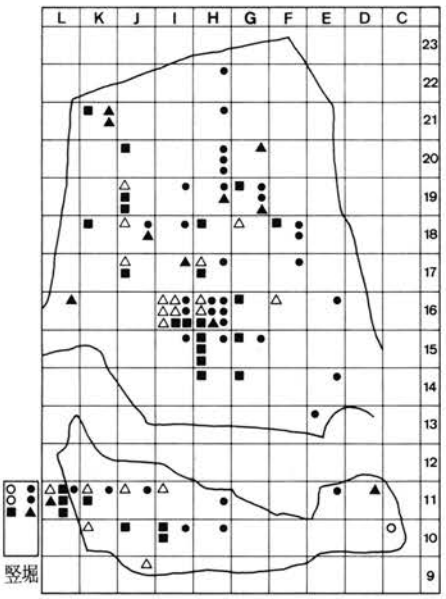
壺・甕(丹波)

• 1～5
• 6～10
• 11～15
• 16～20
● 21～40
● 41～60
● 61以上



壺・甕(備前・越前)

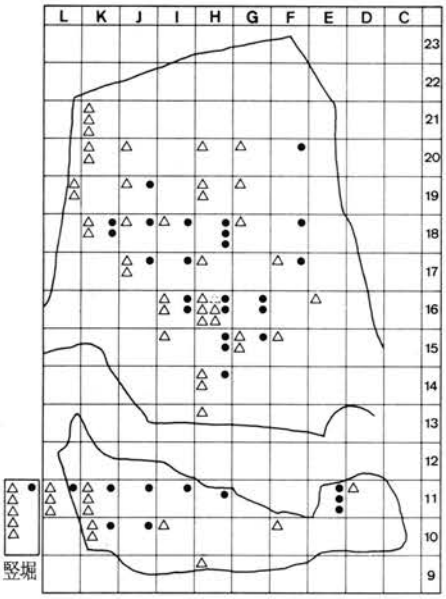
• 備前　△ 越前
(ドット数＝出土点数)



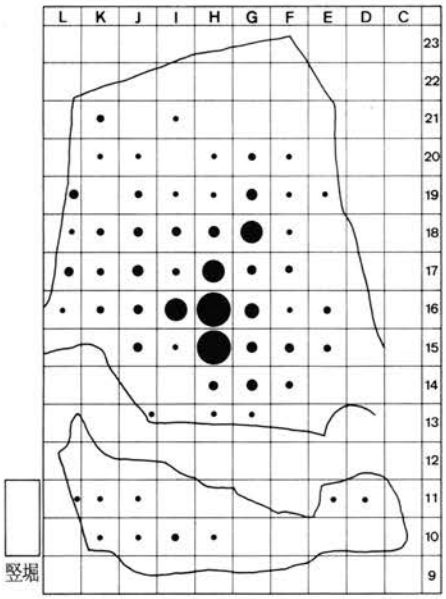
擂鉢

• 丹波　△ 越前　▲ そ の 他
○ 備前　■ 在地 (ドット数＝出土点数)

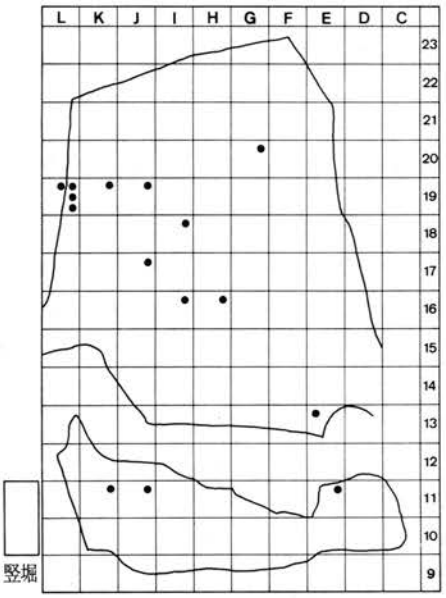
第19図　平山城跡　遺物出土状況図(1)



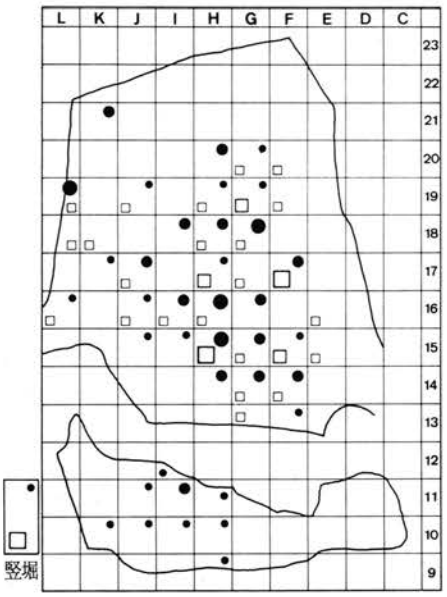
●灰釉　△天目
灰釉・天目　（ドット数＝出土点数）



白磁　• 1～2　• 3～5　• 6～9　• 10～15　● 17～20　● 21～40　● 41以上



青磁　（ドット数＝出土点数）



染付　• 1～2　• 3～5　● 6～10　**肥前磁器**　□ 1～2　□ 3～5　□ 6～10

第20図　平山城跡　遺物出土状況図(2)

5．まとめ

平山城の歴史がどこまで遡ることができるかは明らかでないが，14・15世紀代と考えられる土師器皿が少量あり，その頃から城として利用されていた可能性は考えられる。しかしながら，平山城の中心となる時期は戦国時代末からである。

平山城のある丹波国では丹波国主を称する波多野氏と丹波国守護細川氏の被官で守護代の内藤氏が永禄年間頃より丹波国統一をめざして争っていたとされる。この両者の争いを基軸として在地勢力が複雑な争いを行っていたことは想像に難くない。平山城は先にみたように永禄年間頃までの遺物が多く，また，永禄年間に最も盛んに造られたとされる畝状竪堀群を備えている。平山城もこの争いの渦中にあった在地の土豪の拠った城のひとつであり，城としての盛期もこの頃にあったものと思われる。その後，16世紀後葉の遺物の少なさは，平山城の住居機能の低下を示していると考えざるをえない。おそらくは住居機能が他の場所に移動したと考えられるが，その契機は明らかでない。しかし，明智光秀による丹波攻略の始まる天正初年にはすでに平山城の住居機能は低下しているので，これと結びつけて考えることはできない。在地勢力間の複雑な力関係のなかで，山城に拠る必要のない状況が生まれたのであろうか。

そして，1600年前後に平山城は焼亡し，城としての歴史を終える。丹波地方の武将たちは1600年の関ケ原の戦いのとき，舞鶴の田辺城に篭城する細川幽斎の攻略戦に西軍に属して参加している。平山城は綾部から舞鶴に抜ける道から少し西に入ったところに位置しているので，拠点のひとつとされた可能性も考えられよう。とすれば平山城は田辺城の戦いに伴う小さな戦闘によって焼亡したことも考えられる。

平山東城は遺物が少なく，検出された建物跡の時期も特定できないが，16世紀中葉の遺構（ＳＸ01)が検出されており，同時期の遺物も出土しているので16世紀中葉には城として利用されていたことがわかる。しかし，当該期の遺物は非常に少なく，住居機能をもっていたとは考えられない。この時期は平山城の盛期と重なるので，平山城の支城と位置付けることができるのではないだろうか。すなわち，平山城は敵に攻撃された場合，第二郭を最後の砦とするように造られている。第二郭は畝状竪堀群によって防御されている西側に比べて東側の備えが不十分である。平山城の東側の谷に侵入して第二郭を攻撃する敵を挟撃する機能を担っていたのが平山東城であるといえるだろう。

平山城・平山東城は，文献史料には全く登場しない城である。一方，これまで報告されているこの時期の城館遺跡は，ほとんどが有名な武将の居城であり，必然的に本総括でもそれらとの比較を行うこととなった。しかし，歴史に名を残した戦国武将の居城と比較したときにあらわれる相違点，類似点をどのように評価すればよいのかは今後の課題であろうと思われる。

（森島）

注１　本報告の平山城跡は，『日本城郭大系』11(新人物往来社　1980)では，「平山城跡」(205頁)，『綾部市文化財調査報告』第７集(綾部市教育委員会　1980)では，「中城」(32頁)と記載されている。なお，平山東城跡は，今回の調査によって新たに確認されたものである。

注２　家元恵子，伊勢田恵美子，磯井竹男，伊藤守，岩崎恭子，梅垣文枝，大島多賀子，大槻純子，大槻浩利，大和田淳司，岡田留美，沖ヨシエ，川見晋也，神田昭一，北村清，木下一郎，組藤敦史，黒羽展久，河野美行，佐田修，澤田一二三，沢田博次，塩尻アサノ，塩尻梅代，塩尻信治，塩尻治作，塩尻とみ子，塩尻福太郎，塩尻やゑ，塩見京子，塩見勉，塩見学，四方昭，四方純子，四方富男，四方洋行，品田俊治，篠原熊蔵，白波瀬クニエ，関雅裕，相根あいの，只野昭，立藤聡，谷口ツヤ子，丹新千晶，坪内はつの，中原昌弘，永野和史，永室キクエ，浪江芳計，西田博紀，西村武次，野沢久代，萩野ツヤ子，橋本稔，濱本裕光，引原和子，平田裕，福井和子，福井多美子，藤田キミエ，藤田順基，藤田武，藤田トラ，藤山眞理，藤山留美，古澤幹雄，堀川はま枝，真下定平，松本達也，丸岡一實，丸岡冨江，三和てる，村上綾子，村上千秋，村上文子，村上芳子，村木信子，山口陽一郎，山室明美，山本シズ子，山本由美，吉岡勇治，吉岡譲，吉崎重信，吉崎利一，吉崎一，吉田健治，吉田隆志，吉田秀市，吉田浩，渡辺節子，渡辺又市(50音順)

注３　岸俊男「古代村落と郷里制」(同『日本古代籍帳の研究』所収　塙書房)　1973.5

注４　『平安遺文』315号文書

注５　清水正健『荘園志料』

注６　『綾部市史』資料編　綾部市　1977.1。なお，以下の安国寺文書，岩王寺文書等は，すべてこの書物に所収されたものによった。

注７　『日本城郭大系』11　京都・滋賀・福井　新人物往来社　1980.9

注８　注７に同じ

注９　「綾部の山城」(『綾部市文化財調査報告』第７集 綾部市教育委員会 1980)では，平山城について，３～４段の郭と竪堀が存在すると紹介されている。今回の報告で第一郭とした部分は，中央部においてわずかな段を有しているため二つの郭に分割して理解することも可能である。ただし，第一郭の北半部については今回の調査対象外であるため，その性格が不明であること，現状で北半部と南半部を分割する積極的要素が見られないことなどから，一つの郭として扱うこととする。

注10　竪堀14の南側には，堀切から続く大規模な堀が存在しているが，今回は，これを竪堀には含めていない。

注11　福井県陶芸館の田中照久氏のご教示による。

注12　一乗谷朝倉氏遺跡の朝倉館跡の調査で出土している鉄釘の長さについて３種類あることが予想されているが，平山城で出土している４種類は，朝倉館跡出土の３種類に，さらに短い１種類が加わったものであり，当時の鉄釘に規格品のあったことを示している(『朝倉氏遺跡発掘調査報告』Ⅰ　福井県教育委員会　1979)。

注13　藤原敏晃「平山東城館跡」(『京都府遺跡調査概報』第24冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1987)では，ＳＫ09と報告しているが，今回土坑ＳＫ02に改めた。

注14　『朝倉氏遺跡発掘調査報告』１　福井県教育委員会　1979

注15　中井　均「中世城館の発生と展開」『物質文化』第48号　1987

注16　「いわゆる畝状竪堀群について」(『第3回全国城郭研究会セミナー資料』1986)

注17　畝状竪堀群の調査例としては，管見では，広島市三ツ城跡(奥田壮紀他『三ツ城跡発掘調査

報告』広島市教育委員会　1987)しか，確認できていない。また，竪堀の調査例としては，3条の竪堀を検出した綾部市八津合町所在の上林城(中村孝行他「上林城跡」『綾部市文化財調査報告』　綾部市教育委員会　1980)がある。

注18　伊野近富ほか「平安京左京跡(内膳町)昭和54年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1980)』京都府教育委員会)　1980

注19　16世紀初めに一乗谷に町割りが行われてから天正元(1573)年に焼亡するまでの時期をさす。

注20　小野正敏「戦国から近世へ，越前陶の生産の実態」(『北陸における越前陶の諸問題』　北陸中世土器研究会)　1980

注21　注18 に同じ

注22　『朝倉氏遺跡発掘調査報告』1　福井県教育委員会　1979,『朝倉氏遺跡発掘調査報告』Ⅱ　福井県教育委員会　1988

注23　『史跡小谷城跡』　湖北町教育委員会・小谷城址保勝会　1988

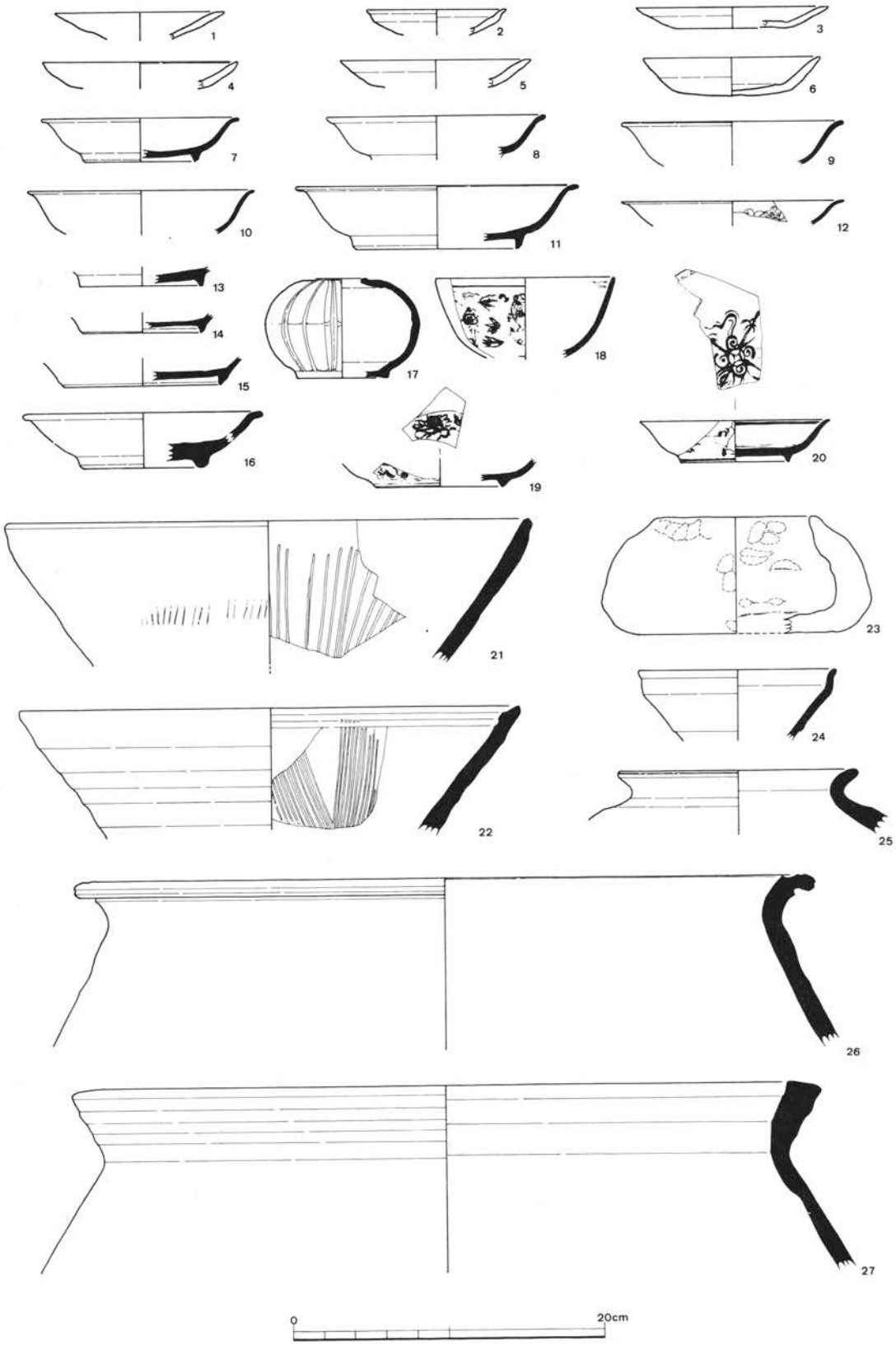
注24　『県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書』　福井県教育委員会・福井県立朝倉氏遺跡史料館　1983

注25　「若江遺跡第38次発掘調査現地説明会資料」　(財)東大阪市文化財協会　1989

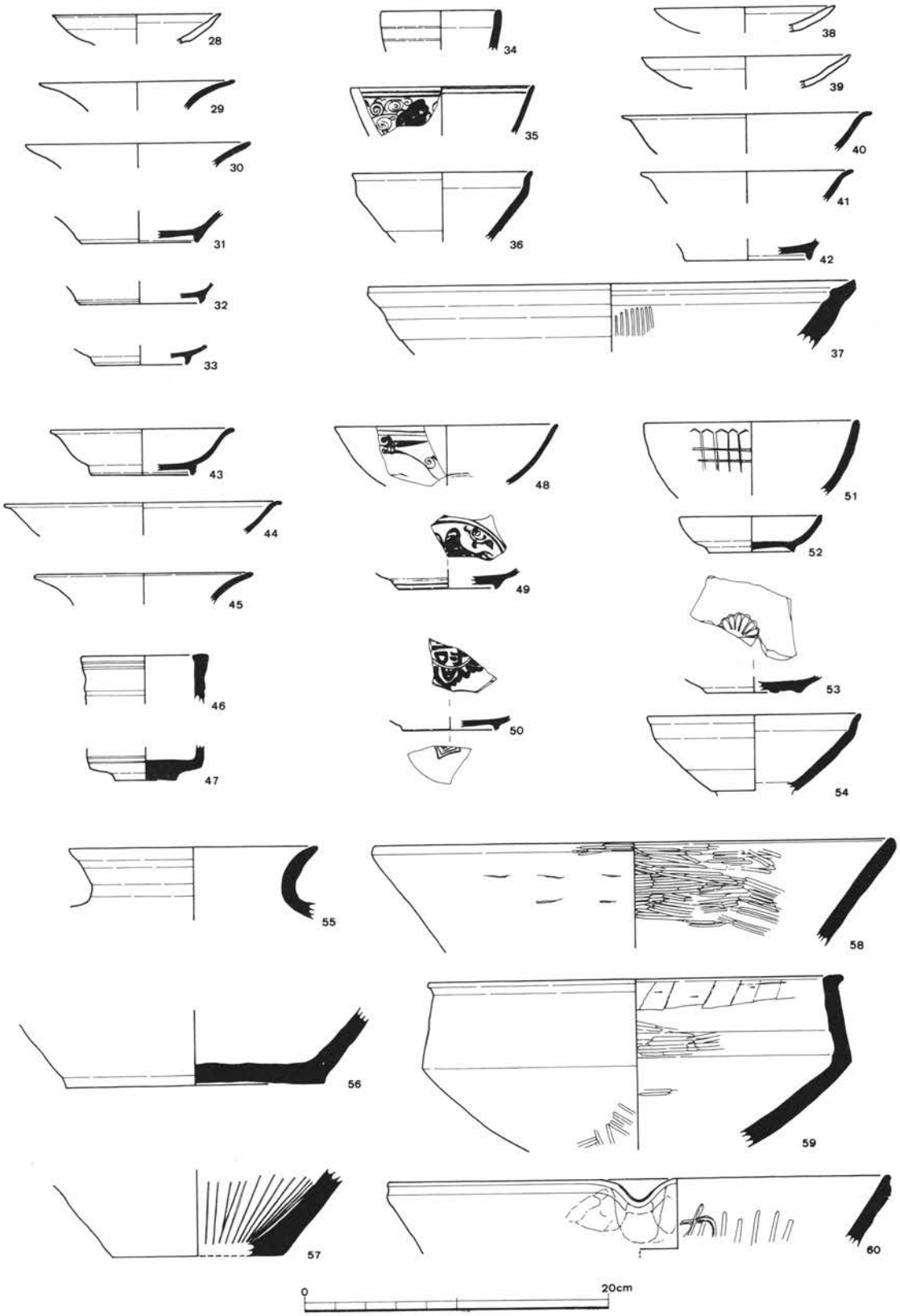
注26　『大坂城跡』Ⅲ　(財)大阪市文化財協会　1988

注27　注26に同じ

図　　版

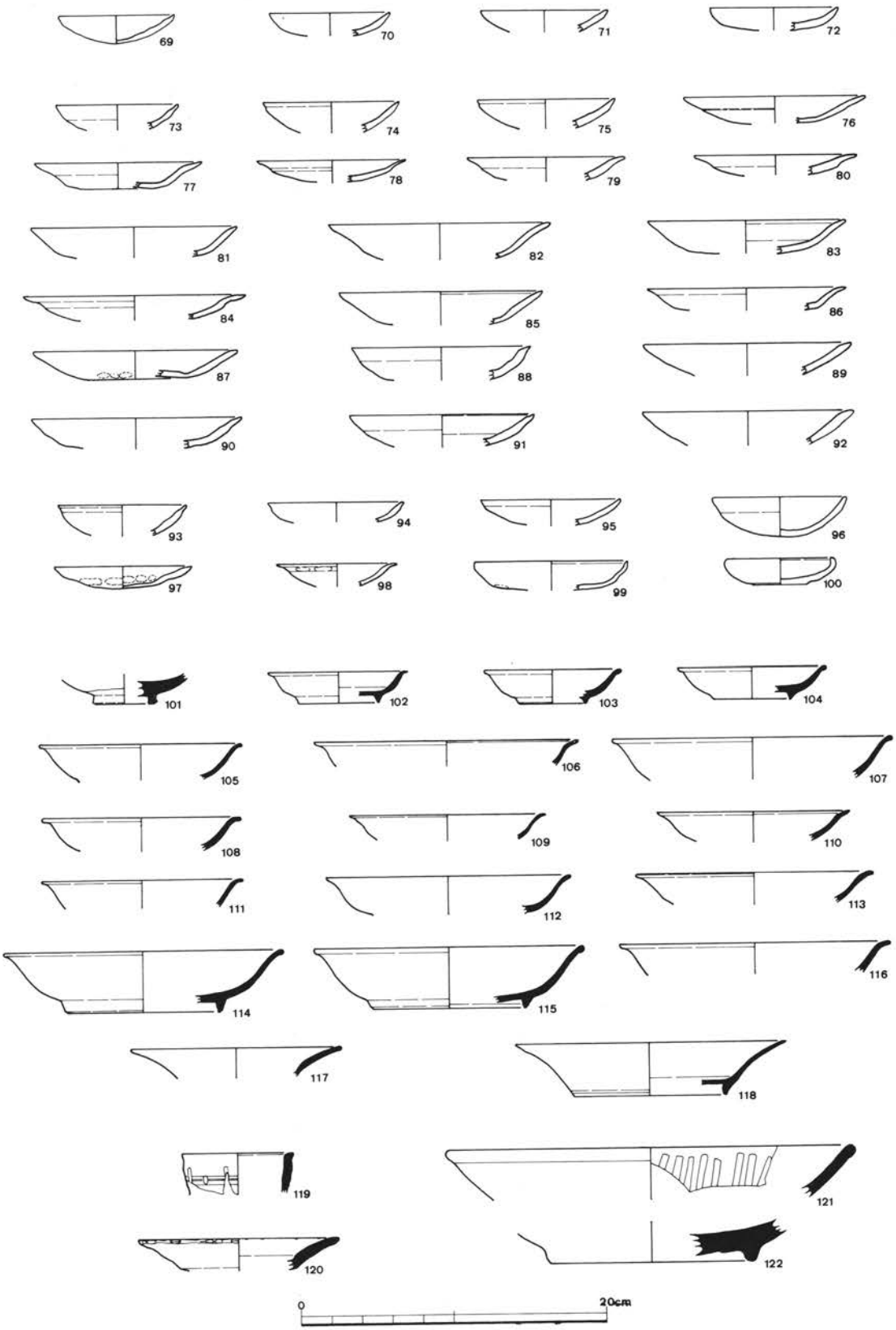


平山城跡　出土遺物実測図(1)　第一郭 建物跡ＳＢ01に伴う焼土

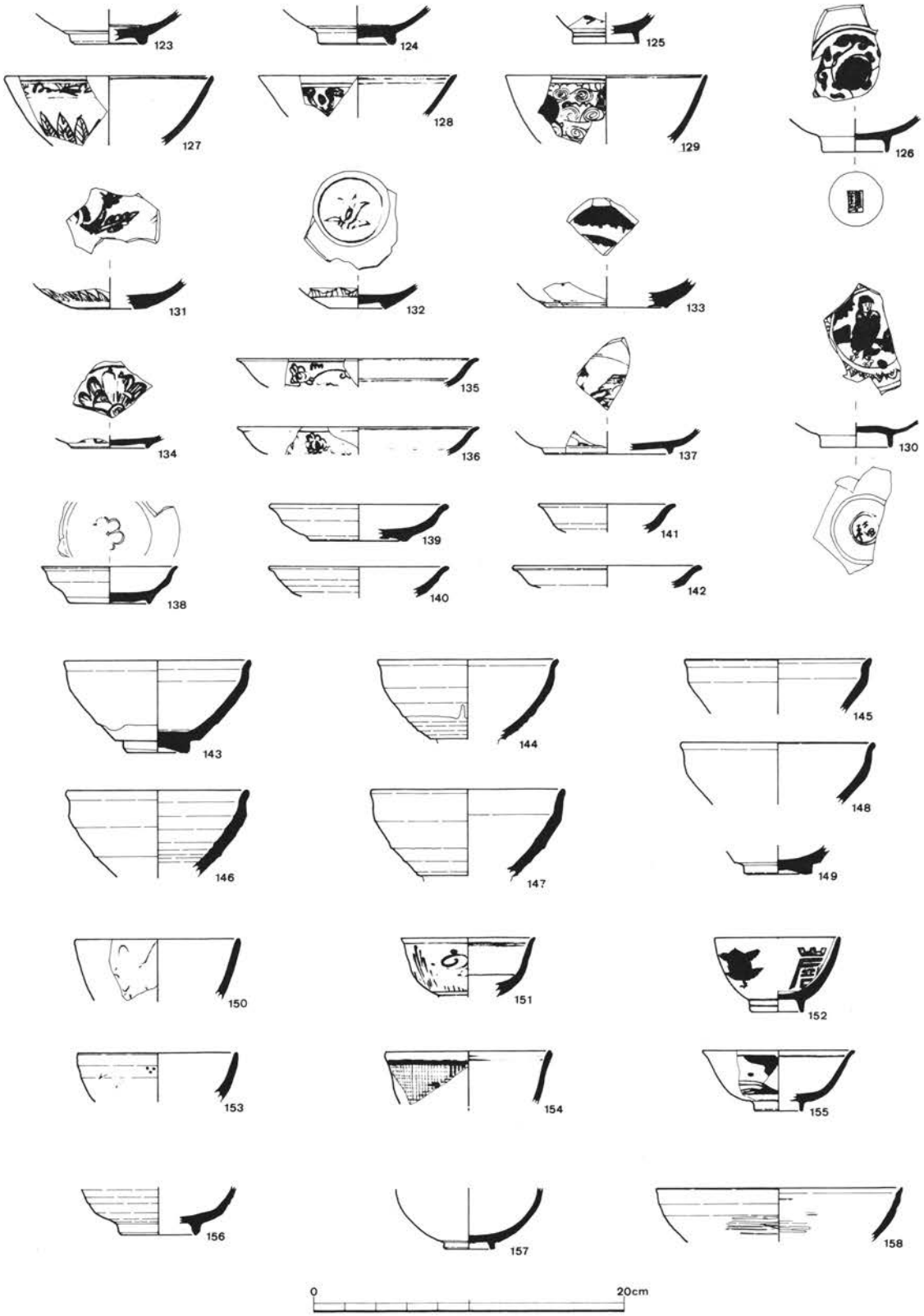


平山城跡　出土遺物実測図(2)　第一郭 土坑ＳＫ01(28～37)第一郭 その他の遺構(38～42)
第二郭 建物跡ＳＢ04・ＳＢ05に伴う焼土(43～60)

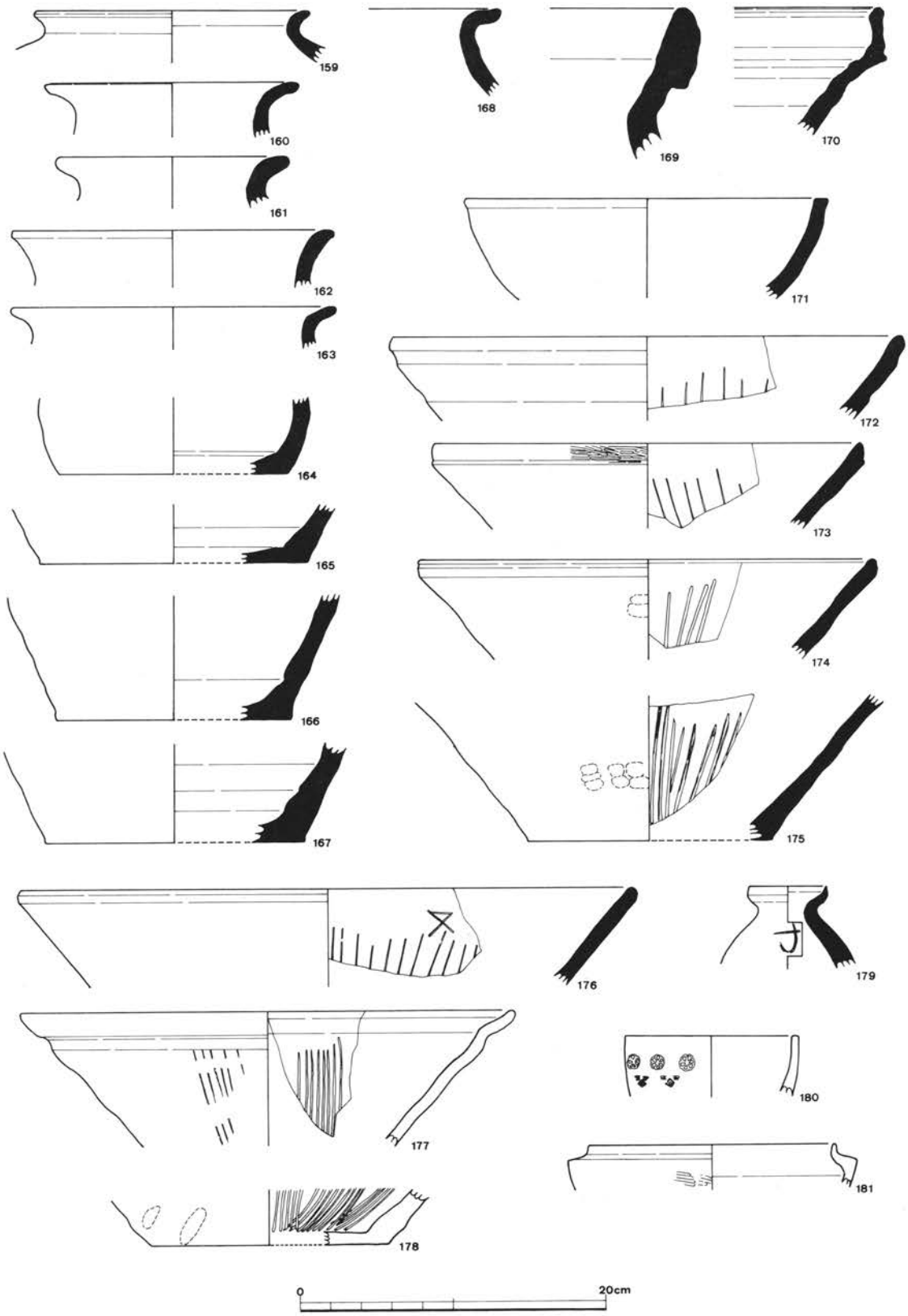
平山城跡　出土遺物実測図(3)　第二郭 土坑ＳＫ04



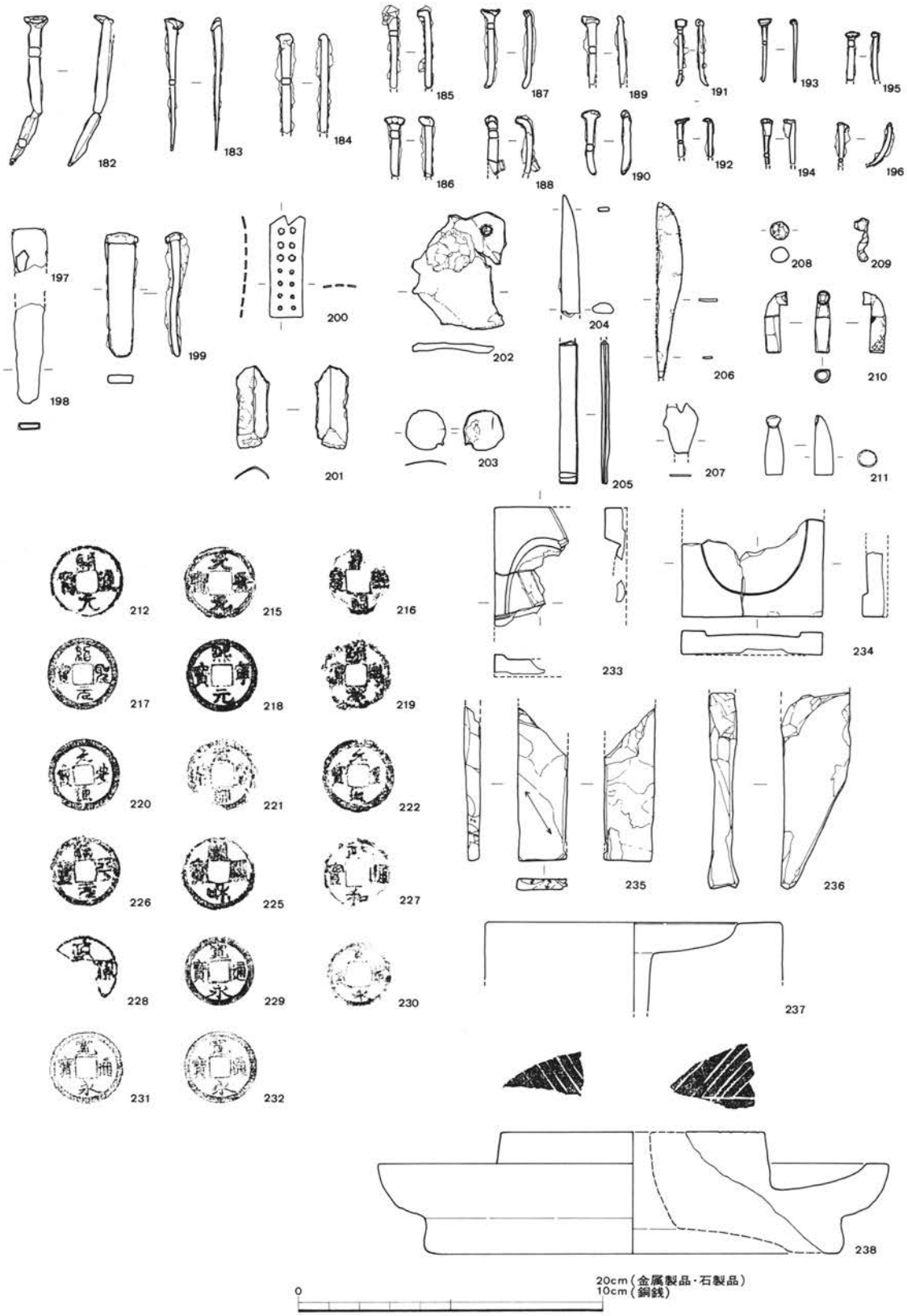
平山城跡　出土遺物実測図(4)　遺構に伴わない遺物



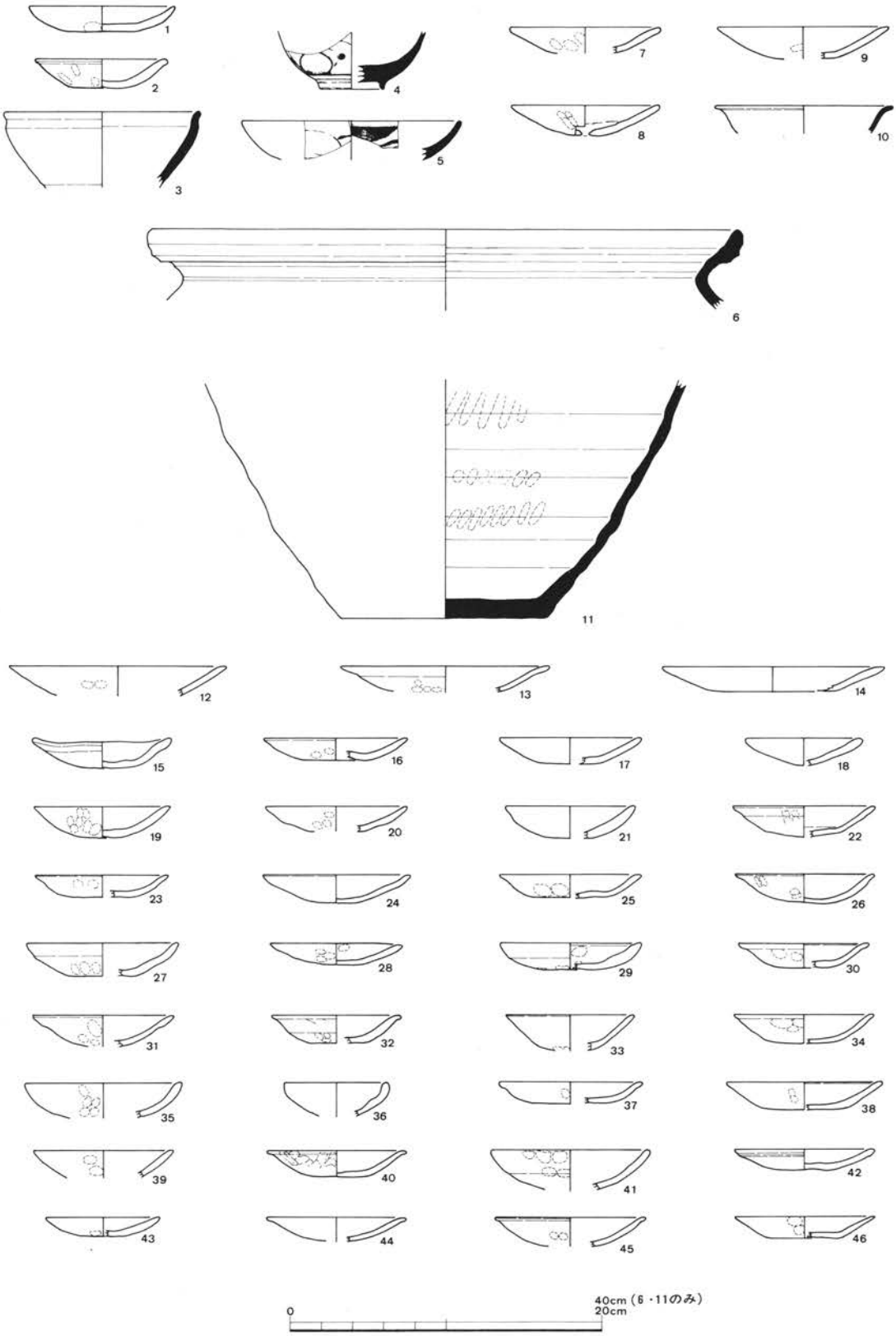
平山城跡　出土遺物実測図(5)　遺構に伴わない遺物



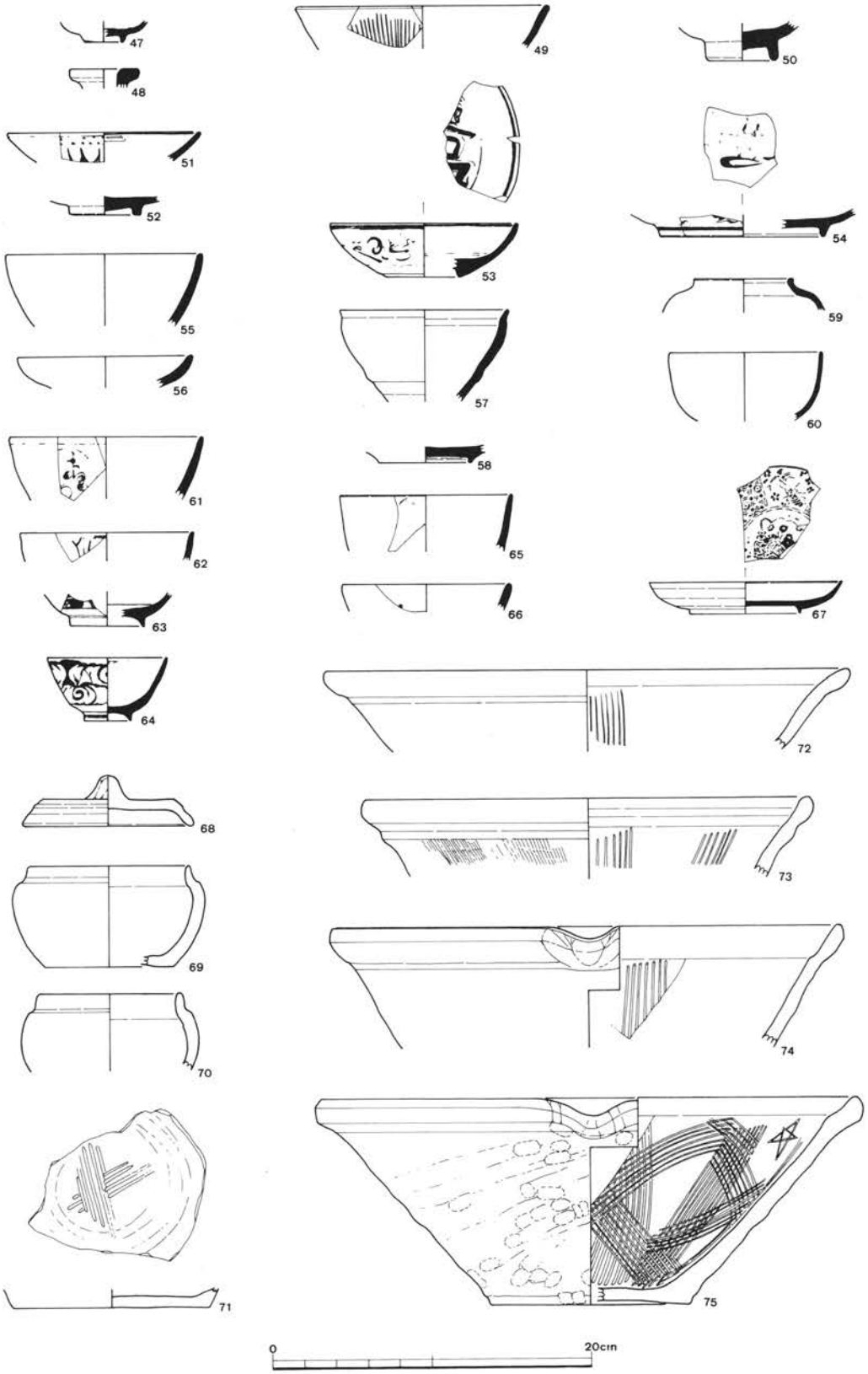
平山城跡　出土遺物実測図(6)　遺構に伴わない遺物



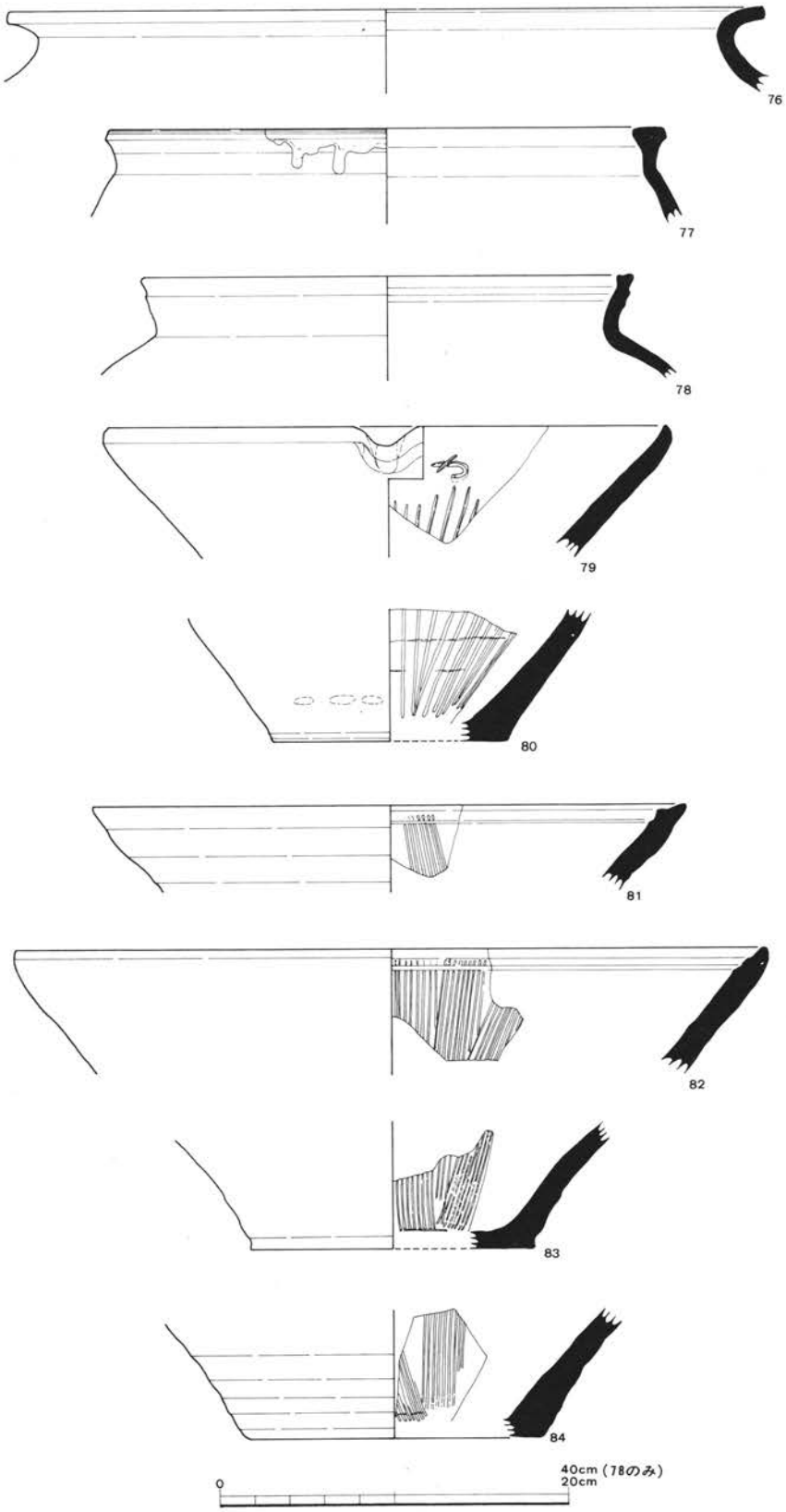
平山城跡　出土遺物実測図(7)　金属製品・銅銭・石製品



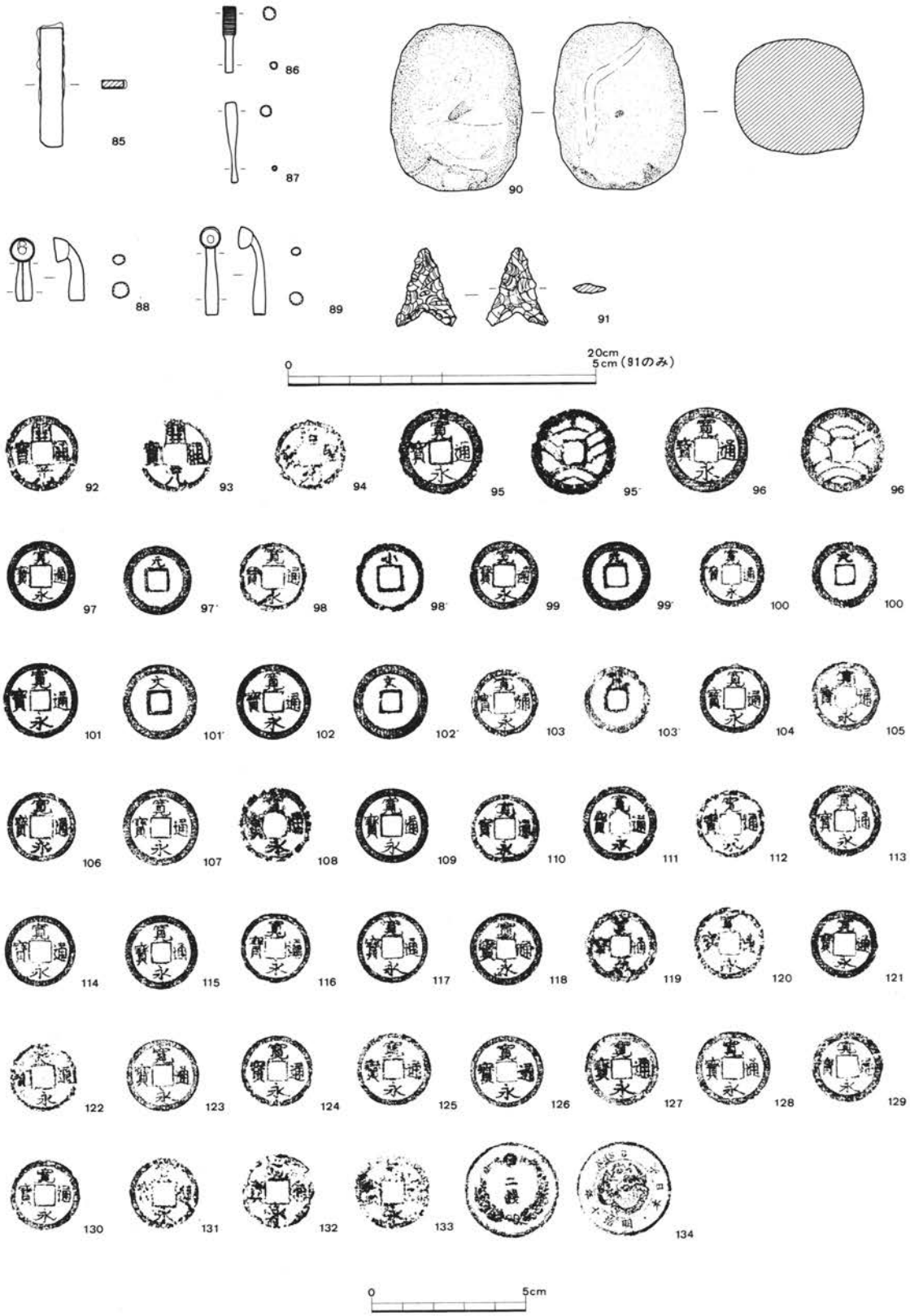
平山東城跡　出土遺物実測図(1)　土坑ＳＫ01（１～６）　土坑ＳＫ02(11)　ＳＸ01（７～10）
遺構に伴わない遺物（12～46）



平山東城跡　出土遺物実測図(2)　遺構に伴わない遺物

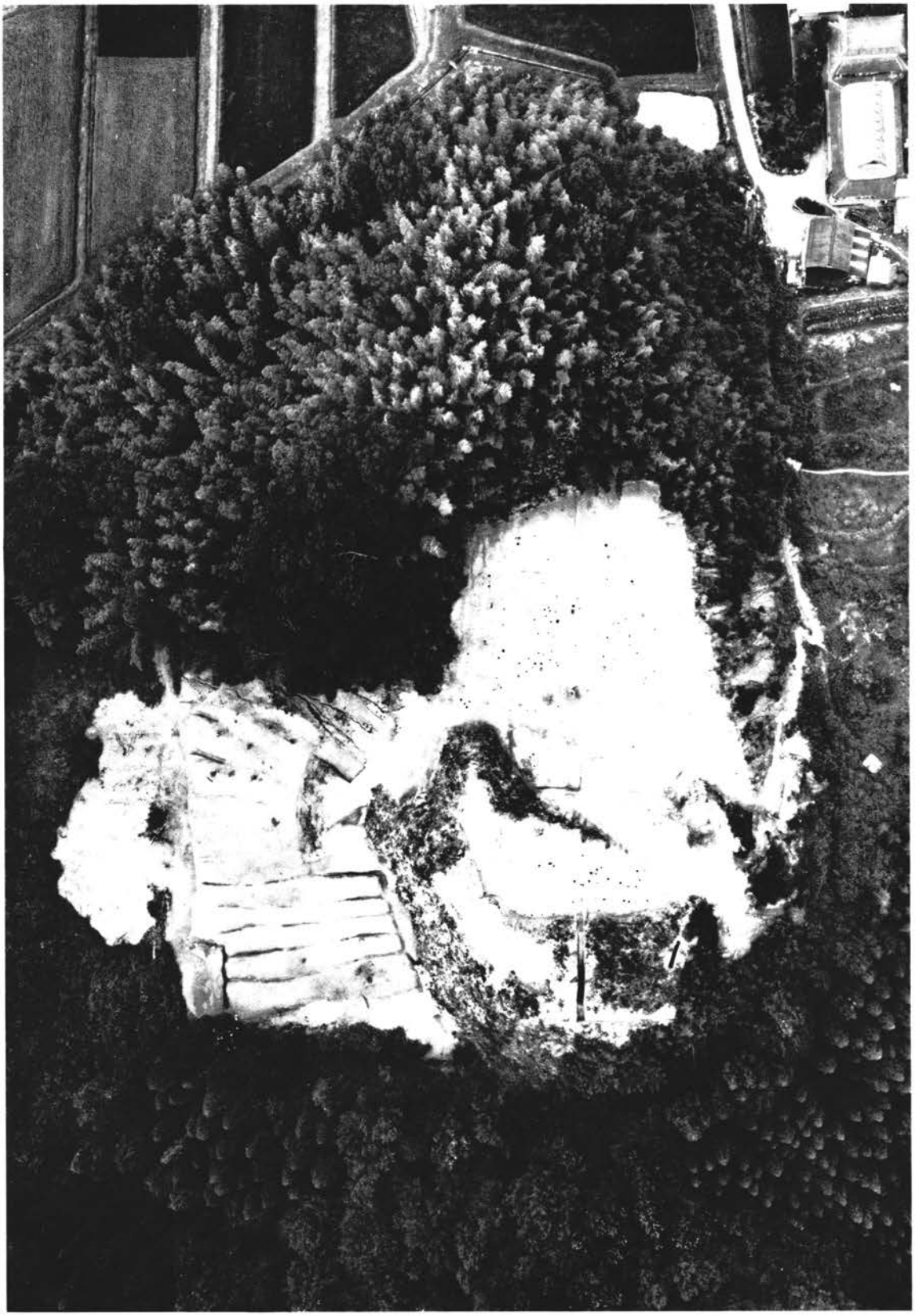


平山東城跡　出土遺物実測図(3)　遺構に伴わない遺物

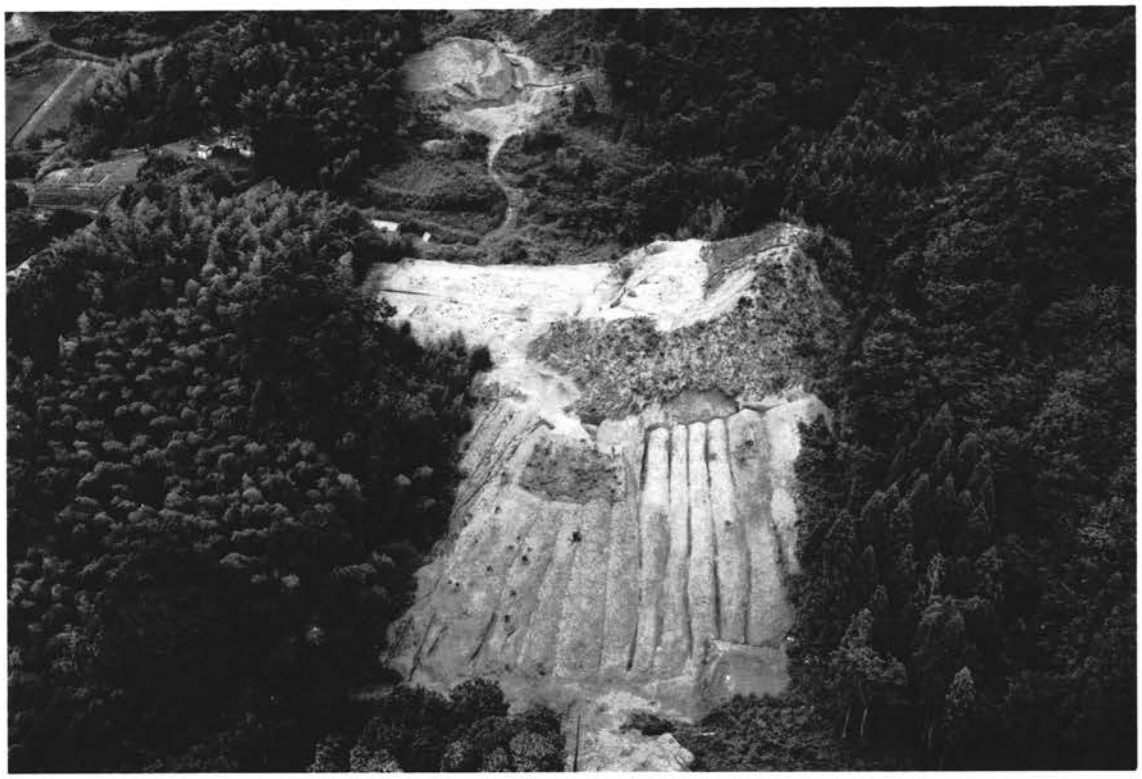


平山東城跡　出土遺物実測図(4)　金属製品・銭貨・石器

平山城跡（下）・平山東城跡（上）全景（調査後）

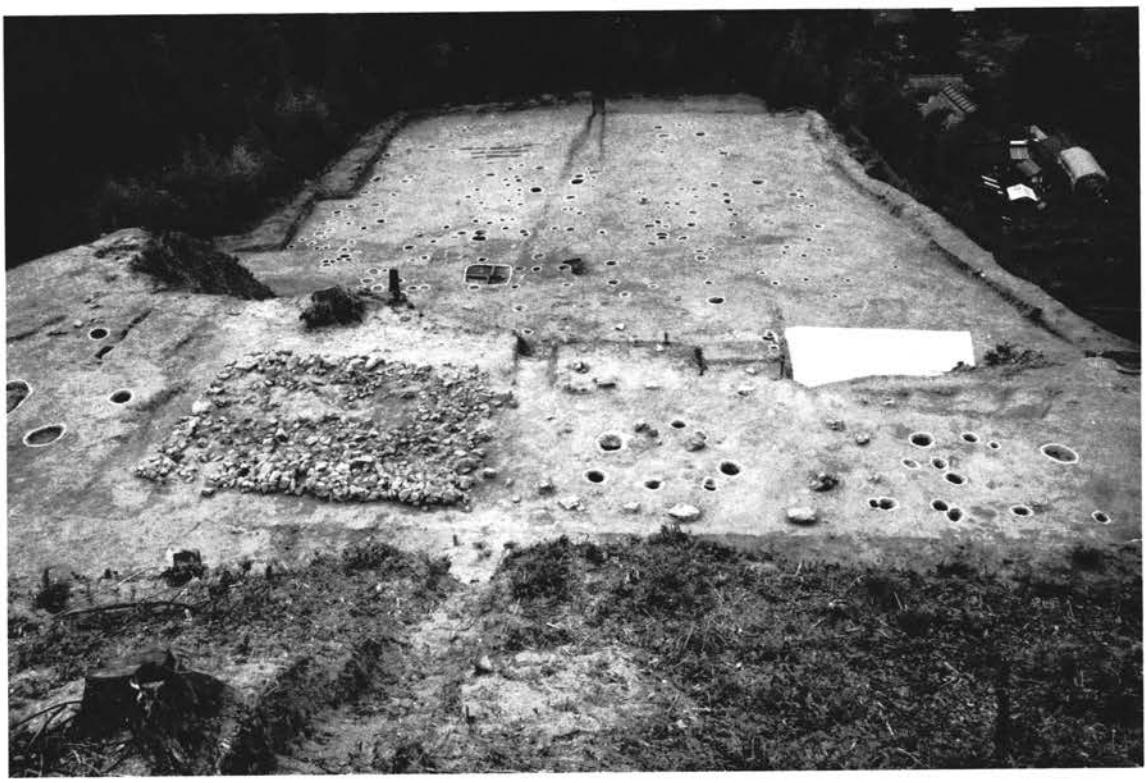


平山城跡全景（調査後）



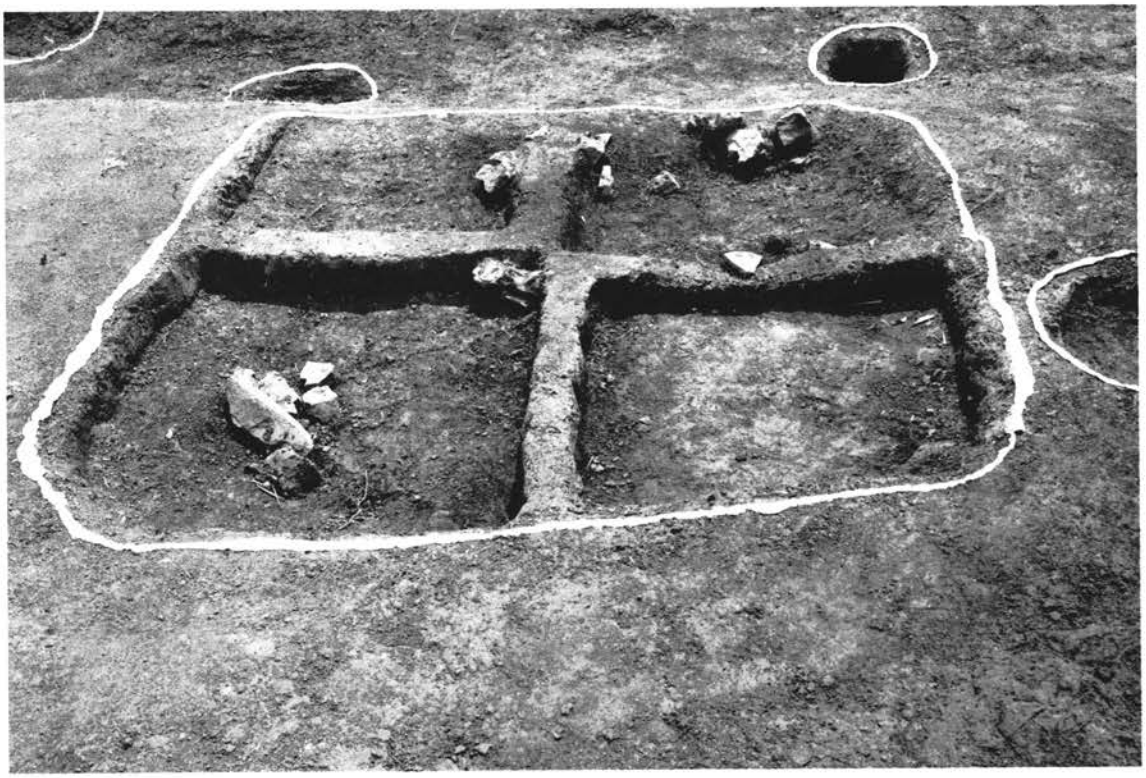
(1) 平山城跡全景(西から)

(2) 平山城跡全景(南から)

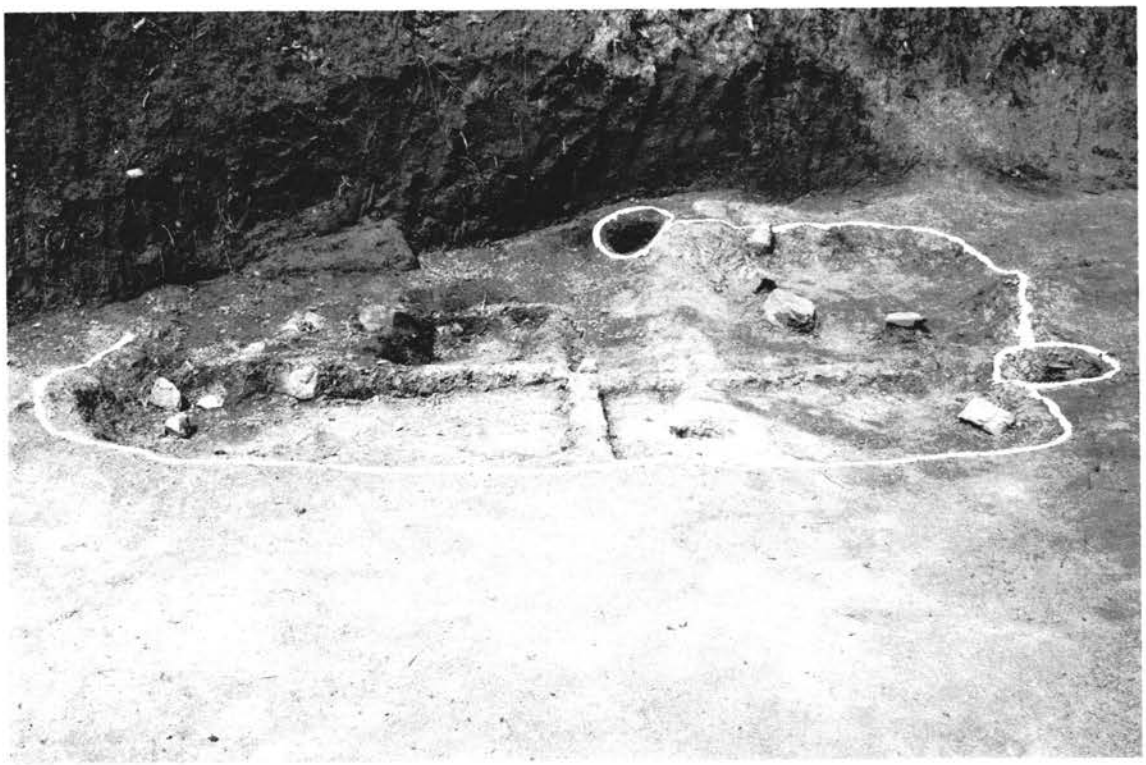


(1) 平山城跡　第一郭及び第二郭遺構検出状況(南から)

(2) 平山城跡　第一郭遺構検出状況(南から)



(1) 平山城跡　土坑ＳＫ01検出状況（西から）



(2) 平山城跡　土坑ＳＫ03検出状況（北東から）

平山城跡　第二郭全景

(1) 平山城跡　第二郭遺構検出状況(西から)

(2) 平山城跡　建物跡ＳＢ05検出状況(南から)

(1) 平山城跡　建物跡ＳＢ04(右)・ＳＢ05(左,石敷除去後)

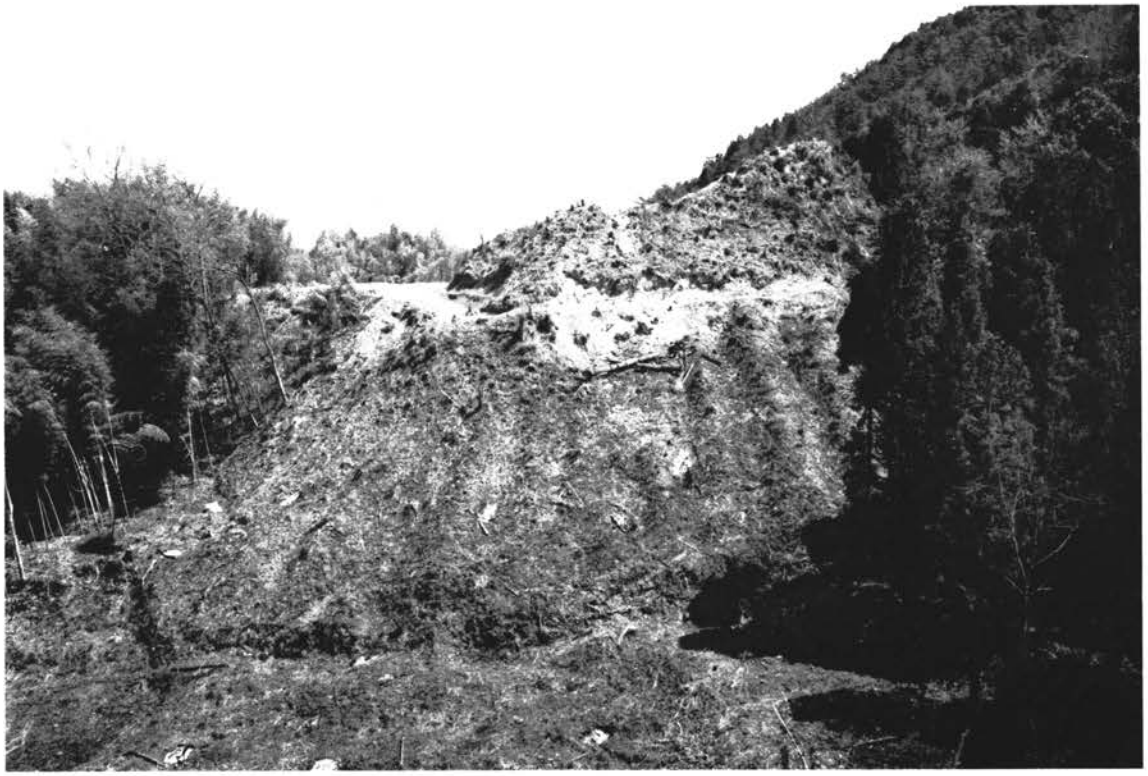
(2) 平山城跡　遺構検出状況(東から)

(1) 平山城跡　ＳＸ02検出状況(南から)

(2) 平山城跡　ＳＸ01検出状況(南から)

(1) 平山城跡　第二郭土層堆積状況(東から)

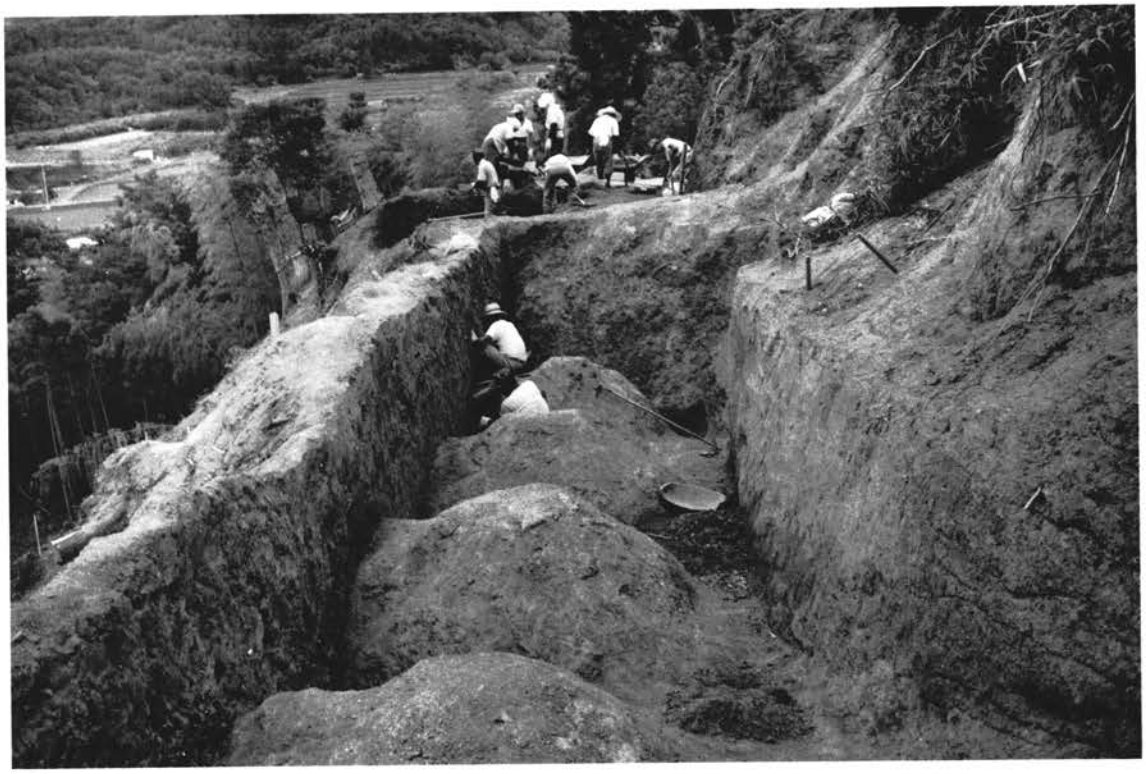
(2) 平山城跡　土塁構築状況(北西から)



(1) 平山城跡　畝状竪堀群(調査前, 西から)

(2) 平山城跡　畝状竪堀群(調査後, 西から)

(1) 平山城跡　畝状竪堀群上部・横堀検出状況(北西から)

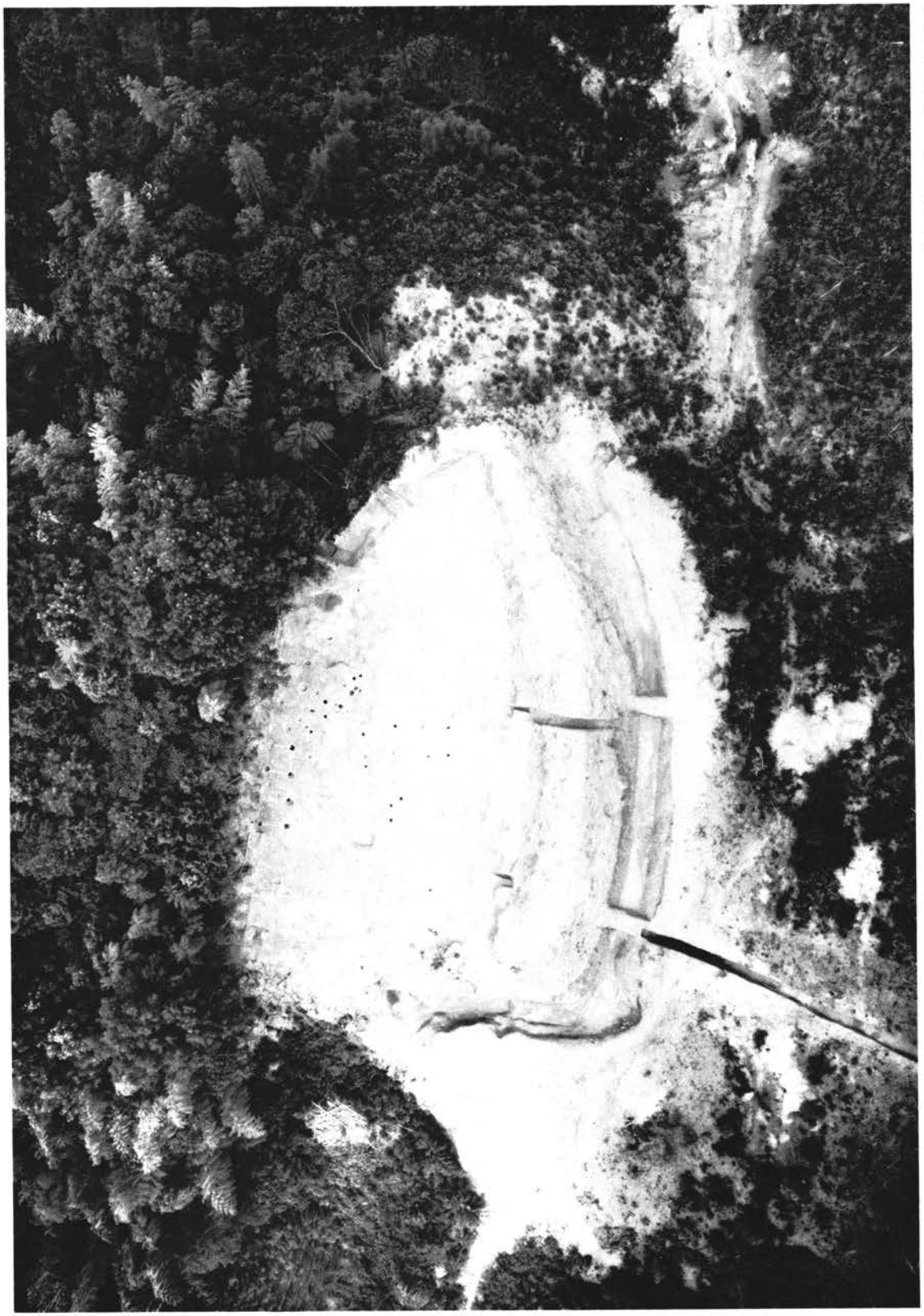


(2) 平山城跡　畝状竪堀群上部・横堀検出状況(南から)

(1) 平山城跡　畝状竪堀群流入土堆積状況(北西から)

(2) 平山城跡　竪堀12流入土堆積状況(西から)

図版第二五　平山東城跡



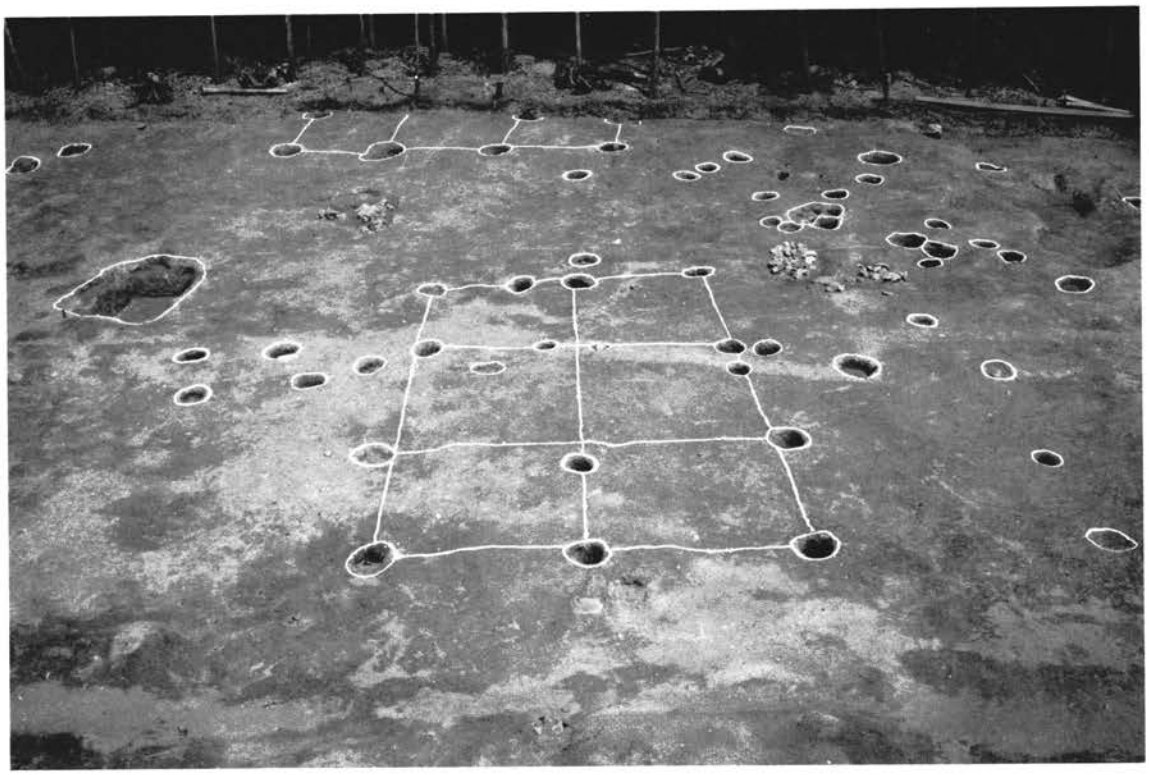
平山東城跡全景

図版第二六　平山東城跡

(1) 平山東城跡全景(南から)

(2) 平山東城跡全景(東から)

(1) 平山東城跡　遺構検出状況(南西から)

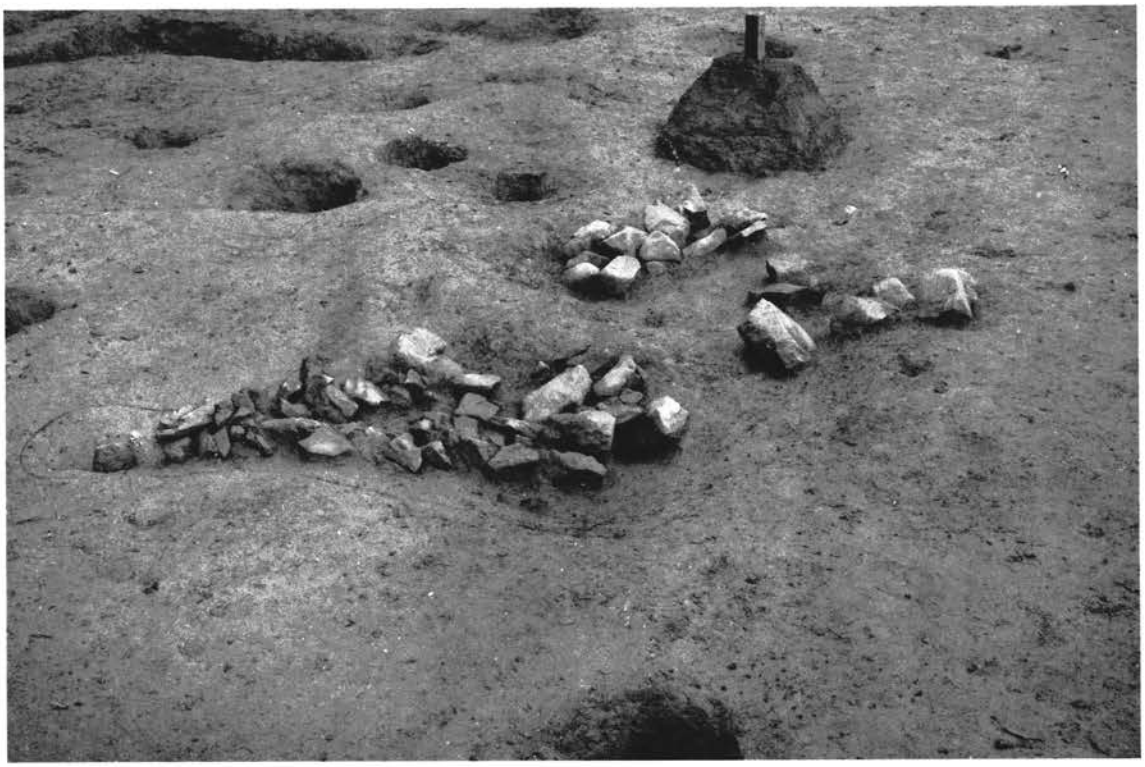


(2) 平山東城跡　建物跡ＳＢ01・ＳＢ02検出状況(南から)

(1) 平山東城跡　土坑ＳＫ01検出状況（西から）

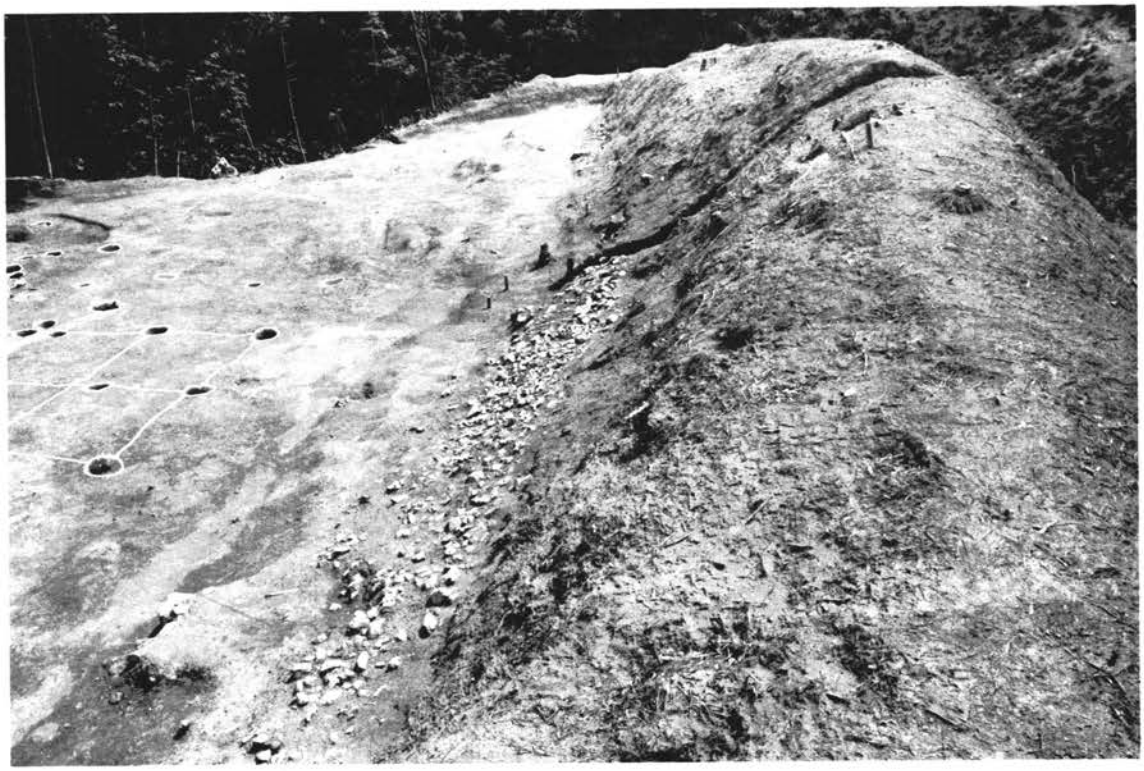
(2) 平山東城跡　土坑ＳＫ01完掘状況（西から）

(1) 平山東城跡　土坑ＳＫ02検出状況(南から)



(2) 平山東城跡　ＳＸ01検出状況(南西から)

(1) 平山東城跡　土塁(北から)



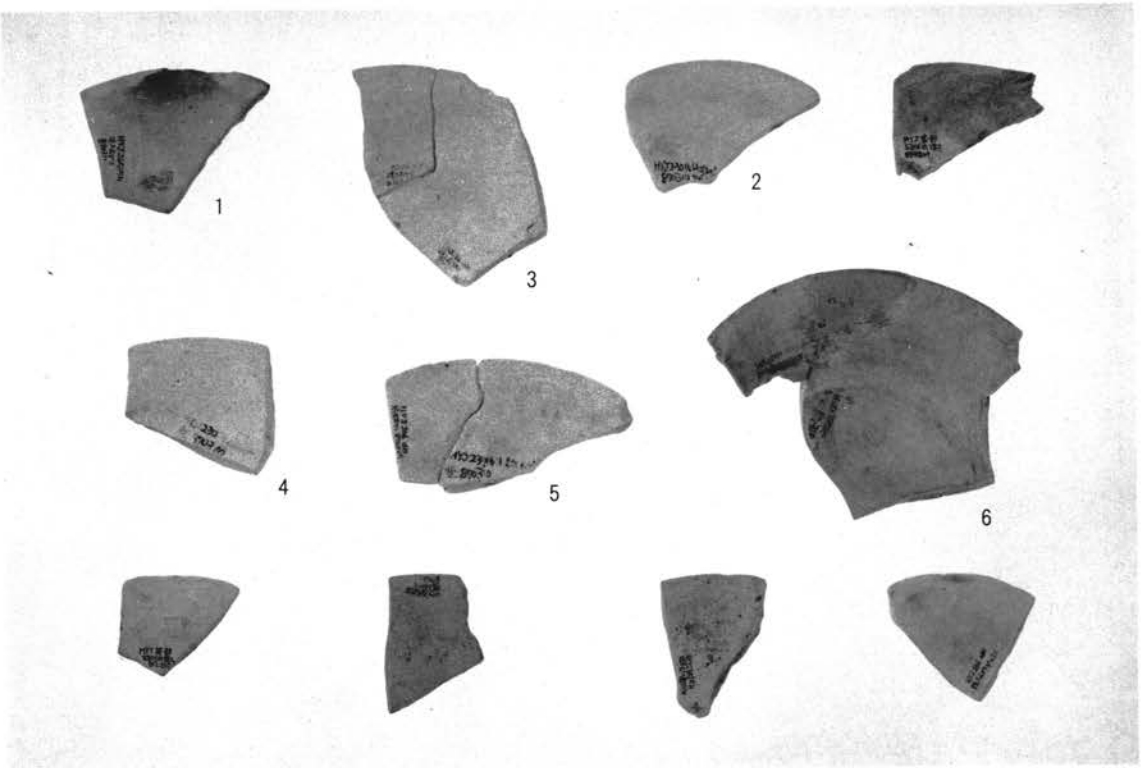
(2) 平山東城跡　土塁(西から)

(1) 平山東城跡　土塁断ち割り（北西から）

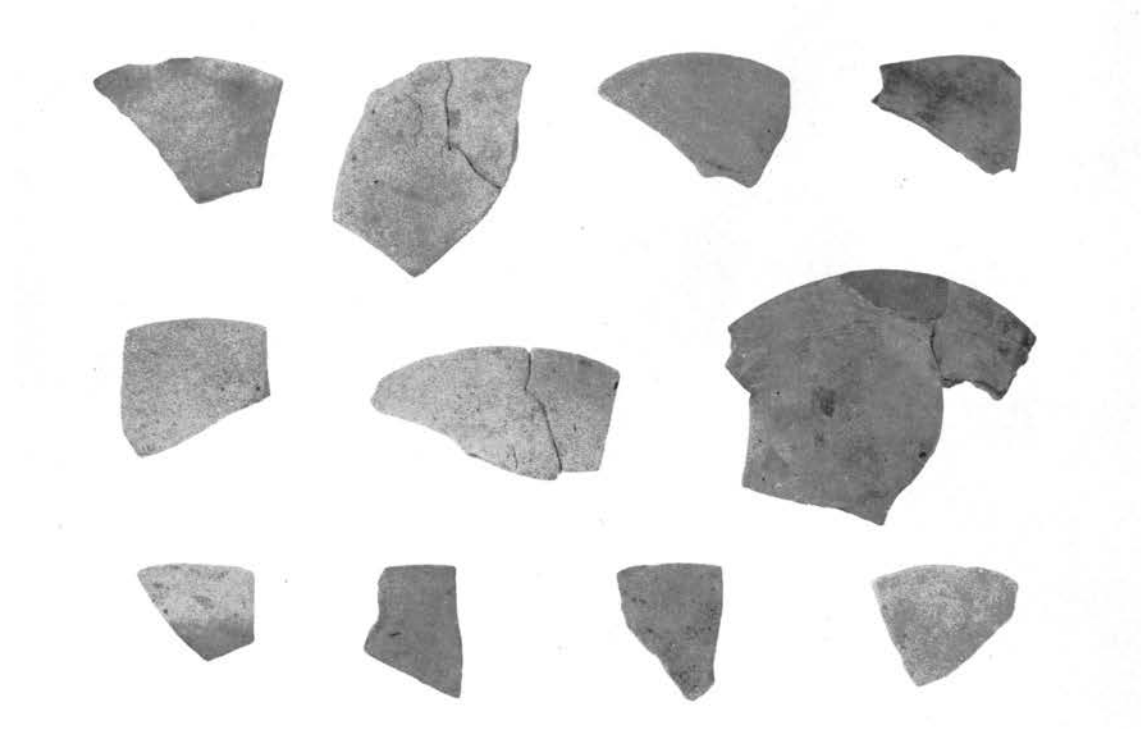
(2) 平山東城跡　土塁構築状況（北西から）

(1) 平山東城跡　空堀流入土堆積状況(Kライン, 西から)

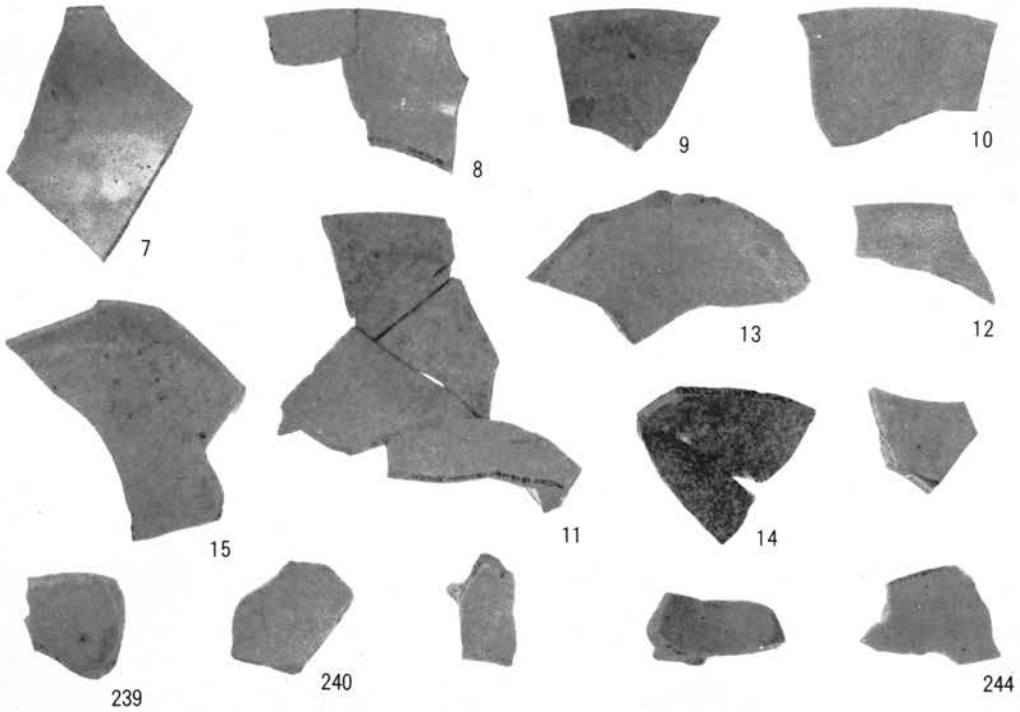
(2) 平山東城跡　空堀流入土堆積状況(Gライン, 西から)



(1) 平山城跡　建物跡ＳＢ01に伴う焼土出土遺物(土師器皿)内面

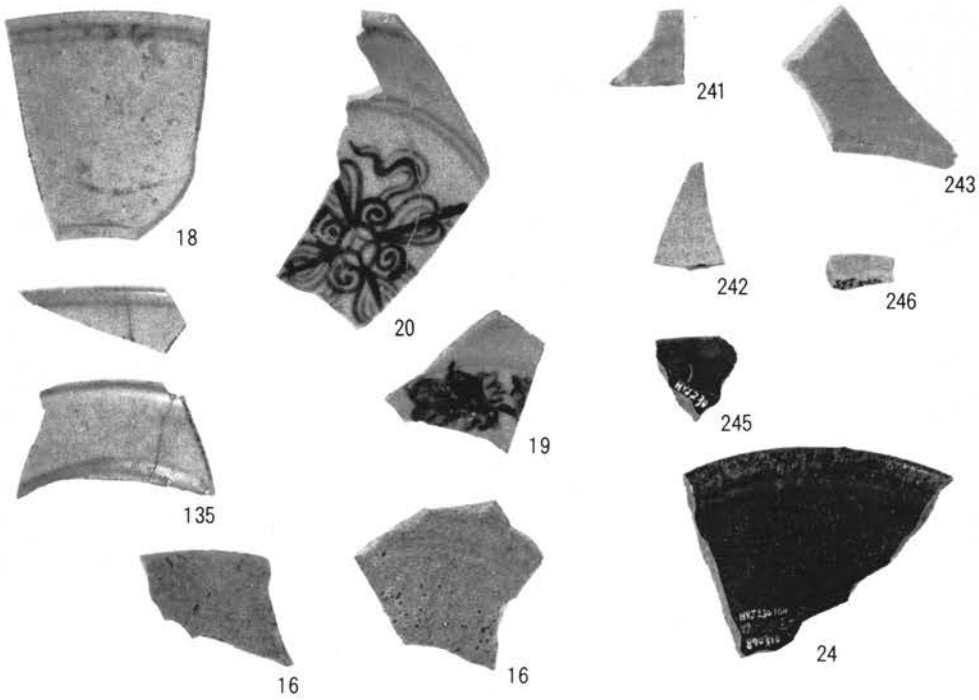


(2) 平山城跡　建物跡ＳＢ01に伴う焼土出土遺物(土師器皿)外面

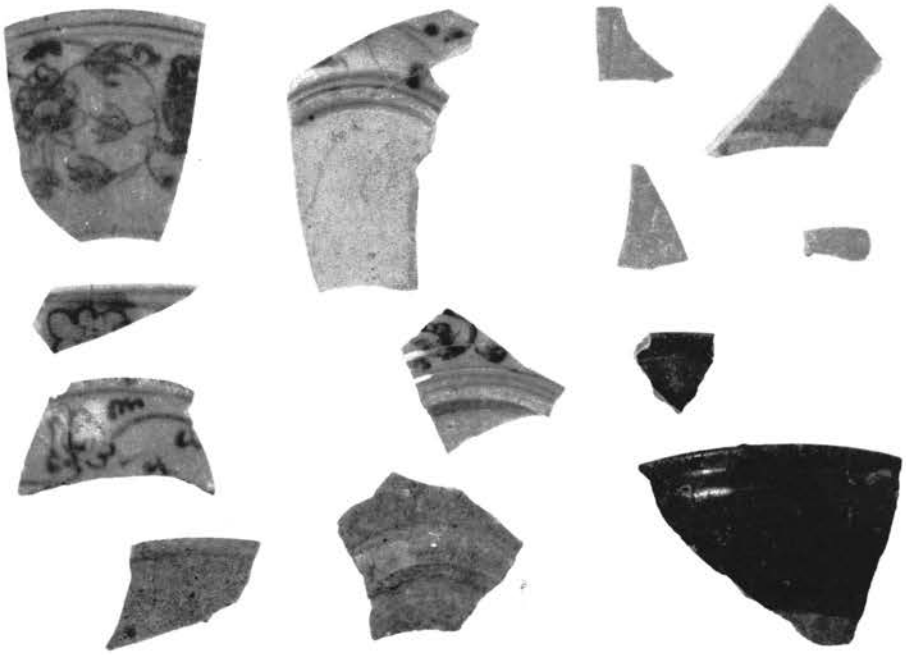


(1) 平山城跡　建物跡ＳＢ01に伴う焼土出土遺物(白磁・青白磁)内面

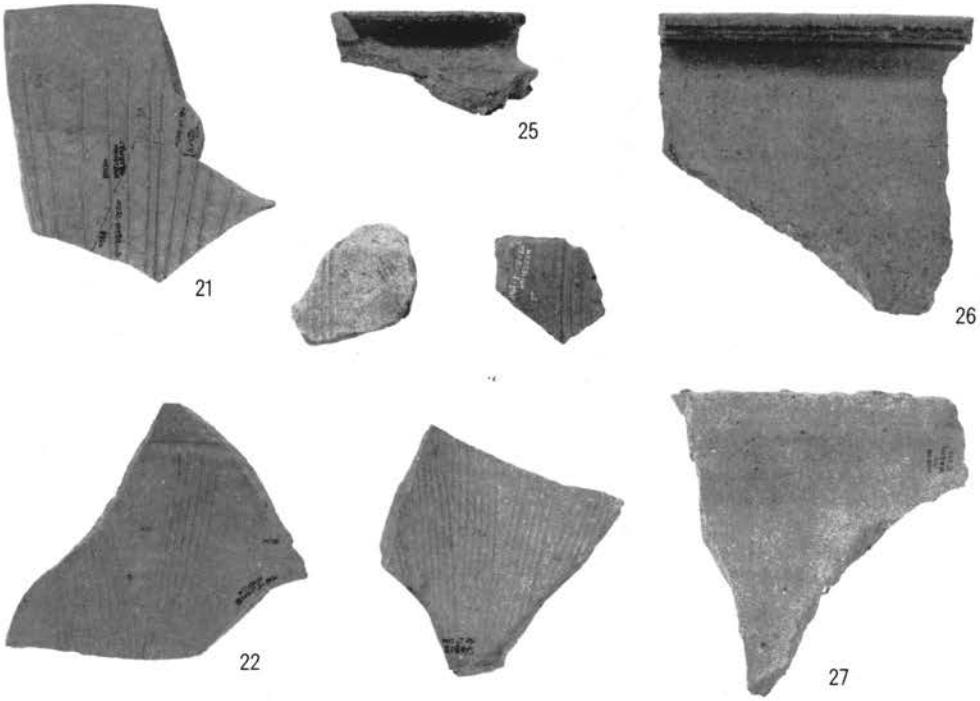
(2) 平山城跡　建物跡ＳＢ01に伴う焼土出土遺物(白磁・青白磁)外面



(1) 平山城跡　建物跡ＳＢ01に伴う焼土出土遺物(染付,青磁,瀬戸・美濃)内面

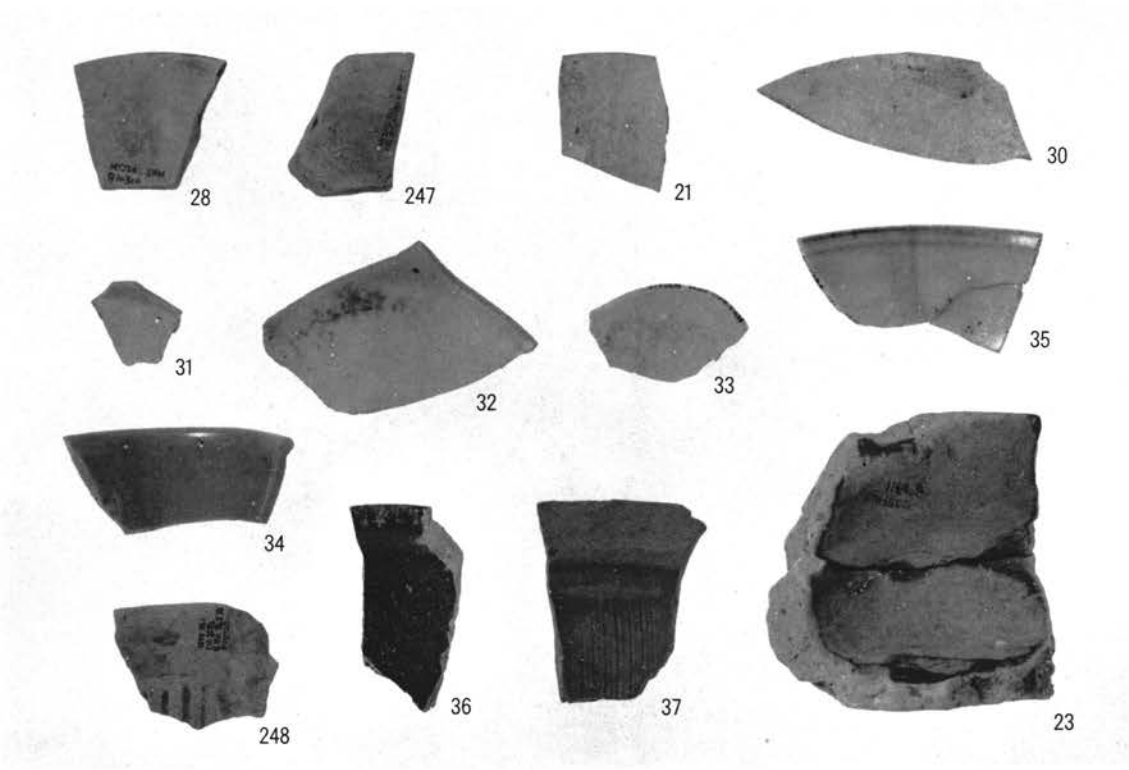


(2) 平山城跡　建物跡ＳＢ01に伴う焼土出土遺物(染付,青磁,瀬戸・美濃)外面

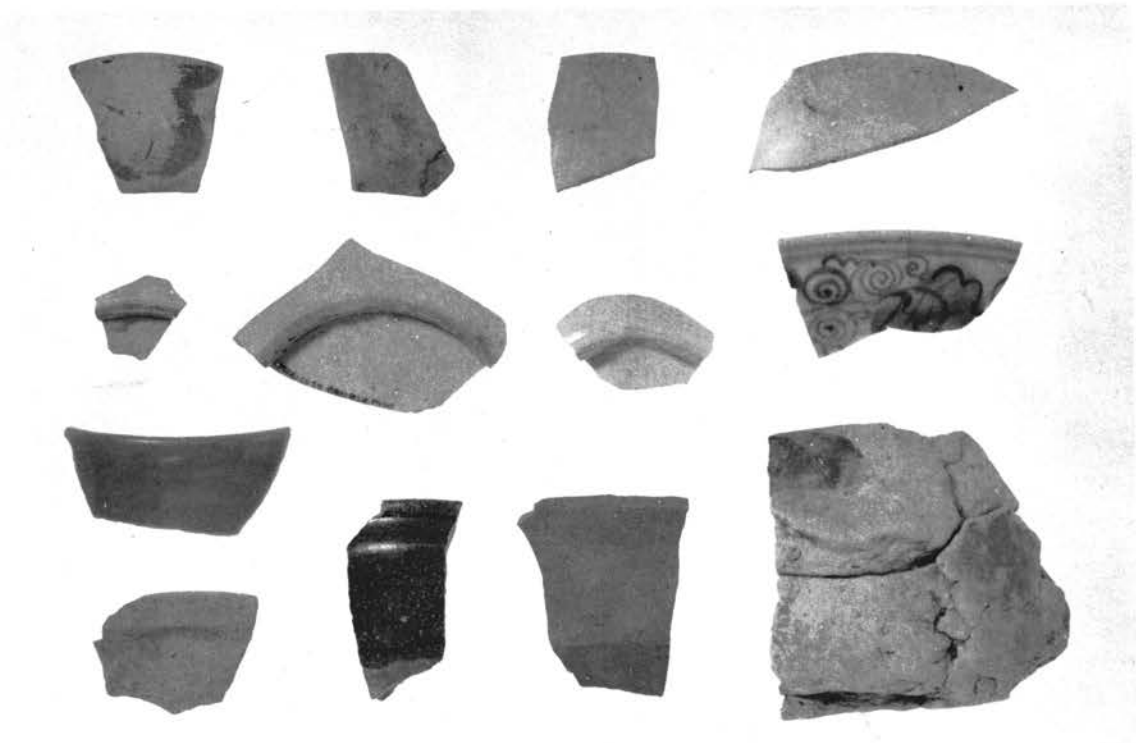


(1) 平山城跡　建物跡ＳＢ01に伴う焼土出土遺物(丹波焼・越前焼・瓦質土器)表

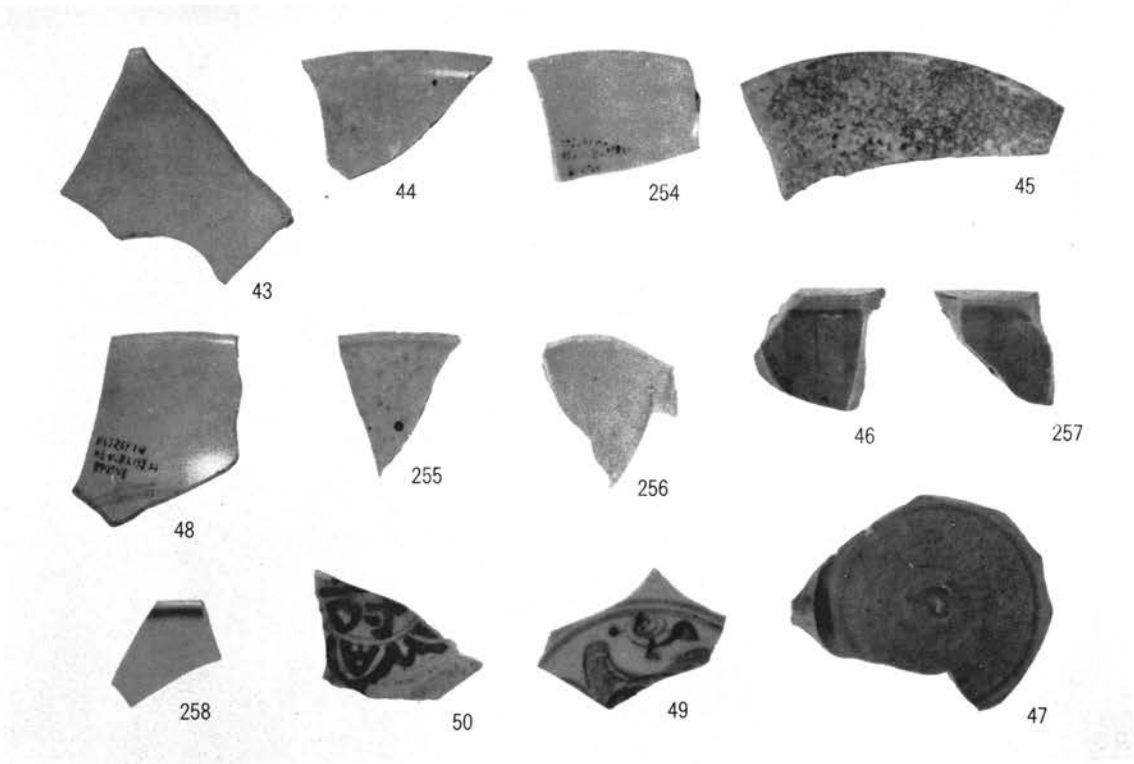
(2) 平山城跡　建物跡ＳＢ01に伴う焼土出土遺物(丹波焼・越前焼・瓦質土器)裏



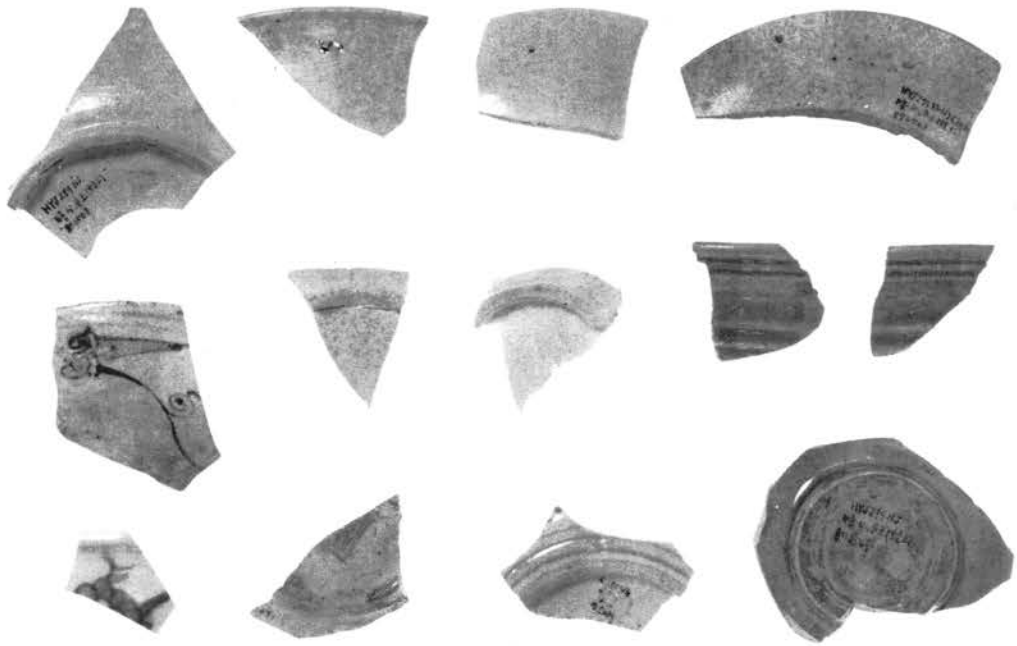
(1) 平山城跡　土坑ＳＫ01出土遺物，他　内面



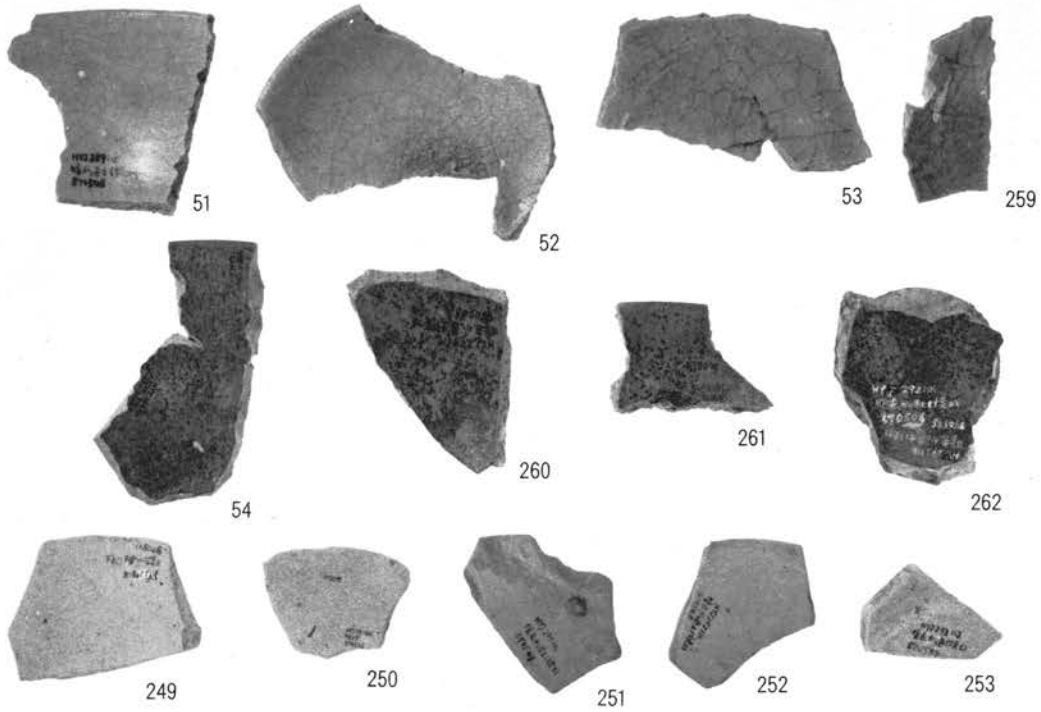
(2) 平山城跡　土坑ＳＫ01出土遺物，他　外面



(1) 平山城跡　建物跡ＳＢ04・05に伴う焼土出土遺物(白磁・青磁・青白磁・染付)内面

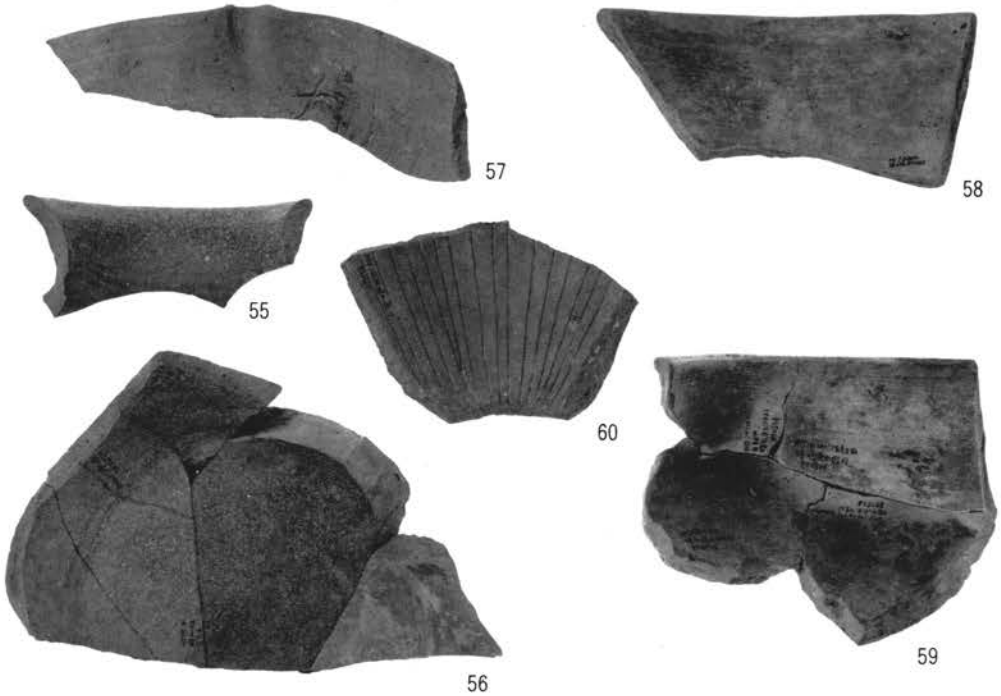


(2) 平山城跡　建物跡ＳＢ04・05に伴う焼土出土遺物(白磁・青磁・青白磁・染付)外面



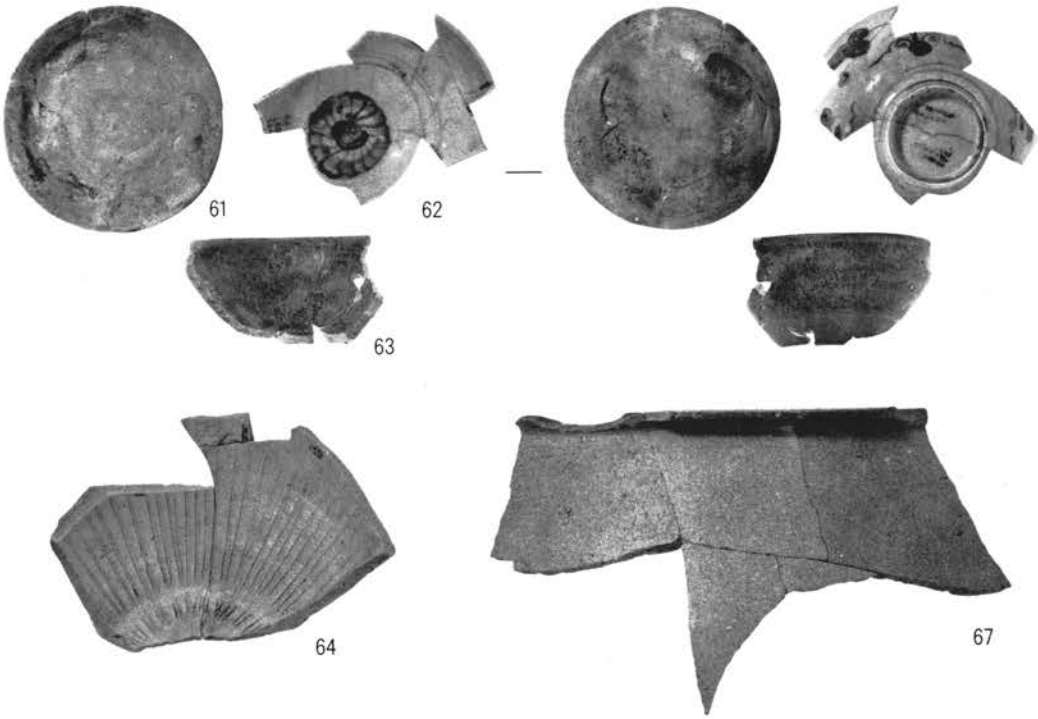
(1) 平山城跡　建物跡ＳＢ04・05に伴う焼土出土遺物(瀬戸・美濃焼，土師器皿)内面

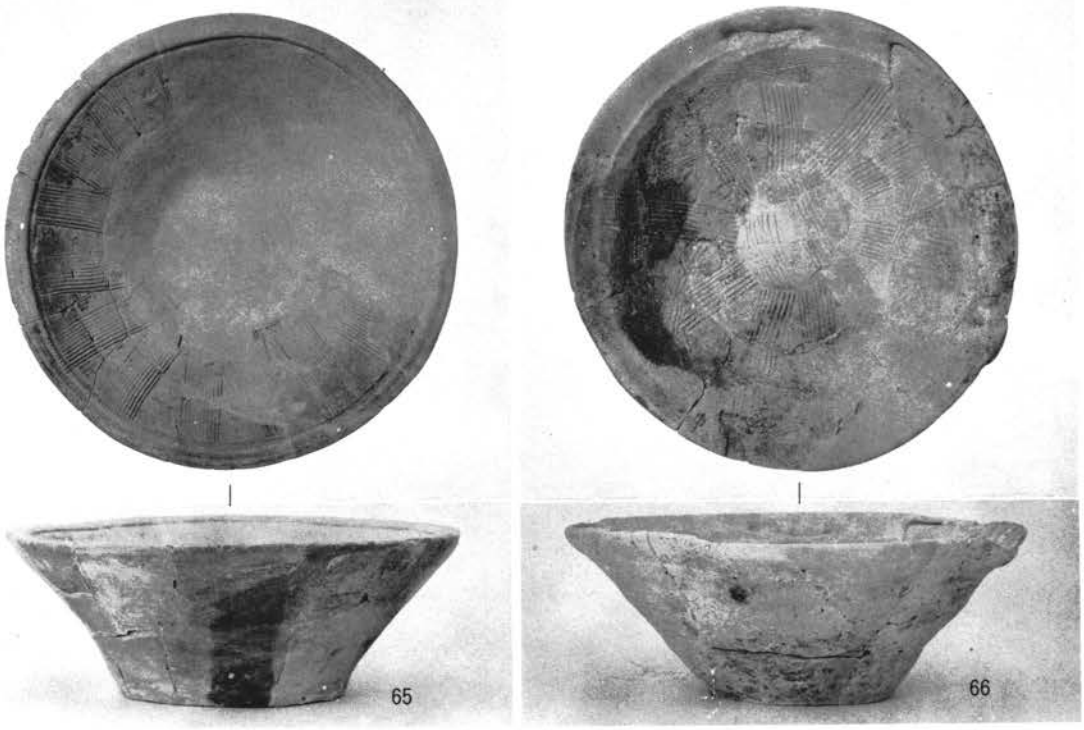
(2) 平山城跡　建物跡ＳＢ04・05に伴う焼土出土遺物(瀬戸・美濃焼，土師器皿)外面



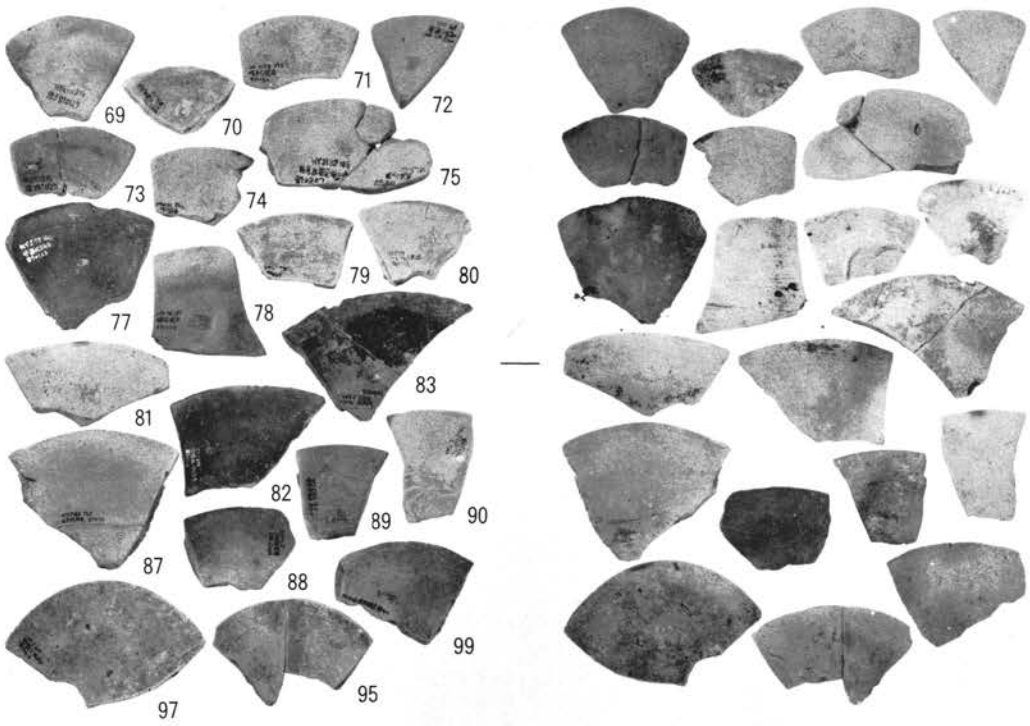
(1) 平山城跡　建物跡ＳＢ04・05に伴う焼土出土遺物(丹波焼・瓦質土器)内面

(2) 平山城跡　建物跡ＳＢ04・05に伴う焼土出土遺物(丹波焼・瓦質土器)外面

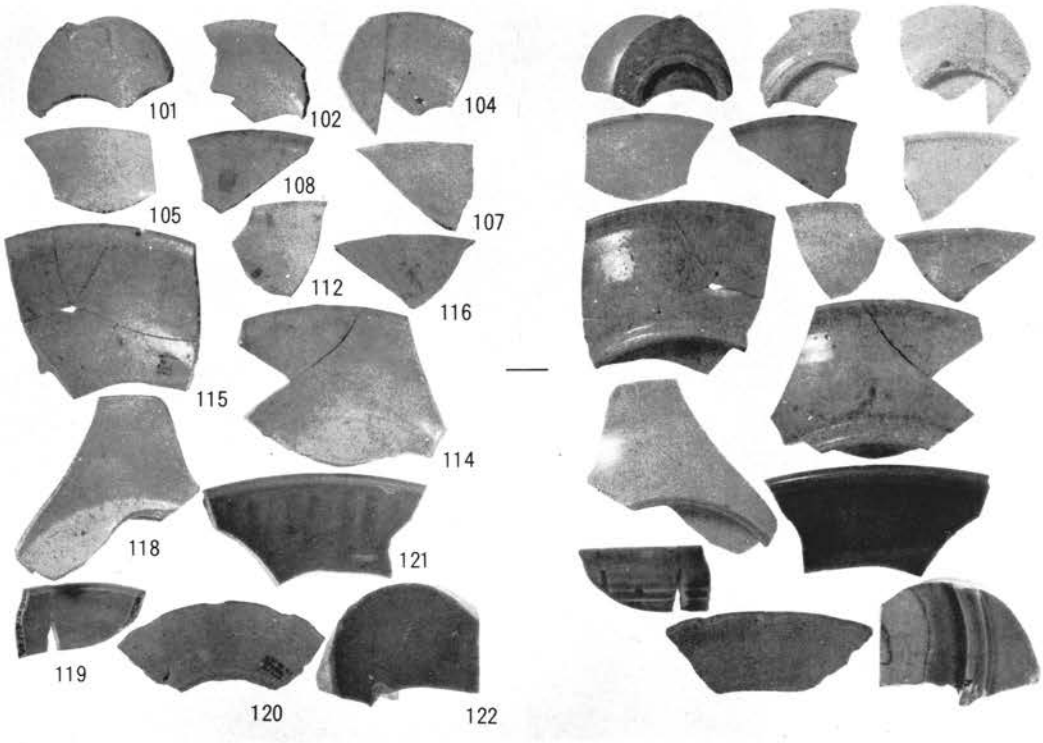




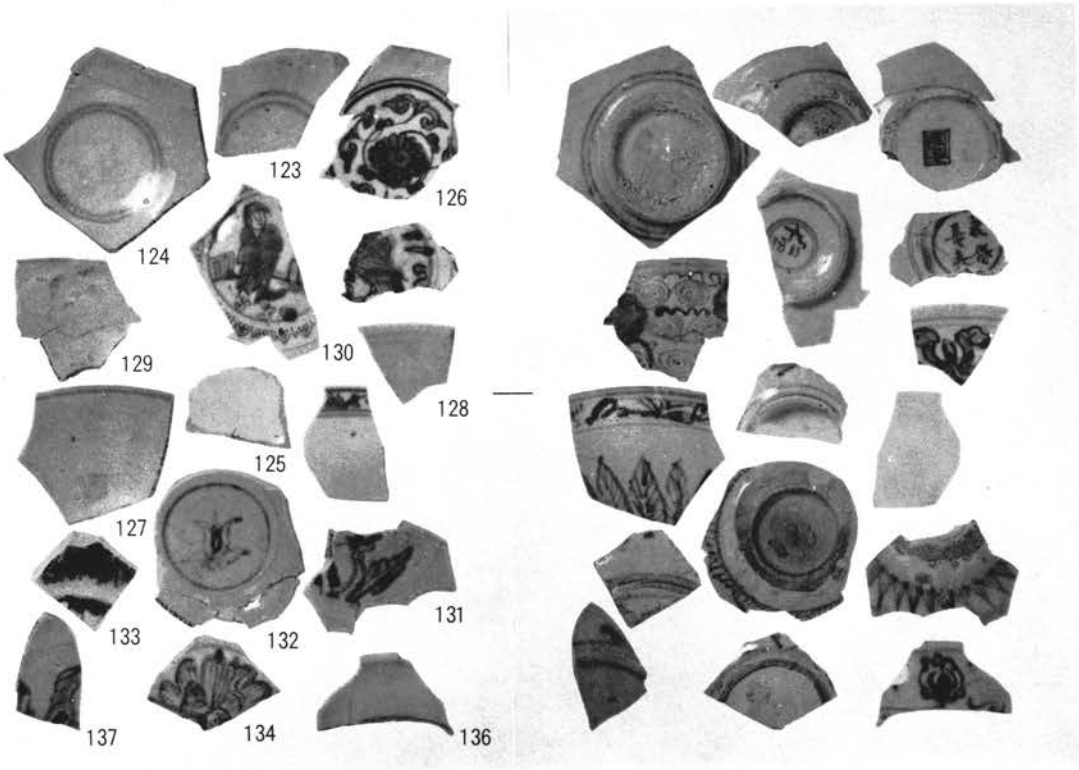
平山城跡　土坑ＳＫ04出土遺物



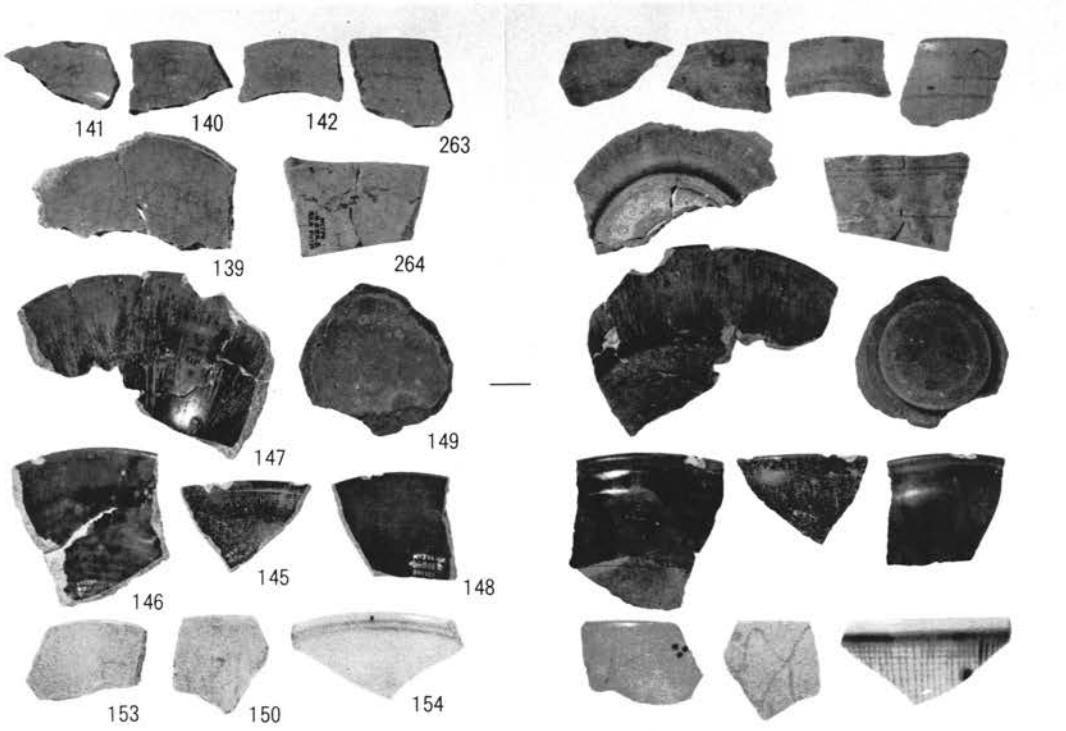
(1) 平山城跡　遺構に伴わない遺物(土師器皿)



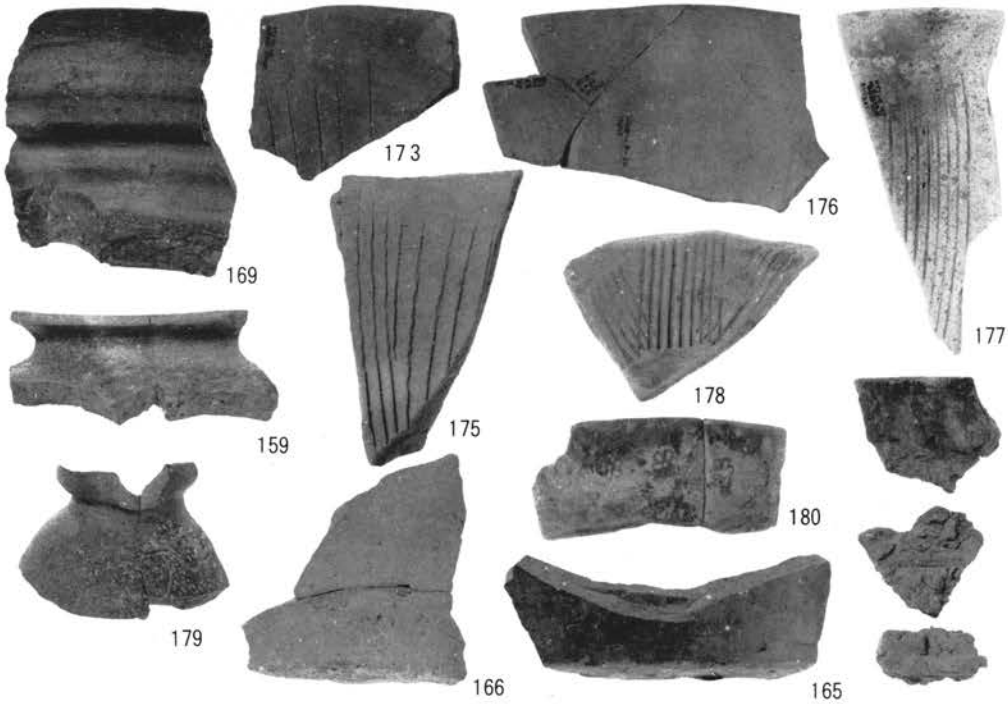
(2) 平山城跡　遺構に伴わない遺物(白磁・青磁)



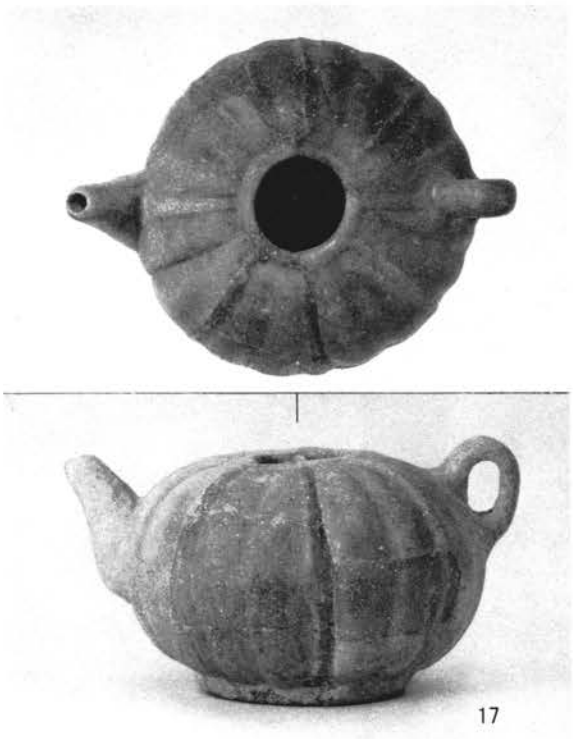
(1) 平山城跡　遺構に伴わない遺物(染付)



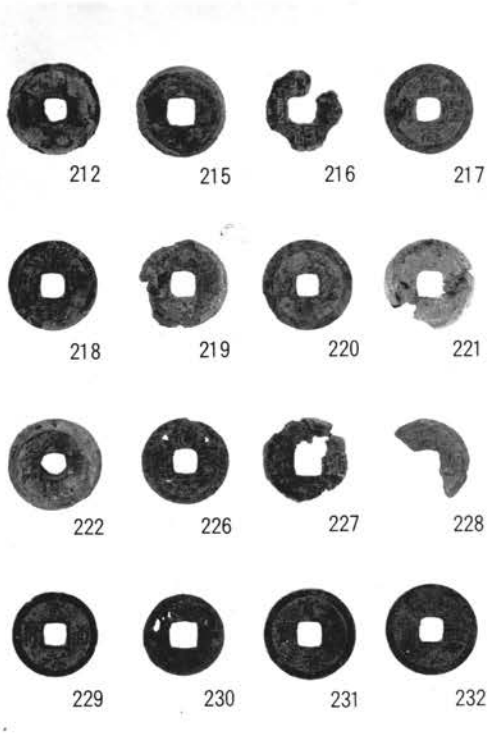
(2) 平山城跡　遺構に伴わない遺物(瀬戸・美濃,肥前磁器)



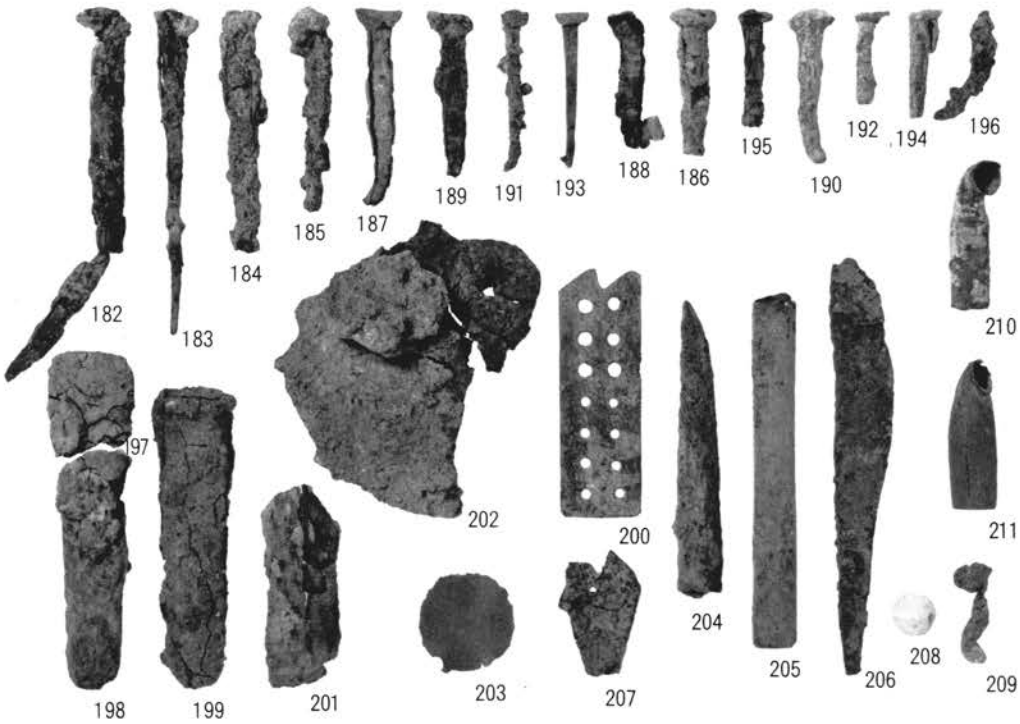
(1) 平山城跡　遺構に伴わない遺物(備前焼・丹波焼・越前焼・瓦質土器・焼け壁)



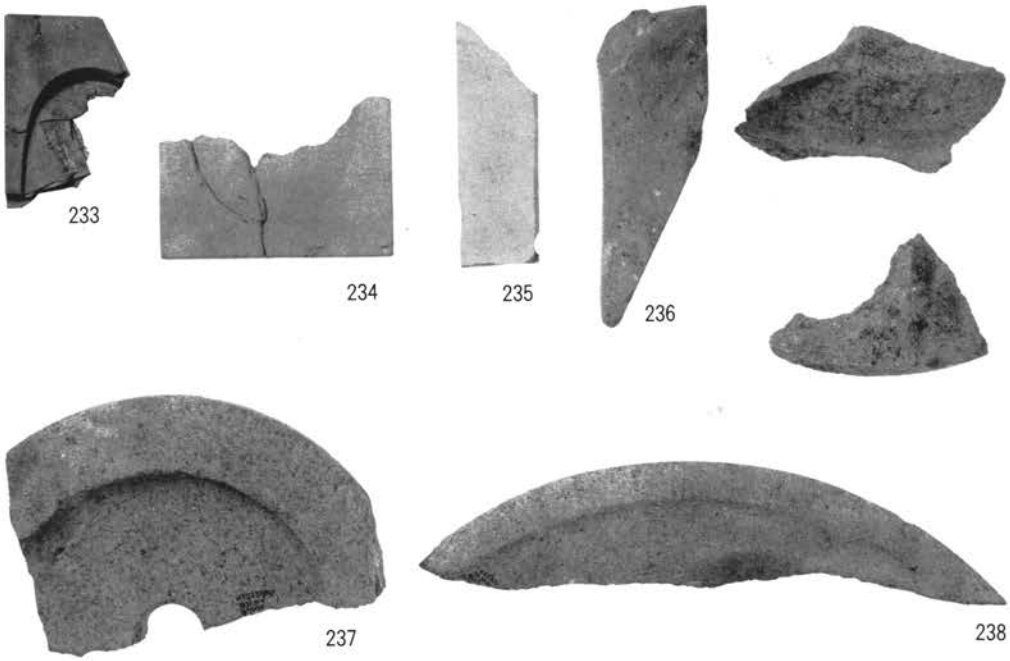
(2) 平山城跡　建物跡ＳＢ01に伴う焼土出土遺物(青白磁)



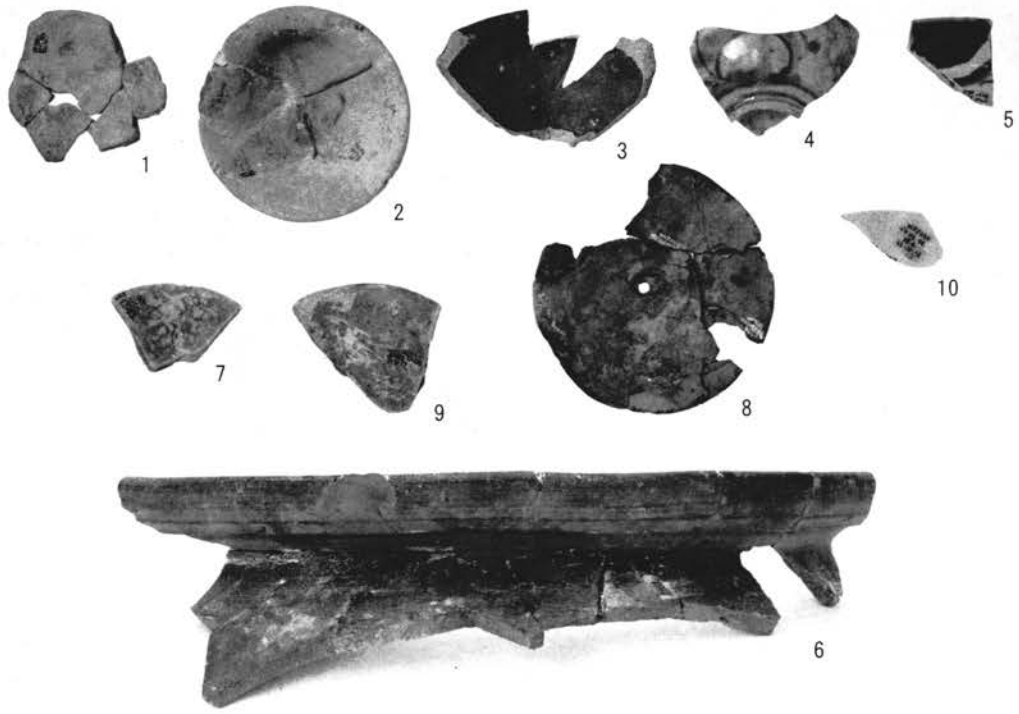
(3) 平山城跡　銅銭



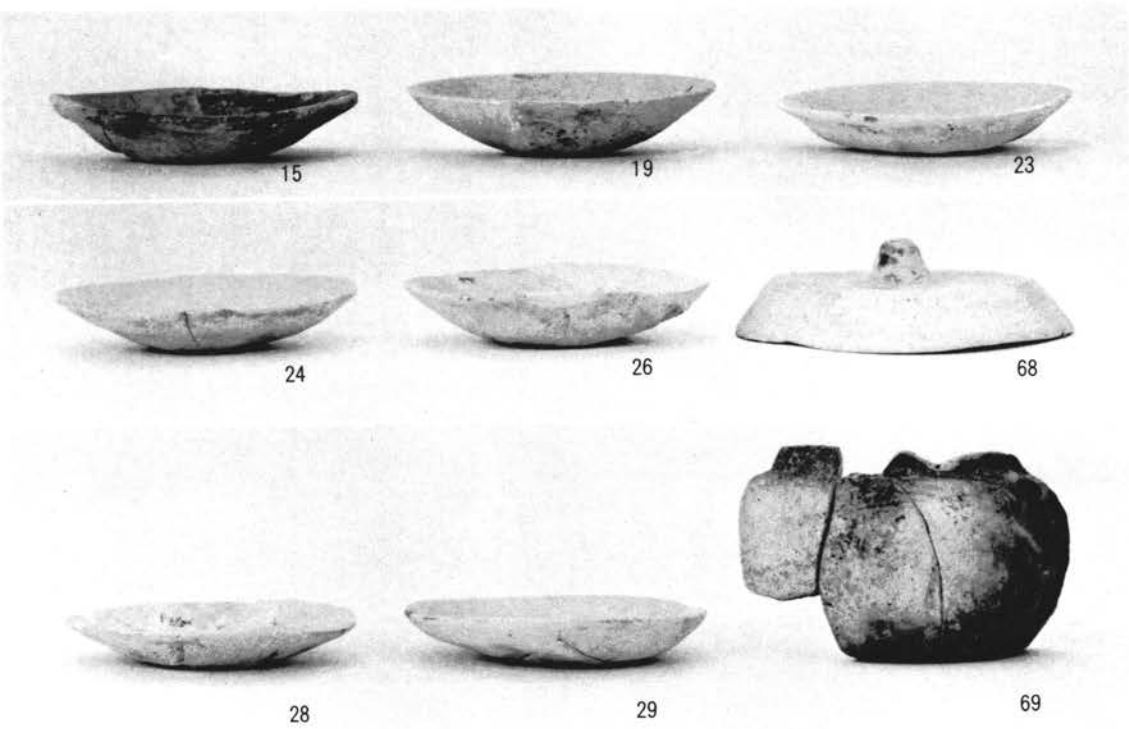
(1) 平山城跡　金属製品



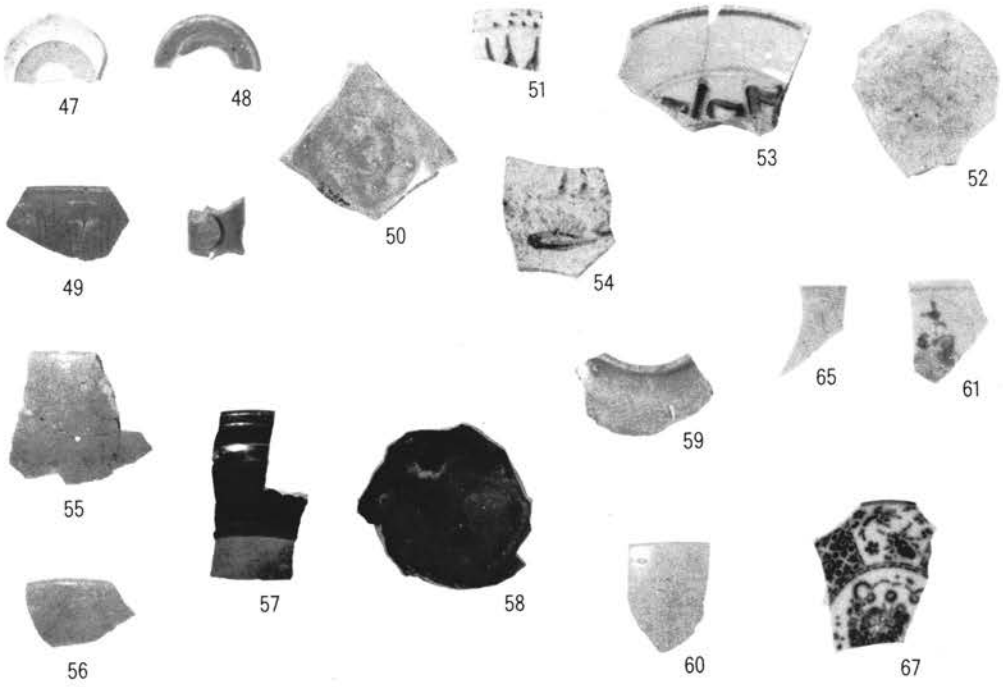
(2) 平山城跡　石製品



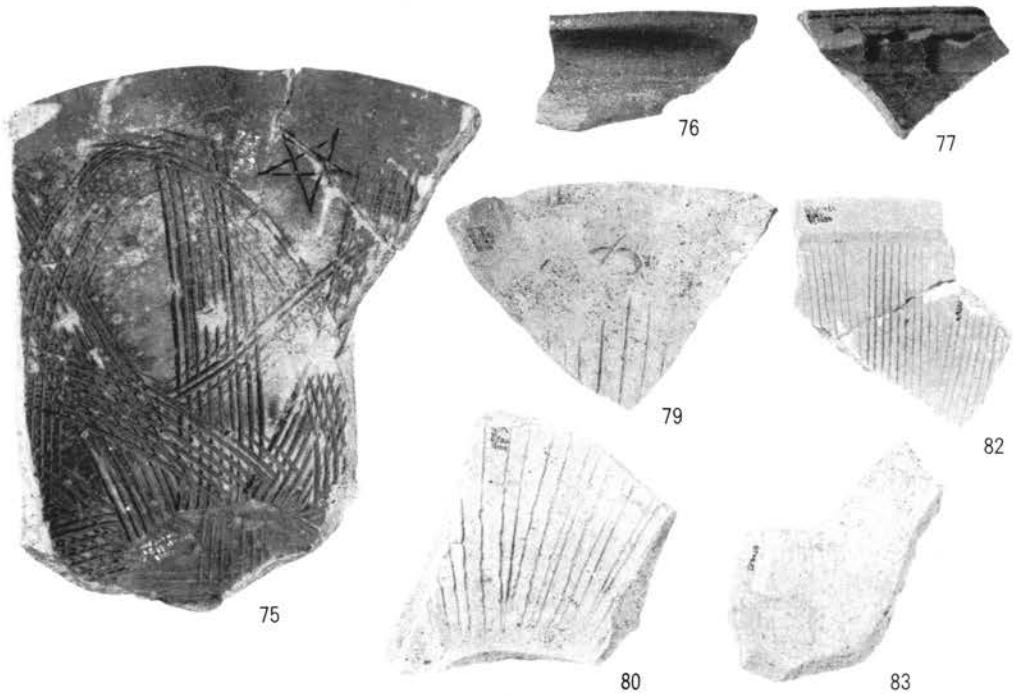
(1) 平山東城跡　遺構に伴う遺物



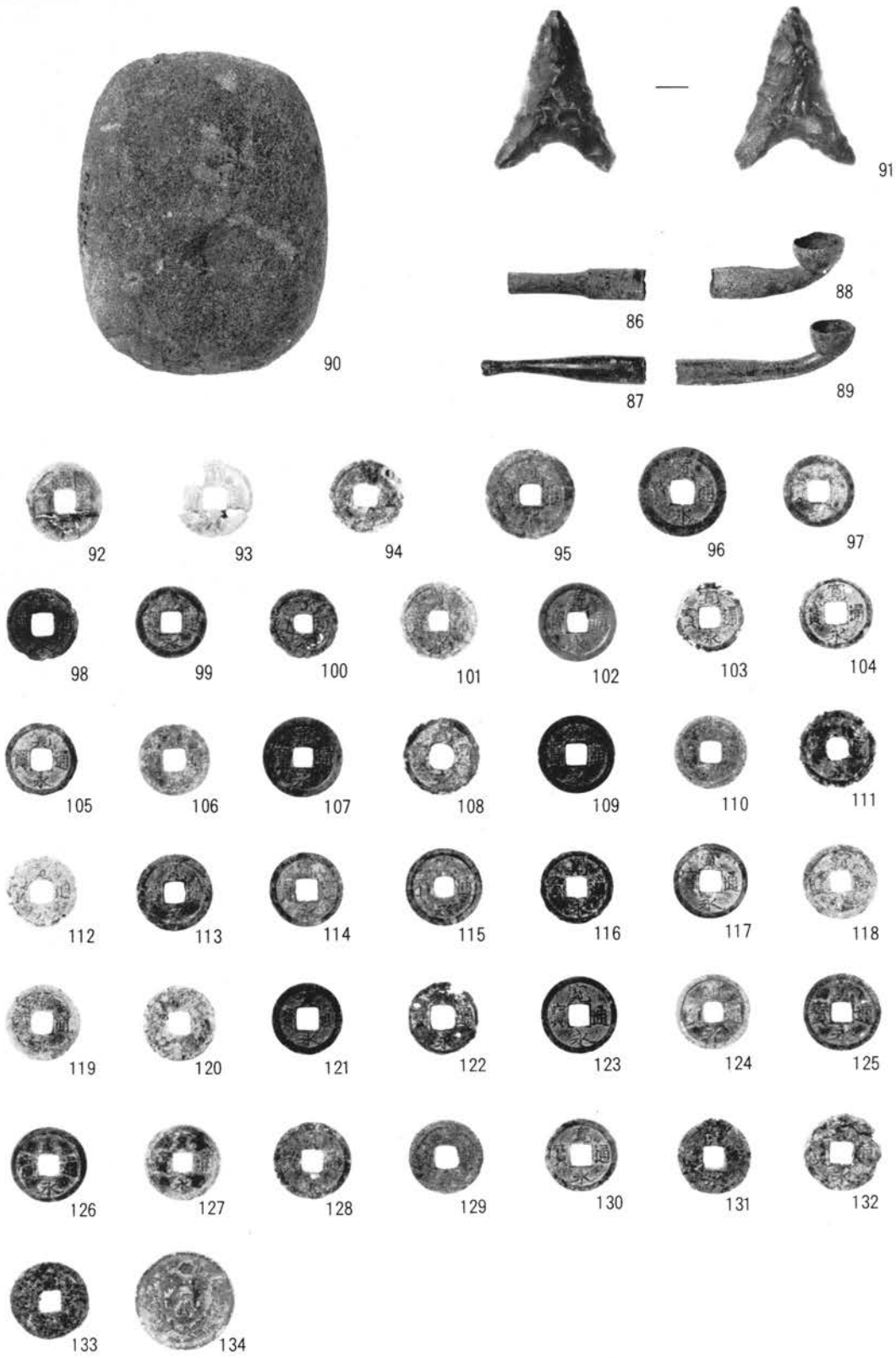
(2) 平山東城跡　遺構に伴わない遺物



(1) 平山東城跡　遺構に伴わない遺物



(2) 平山東城跡　遺構に伴わない遺物



平山東城跡　金属製品，石製品，銭貨

京都府遺跡調査報告書 第14冊

平成２年12月26日

発行　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40の３

ＴＥＬ（075）933―3877（代）

印刷　株式会社　中　村　太　古　舎

〒520 大津市京町三丁目４―32

ＴＥＬ（0775）24―4370（代）